

平成 29 年度
文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

幼児教育の質向上を目指した学校評価の推進に関する研究
ー私立幼稚園等における独自性・多様性を尊重した学校評価の在り方についてー

平成 30 年 3 月
公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

目次

はじめに	3
I. 研究の目的	4
II. 研究の方法	7
III. 研究の内容	13
1. 保育者が互いの違いを認め合いながら対話と内省を深めるための手法とその有効性	13
2. ECEQ を実施することによる効果の検証	26
3. ECEQ を幼稚園等で実施するための手立て	31
4. ECEQ コーディネーター育成の充実	35
5. 教育の質を評価するための指標の開発	40
IV. 研究の成果と今後の課題	43
おわりに	47
参考 ECEQ コーディネーターハンドブック	48

はじめに

我慢する、自分の意見と相手の意見を調整してどのあたりを妥協点とするか、どれだけ継続して課題に取り組むことができるかといったいわゆる非認知能力、あるいは社会的情動スキルが注目されています。これらの力が何となく大切だという認識は昔からあったのですが、子どもが大人になって社会で活躍し、安定した生活を送ることができているかどうかといった視点から調査すると、小学校時代の学力以上に、その子供の将来と深く結びついていく能力であることが近年徐々に明らかにされ脚光を浴びるようになってきています。

従来、社会で成功するためには、よい大学を出ることが条件のように考えられてきました。そして、そのような大学に入学するために、幼少期から継続して勉強をすることが社会人としての成功の条件として考えられてきたのですが、上記のように、社会で必要なスキルが幼児期、特に小学校入学前の幼児教育が社会で役に立つ人材育成に欠かせない条件として世界的に注目を浴びるようになってきました。日本も遅ればせながら、幼児教育の無償化など幼児教育の重要性を国の課題として認識した施策が実施されてきています。

このような流れが強くなると、当然、“子供にとってよい幼児教育とは”という課題に突き当たります。従来、学校教育法第一条で、学校種を規定する際に、幼稚園は“及び幼稚園”として、学校教育体系にありながら、他の学校種との違いを強調してきた歴史がありますが、現在では、学校教育法において幼稚園から始まり、そのことは世界共通の理念にもつながっています。

子供にとって大きな影響を与える幼児教育は、どういう教育を行なうことが子供にとってよい教育なのかを、真摯に突き詰め常に自己改革をしていかなければなりません。このような時代の流れに沿って、幼児教育機関である“幼稚園”や“認定こども園”の評価が重要になってきます。全日本私立幼稚園幼児教育研究機構では、世界で行われている、“指標”を基にした評価ではなく、“多くの人の意見の集合体”としての評価の在り方を模索してきました。そして、文部科学省の委託研究事業を通して、その成果を少しずつ改善しながら一定の成果を上げる段階までこぎ着けることができました。まだまだ、不十分なところもありますが、これからも常に新しい評価の在り方を求め、また、園運営のリーダーとなる園の指導者の在り方を追求して、日本の幼児教育発展のために寄与できればと考えています。

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長 田中 雅道

I. 研究の目的

本研究は、私立幼稚園等（以下「幼稚園等」という）における独自性・多様性を尊重した学校評価の推進という視点から、私立の幼稚園教諭等（本稿においては幼稚園等における幼稚園教諭と幼保連携型認定こども園における保育教諭をまとめて「保育者」とする。）がそれぞれの園の違いを認め合いながら対話と内省を深めるための手立てや教育の質を評価するための指標を開発し、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（以下「本財団」という）が推進してきた自己評価支援システム「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム^{イーセック}（ECEQ）」を充実させることによって、幼稚園等の教育の質向上を図ろうとするものである。

幼稚園等において学校評価を推進し園運営の改善や教育の質向上を図ることは、公的な教育を担う幼稚園等として、園の活性化や信頼され魅力ある園づくりにつながるものと考え、本財団においても研究事業等を通じて幼稚園等における学校評価を推進してきたところである。

平成 20 年度より文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究（以下、文科省委託事業とする）」に取り組み、平成 22 年度文科省委託事業においては、保育所の第三者評価のような書面上での定量的な評価だけでは、保育の質の向上、特に保育のプロセスの質の向上は難しいことから、保育の観察も含めた評価が望まれるということが明らかになった。

そこで、平成 23 年度文科省委託事業において、第三者評価の手法として公開保育を取り入れた結果、保育の質の向上、保育者の関係性の改善との有効性が高く、第三者の目を通して保育を見ることで園の良さや課題を客観的に認識できた。しかし、公開保育とその後のカンファレンスだけでは課題の解決は難しく、解決に向けての支援が必要であることが明らかになった。このことを受けて、公開保育を活用した第三者評価の取組を支援する「公開保育コーディネーター」の必要性が浮かび上がった。

平成 24 年度文科省委託事業では、公開保育コーディネーターに求められる資質として「教育・保育についての理解」「運営についての理解」「ファシリテーションについての理解」の 3 つをあげるとともに、公開保育を活用した第三者評価の取組における公開保育コーディネーターの役割について明らかにした。

平成 25 年度文科省委託事業では、公開保育を活用した学校評価の一連の流れや公開保育実施園に寄り添いながら支援を行う公開保育コーディネーターの役割について具体的に示した「公開保育コーディネーターハンドブック」を作成した。さらに、公開保育コーディネーター養成講座を創設し、1 年間のカリキュラムの下、公開保育コーディネーターの養成を開始した。

公開保育を活用した学校評価実施支援システムの研究を進める中、公開保育実施園を対象に行ったアンケート調査により、公開保育を活用したこの手法が園の良さや課題を明確にし、方向性を示してくれるものとして、保育の質向上に有効であることが明らかになった。しかし、公開保育実施園が公開保育やコーディネーターによる園内研修等の機会を得たとしても、その後も継続して学校評価を推進し教育の質向上を図るためには、園長や主任等のリーダーシップが非常に重要であることが分かった。

そこで、平成 27 年度文部科学省委託事業では、リーダーとしての園長等の資質向上につながるカリキュラムを構築し研修を実施した。また、第三者評価の一手法として「幼稚園・幼保連携型認定こども園における評価実施試行例」を作成し、それを基に認定こども園の第三者評価を実施した。この第三者評価は、公開保育を活用した学校評価支援システムを包括

した形で実施するものであり、外部の専門家である複数の評価者が公開保育コーディネーターと連携しながら、保育のプロセスの質についての評価と本財団が定める評価項目による網羅的な評価を総合して評価するものである。

平成 28 年度委託事業では、保育者によるリフレクションやリフレクティブ・マネジメントを支え高めるための手法及びそれらに係る人材の育成、特にリフレクティブ・マネージャーの育成手法等について研究を行なった。この調査研究において、公開保育を活用した学校評価支援システムを実施することにより、保育者間において教育・保育についての振り返り（リフレクション）をする機会が増えたり、各園におけるミドルリーダーが振り返りの場でコーディネーター的な役割を担うようになってきたりしていることが明らかになった。また、保育者が自らの課題を発見し、外部の視点も取り入れながら、同僚との対話を重ねてその解決策を導き出し、改善に向けての取組をするようになるなど、公開保育を活用した学校評価支援システムがリフレクティブ・マネジメントの活性化やリフレクティブ・マネージャーの育成に有効であることが明らかになった。また、このシステムを実施することにより、教育課程を改善する端緒となった幼稚園等もあった。

以上のような成果とともに、更なる課題が見出されてきた。この学校評価支援システムを実施する上で重要な役割を担う公開保育コーディネーターの知識や技量は、個人の力量に委ねられている部分が多い。そのため、公開保育コーディネーターの資質向上を目的とした養成カリキュラムの充実が求められる。また、このシステムの核となる公開保育は、外部の視点を導入することで、公開保育実施園の自己評価の質を高める重要な場であるが、それぞれの建学の精神の下多様な特色ある教育を実践している私立幼稚園等の保育者が、公開保育の分科会（協議会）において、互いの違いを理解し認め合いながら、教育の改善に繋げる対話を深めるためには、共通に理解し合うための手立てや足場が必要となってくる。その手立ての一つとして、公開保育時に公開保育実施園から公開保育参加者へ投げ掛ける「問い」というものに着目し、「問い」を活用する意味や有効性について明らかにする必要がある。また、幼児教育の重要性が高まる中で、多様な幼稚園等が同じ位置に立って教育を評価するためには、教育の質を評価する指標が不可欠である。それらの指標を開発することによって、公開園と公開保育参加者の対話が深まり、その結果公開園の教育の質向上に繋がるものと考ええる。

そして、実効性のある学校評価システムの確立に向けては公開保育を行うことによって公開保育実施園のみならず公開保育の参加者にどのような効果があるのかを明らかにする必要がある。さらに、全国の幼稚園の学校評価の在り方を改善するためには、私立幼稚園関係者のみで行う公開保育にとどまらない公開保育の在り方が求められる。

このような課題を踏まえて、平成 29 年度は幼稚園等における独自性・多様性を尊重した学校評価の推進という視点から、次のような目的で研究事業を実施した。

なお、今年度から「公開保育を活用した学校評価支援システム」を「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」Early Childhood Education Quality System の頭文字をとって ECEQ（イーセック）と改名し、それに伴い「公開保育コーディネーター」を「ECEQ コーディネーター」と呼ぶこととした。

本研究の目的は以下の通りである。

1. 保育者が互いの違いを認め合いながら対話と内省を深めるための手法とその有効性について明らかにする

2. 「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム(ECEQ)」を実施することによる効果を明らかにする
3. 「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム(ECEQ)」を幼稚園等で実施するための手立てとなる「ECEQ 実施園ハンドブック」等を作成する
4. ECEQ コーディネーター養成カリキュラムを改善し、ECEQ コーディネーター育成の充実を図る
5. 教育の質を評価するための指標を開発する

Ⅱ．研究の方法

幼稚園等が質の高い教育実践をしていくためには、「目標 Plan」「実行 Do」「評価 Check」「改善 Action」といった一連の PDCA サイクルに基づいて継続的な教育改善を行なっていくことが重要である。その鍵となるのが各園における自己評価であり、現状としてはその自己評価がうまく機能せず、園としての良さや課題が明確になっていない園も多く見受けられる。そのような園においては、保育者が会議や園内研修に主体的に参加できていないことや実践の振り返りができていないこと等を課題と挙げつつも、どのように改善していけばよいか困惑しているのが現状である。また、現在、乳幼児施設等で実施されている第三者評価においても、外部の専門家による評価で外形的であるという指摘があり、幼児の育ちにおいて最も重要である教育実践の内容やプロセスについての視点が不十分である等、実際の現場における教育の質の向上に至るまでの課題は山積しているように見受けられる。

そのような現状を踏まえ、本財団では、幼稚園等が公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の実践の質向上につなげていくシステムの開発を進めてきた。それが、ECEQ^{イースェック} (公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)である。

ECEQ の取組の流れは次の通りである。なお、幼稚園における幼児、幼保連携型認定こども園における園児をまとめて「子供」とする。

段階	ECEQ コーディネーター	ECEQ 実施園
事前	本財団より ECEQ コーディネーターの依頼を受けた後、チームとなる複数の ECEQ コーディネーターと ECEQ 実施園への訪問日程等について調整	本財団の所定様式にて申請手続きを行い、ECEQ コーディネーターの派遣を要請
STEP 1	ヒアリング・打ち合わせ	
	①園長・主任等に対するヒアリング ②今後の日程等についての打合せ	①ECEQ コーディネーターによるヒアリング ②今後の日程等についての打合せ
STEP 2	事前研修	
	保育者によるワークの実施 ・話しやすい雰囲気作りのためのアイスブレイク ・園の良さや課題の整理	保育者による田の字ワークの実施から、自園の良さや課題を整理
STEP 3	公開保育へ向けての準備	
	①ECEQ 実施園が課題として捉えた視点を参加者と共有するための「問い」作り（園・学年・個々の保育者）の支援 ②公開保育当日の日程等や準備するものについての打合せ	①園の課題を参加者と共有するための「問い」作りへ向けての園内研修の実施 ②公開保育当日の日程等の打合せと資料や会場等の準備
STEP 4	公開保育当日	
	公開保育全体への支援 ①オリエンテーションで挨拶 ②公開保育へ参加	公開保育の運営 ①会場準備 ②オリエンテーション

	③保育後の分科会でファシリテーターとして参加者から問いへの意見や感想等の整理⇒良さ・課題等の整理 ④全体会での進行等	③保育の公開 ④保育後の分科会への参加 ⑤全体会への参加
STEP 5	振り返り	
	①参加者からの「問い」への意見や感想等を基に、課題に応じた園内研修への支援 ②実施園アンケートを配布	参加者からの「問い」への意見や感想等を基に、課題に応じた園内研修の実施
STEP 6	報告書の作成	
	①ECEQ 実施園からの実施記録を基に報告書の作成 報告の視点 ・園の良さや課題に関する視点 ・課題解決に向かう園の姿勢や同僚性に関する視点 ・幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育活動や運営に関する視点 ②ECEQ コーディネーターが作成した報告書と実施園からの実施記録を本財団へ提出	STEP5終了後 ○STEP2からSTEP5の実施記録を ECEQ コーディネーターへ提出 ○実施園アンケートを園内で実施し、本財団へ郵送 ○当年度末に本財団より「公開保育を活用した幼児教育の質向上の取組」を実施した ECEQ 認定証の送付

この一連の取組の中で核となっているものが ECEQ 公開保育である。普段通りの保育場面を他園の複数の保育者が見学し、公開保育の参加者と ECEQ 実施園の保育者とが意見交換をしながら、自分たちだけでは分からなかった自園の良さや課題を見付けていく。また、ECEQ は STEP1 から STEP5 の 5 段階のステップを踏みながら進めていくが、その過程において実施園内のコミュニケーションを活性化し、同僚性を高めることが期待できる。さらに、ECEQ を実施することによって、教育活動における PDCA サイクルが機能するようになり、そのことが教育の改善に繋がることを目指している。

ECEQ は、本財団で認定された ECEQ コーディネーターが、一連の取組の始めから終わりまでサポートし、これまでに公開保育をしたことがない園でも安心して実施することができるという特徴をもつ。ECEQ コーディネーターは、ECEQ 実施園の保育者の話し合いを深めたり、課題を整理する支援をしたり、公開保育当日に参加者との対話を促したりする存在である。ECEQ コーディネーターは平成 25 年度から現在までに全国で 223 人養成されている。

また、ECEQ は、幼稚園等の理念や地域事情の違い等に配慮しつつ、幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育という視点も大切にしており、ECEQ 実施園はもとより公開保育に参加した保育者にとっても幼児教育の質について考えたり、対話と内省を重ねることの重要性について学んだりする機会となることが期待される。ECEQ 実施園と公開保育の参加者とが共に学び合い、育ち合うことで、幼児教育の質の向上を目指す。現在までに 82 園が ECEQ を実施しており、平成 30 年度は実施園が更に増えることが期待される。

1. ECEQ に関するアンケート調査の実施

本財団が開発した「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム (ECEQ)」は、ECEQ 実施園と公開保育の参加者とが共に学び合い、育ち合うことで、幼児教育の質向上を目指すものであり、両者の間に「問い」が介在している点が大きな特長である。「問い」とは、ECEQ 実施園が「自園の保育実践のどこを見てほしいのか」「何を聞きたいのか」「どのようなことを教えてほしいのか」といった具体的な投げ掛けである。本年度は ECEQ を実施することにより、実際にどのような効果を生み出し、保育者が互いの違いを認め合いながらも対話と内省を深めることができたのか、システムの特長である「問い」の存在に注目し、公開保育当日の参加者へのアンケートを実施し分析を行った。

(1) アンケート調査の方法

本年度、9 月から 11 月までに実施した 9 ヶ園の ECEQ 公開保育に参加した保育者 441 名に公開保育終了後アンケートを実施し、433 人より回答を得ることができた(回答率 98%)。

(2) アンケートの内容

アンケートの設問事項は以下の通りである。なお、実際のアンケート用紙を添付する。

- ①公開園が自分たちの聞きたいことを「問い」という形で参加者に投げかけていますが、「問い」があることで保育参観の共通の視点をもつことができたと感じましたか?
- ②「問い」があることで、協議会での話し合いが活性化したり深まったりしたと感じましたか?
- ③ECEQ 公開保育は、あなたにとって「気づき」や「学び」の場となりましたか?
- ④ECEQ 公開保育に参加して、自園においても保育者間で保育の振り返りや対話をすることが大切だと感じましたか。
- ⑤ECEQ の趣旨や内容については理解できましたか。
- ⑥あなたの園でも ECEQ 公開保育を実施したいと思いましたか。

ECEQ 公開保育参加者用アンケート

この度は、_____ 幼稚園公開保育に参加いただきありがとうございました。
このアンケートは ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）のこれからの改善のために活用させていただきたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

1. あなたご自身のことについてお答えください。

①年齢（ _____ 歳）

②性別（ 女性 ・ 男性 ）

③これまでの勤務年数をお教え下さい。

幼稚園勤務（ _____ 年） 保育所勤務（ _____ 年） 認定こども園勤務（ _____ 年）
計 _____ 年

④現在の職場での具体的な職名・役職（教諭・主任等）

2. 今回の ECEQ 公開保育についてお尋ねします。

1) 公開園が自分たちの聞きたいことを「問い」という形で参加者に投げかけていますが、「問い」があることで保育参観の共通の視点をもつことができたと感じましたか？

☐ とても感じた	☐ 感じた	☐ どちらともいえない	☐ 感じなかった
※問いがあることについての感想をお書きください。			

2) 「問い」があることで、協議会での話し合いが活性化したり深まったりしたと感じましたか？

☐ とても感じた	☐ 感じた	☐ どちらともいえない	☐ 感じなかった
※それぞれ具体的に教えてください。			

3) ECEQ 公開保育は、あなたにとって「気づき」や「学び」の場となりましたか？

☐ とてもなった	☐ なった	☐ どちらともいえない	☐ ならなかった
※感想を自由にお書きください。			

4) ECEQ 公開保育に参加して、自園においても保育者間で保育の振り返りや対話をする
ことが大切だと感じましたか。

☐ とても感じた	☐ 感じた	☐ どちらともいえない	☐ 感じなかった
※感想を自由にお書きください。			

5) ECEQ の趣旨や内容については理解できましたか。

☐ とても理解できた	☐ 理解できた	☐ どちらともいえない	☐ 理解できなかった
※どのような点がわかりにくいと感じましたか、具体的に教えてください。			

6) あなたの園でも ECEQ 公開保育を実施したいと思いましたか。

☐ ぜひ実施した い	☐ 機会があれば実施し たい	☐ どちらともいえない	☐ 必要を感じない
※理由についてお書きください。			

3. その他、ご意見・ご感想がございましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

(3) アンケートの回答方法

各設問に対し4段階評価の回答とし、さらにその理由や感想等の自由記述欄も設け、より具体的に参加者の評価を得ることとした。

2. 事例研究

これまでに **ECEQ** を実施した幼稚園等の事例をもとに、「問い」という手法の有効性や **ECEQ** 実施の効果等について検証した。

3. 研究検討委員会における検討

「幼児教育の質向上を目指した学校評価の推進に関する研究検討委員会」を設置し、その委員会において、**ECEQ** コーディネーター養成のカリキュラムの改善や **ECEQ** を幼稚園で実施するための手立てについての検討、教育の質を評価するための指標等についての検討を行った。

Ⅲ. 研究の内容

1. 保育者が互いの違いを認め合いながら対話と内省を深めるための手法とその有効性

(1) 対話と内省を深める手法としての「問い」

幼児教育が他校種の教育と大きく異なる点の一つに、その指導法がある。幼児期の教育が、子供の生活や経験を重視する経験カリキュラムであるのに対し、児童期の教育は教科カリキュラムが中心となる。また幼児期の教育の基本が、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことが基本となっていることから、各園の理念や子供たちを取り巻く環境は地域事情も含め各園様々であり、そこには多様な教育活動が繰り広げられることになる。私立幼稚園の良さはその多様性にあることは言うまでもなく、園を超えて保育を語り合う際には、まずは互いの違いを認め合うことが前提となる。一方で園を超えて語り合う際でも、幼稚園教育要領等を踏まえた教育活動の展開、子供の姿に対する保育者の願いや具体的な環境の構成や手立ての工夫等については、子供の姿を通して考え合うことができ、対話から生まれる学びにつながっていく。従来の公開保育においては、公開保育に参加した参加者それぞれの視点で参観をしていたことから、公開園側の課題意識と、参加者側の参観の視点に差異が生じることが多くあったことは否めない。

上記を踏まえ、本財団が開発した「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム(ECEQ)」は、公開保育を実施した際に参加者が保育を見る視点を示した「問い」があることが大きな特長となる。実施園は園内研修を通して、自園の良さや課題を園全体で共有することから始め、公開保育当日には、参加者にも「問い」として課題を投げ掛け、意見や感想をもらうことにより、第三者的視点も含めその後の園内研修に活かされ PDCA サイクルを動かし、学校評価の実施にもつながるのである。

実施園は「問い」を作成する過程において、下記視点ⅠからⅣを考えることにより、自園の保育を見つめ直すことになる。

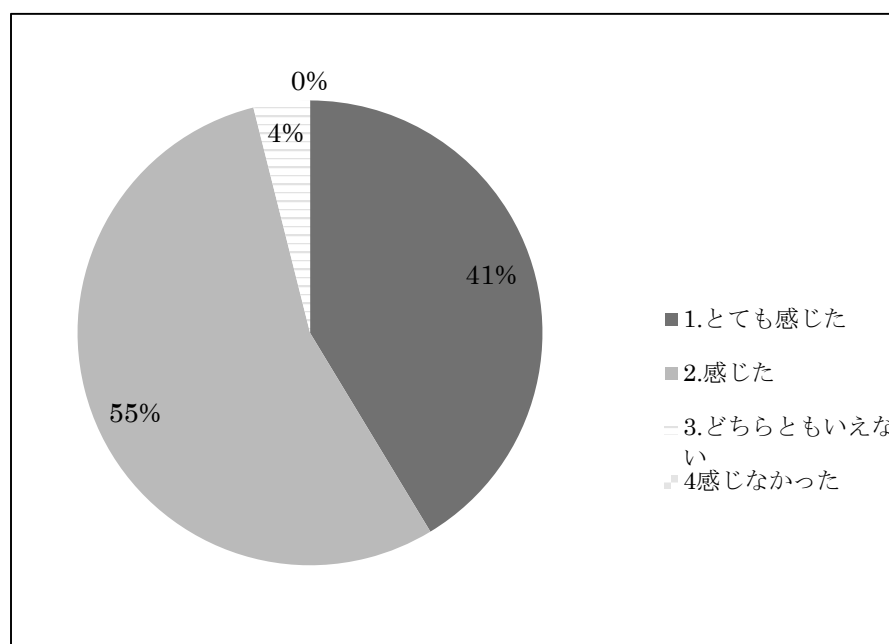
- Ⅰ この時期の「子供の様子」「育ちの姿」
- Ⅱ 幼稚園教育要領等を踏まえ、自園の教育理念や教育課程を通じて、子供の今の姿をどのように援助していくのがよいか、保育者の願いや考えていること。
- Ⅲ 保育者の願いを具体的にするための「環境構成・援助・工夫・手立て」
- Ⅳ 「参加者に聞きたいこと・教えてほしいこと」

次に実際のアンケートを基に「問い」の有効性を参加者の視点から評価していく。

(2)「問い」の有効性～アンケートの分析から

1) 公開園が自分たちの聞きたいことを「問い」という形で参加者に投げかけていますが、「問い」があることで保育参観の共通視点を持つことができたと感じましたか？

1. とても感じた	41%	179 人
2. 感じた	55%	237 人
3. どちらともいえない	4%	17 人



アンケートの結果より、参加者の大半が「問い」の存在により参観の視点の共有ができたと答えている。中でも、下記二点に良さを感じていることが分かった。

- ① 保育の視点が参加者共通となる。
- ② 共通視点となる「子供の姿」中心に保育を参観できる。

以下は上記二点に関連した自由記述項目の抜粋である。

① 保育の観点が参加者共通となる

- ・園がどのような点について悩んでいるか、また私自身どの点に着目して保育を見ればいいのか明確だった。
- ・「問い」があることで、一つのことについて、複数の先生で深く考えることができる。
- ・参観する時にもどのような視点で見るべきか、研修内容がはっきりしていて、わかりやすかった。「問い」があることで自分の保育と比べながら、より具体的にテーマにそった話し合いができた。
- ・どうしても気になることが多くて、漫然と見学になってしまうことがあるが、目標をもつ

て見学できた。

- ・公開保育という保育を見て終わるだけだったので、「問い」があることによりこちらも視点をもち、意識して見ることができた。
- ・園としての共通目的や、ねらい、特色などを理解、把握した上で参加することができ良かった。
- ・漠然と保育を見学するのではなく、参加者全員で同じ視点で見ることができる。

② 「子供の姿」中心に保育を参観できる

- ・他園へ行くについ自園と比べてしまいがちだが、「問い」があることで比較ではなく「子供」にスポットを当てて見やすかったように思う。

しかしその一方で少数意見ながらも

- ・色々な教育観があるのと、一日保育を見ただけでは同じ視点を持つのは難しい。
- ・「問い」がわかりにくいと感じた。もう少し簡潔に書いてある方が良いのではないか。
- ・「問い」によっては付箋に書きづらいものもある。
- ・「問い」はもう少し具体的に書いてほしい。
- ・「問い」は教員からの視点なので、「子供がまんなか」の臨床保育視点がほとんど出せていないと思う。
- ・同じような（抽象的な）「問い」が多かったと思った。
- ・ただ付箋を貼るということに少し戸惑いを感じた。アンケートではだめなのか。

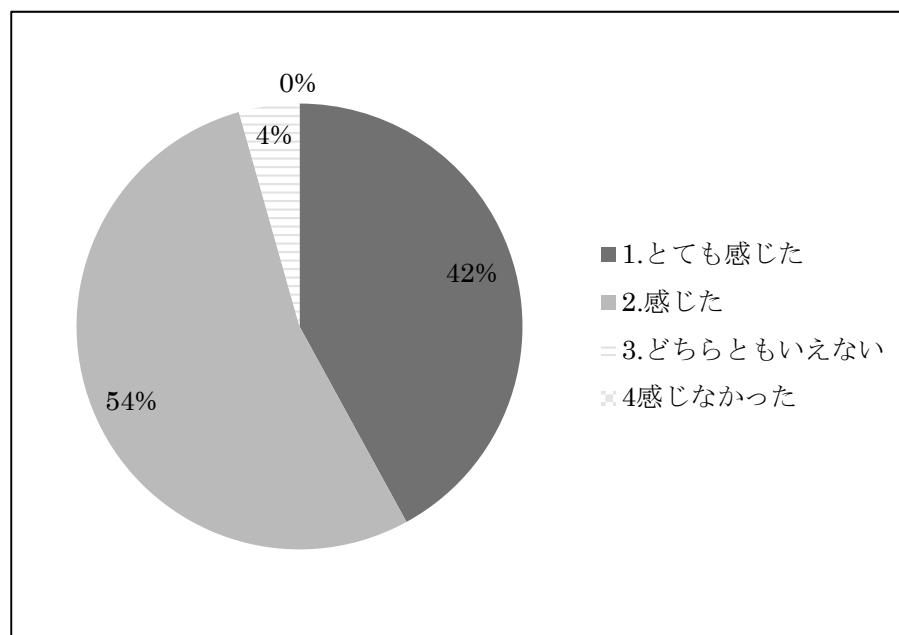
等の意見もあった。

それらは「問い」による共通視点を持てるか持てないかではなく、「問い」の示し方にあり、「問い」をいかに簡潔かつ具体的に示すことが重要であるかということが今後の課題となろう。この点については、ECEQ コーディネーターが ECEQ 実施園と共に STEP3 において「問い」づくりを行う際の課題とも重なっており、毎年度のフォローアップ講座の講座内容として今後も継続が必要となろう。

次に、協議会での話合いの活性化において、「問い」がどのように貢献しているかに係る設問である。

2) 「問い」があることで、協議会の話合いが活性化したり深まったりしたと感じましたか？

1. とても感じた	42%	182 人
2. 感じた	54%	232 人
3. どちらともいえない	4%	19 人



「問い」の存在が、午後からの協議会においてどのように有効に働くのかということについても、大半の参加者が会の活性化や深化に影響していると感じていることが確認できた。以下は自由記述の中からの抜粋である。

- ・論点がぶれず深まっていく感があった。（例：コーナーは？→ままごとコーナーに人が少ない→どうしよう→〇〇したらどう？等）
- ・焦点化でき深めることができる。公開園の先生の「これが聞きたい」という思いが伝わってきて、その気持ちになって考えようとしていた。
- ・中心となる柱があるので、考えがまとまり深まると思った。
- ・皆が同じ視点で見ているので、話が大きく反れることなく「良かったです」という浅い話し合いにならず、良かった。
- ・初めから同じ方向で話し合うことができ、短時間でも「問い」に対する意見、感想が深い所まで話し合えた。
- ・自分とは違った感じ方があることも知り、答えは一つだけではなく、色々な考え方があり、意見交換が活発だった。

また参加者の中には、協議会での話合いの深まりが、公開保育実施園にとっての大きな学びとなることを実感している下記意見もあり、このことが、今度は参加者自身の園でのECEQ実施につながっていくことが期待される。

- ・公開園が知りたい部分を色々な人から意見としてもらうことで学べるが多いと思う。

- ・公開保育の在り方が変わること、園内での煮詰まった空間がより意見交換で向上するようになると思う。
- ・実施園の先生方が困っている事、知りたいと思っていることが、話を進めていく中で気づきになったり、再確認している姿、自信をもった笑顔になっていく姿が見られて、そう感じた。

一方で、

- ・参加させていただく側も主体的にならないと成立しないと実感した。
- ・参加する側も、もう少しうなずきや「いいね」などの言葉や態度が出せると活性化していくように思える。

とあるように、協議会を活性化させるためには、その場の参加者の姿が場の雰囲気を大きく形作ってゆくことから、参加者側の意識にも影響することがうかがえた。

また、下記のように、協議会の持ち方や、公開園が聞きたいことだけではなく、参加者が知りたいことについて話し合う時間がないことなど、協議会の運営に関する意見も寄せられた。

- ・もう少し少人数で話せたらより深まったと思う。
- ・「問い」以外の内容に関して、深める時間がない。

この点については、公開保育に寄り添う ECEQ コーディネーターの役割にも関わることから、今後の ECEQ コーディネーター養成講座の内容充実が課題となる。

以上、ECEQ 公開保育の大きな特長である「問い」の存在意義について、参加者アンケート分析を終え、次に実際の園内研修からの検証事例を ECEQ 実施園から二園の実施例を基に行う。

(3) 「問い」の有効性～事例検証

事例 1 認定こども園四街道さつき幼稚園（千葉県）

<実施概要>

認定こども園四街道さつき幼稚園で ECEQ を実施した。公開保育実施日は平成 29 年 11 月 25 日(土)で、千葉県内保育者が 39 名と実施園の保育者が参加した。

<「問い」の有効性>

①「問い」作成までのプロセス

STEP2 の保育者による田の字ワークにおいて、実施園の良さや大事にしているところとして挙げられた内容は、STEP1 において事前に園長から聞き取りをした内容（子供がのびのびとしている、仲が良い、自然が豊か、バスがないので保護者と語り合える等）と同じであった。また「子供の現状や育ちについての話し合いや共有する時間が取れない」という課題に関

しても、保育者から出された内容と、園長からの聞き取り内容と合致するところが大いにあった。STEP1・2 を行った時点で、管理職の考えと保育者の考えが同じであることが全体として共有できた。また保育者全員で現状を見つめ直し、課題の原因や改善についても意見を出し合い、自分たちで整理したことにより、自らの気付きにもつながり、今後の保育を見直そうとする良い機会ともなっていた。そこから副園長も交え、問いづくりが始まった。STEP3 では学年ごとにグループを組み、今の子供の姿を出し合うことから始めた。年少組担任からは「子供の要求に応じてあげたい」「そのための環境構成として、教材などがいつでも使えるように準備する」「教員が適度に子供のやり取りに入っていく」などが挙げられ、「問い」として「声掛けの適切さ」や、「子供への援助と見守りのバランス」が出された。年中組担任からは「興味をなかなか持てない子供たちに対しての教員の援助」として、「教員の真似ができるような環境」「子供が使いたい材料を子供自ら使えるような環境」を整えることが挙げられた。その中で「どこまで子供の自由に任せるのか」「子供の発想を生かすためには、どこまで子供の思いを尊重するのか」という二点が「問い」として出された。年長組担任からは、「子供の発想力の差」「子供同士の解決力の差」「夢中度の差」などが現状として挙げられ、保育者として「子供同士が刺激し合う」「認め合える」ことを願いながら、子供と共に考え、友だちの考えを気付かせたり、帰りの会で当日のことを振り返るなどの実践が語られた。その中で「問い」としては、「教員の子供への介入のバランス」「子供がじっくり取り組めるための環境設定の方法」が出された。どの学年も成長の違いはあるものの、子供が自ら意欲的に取り組むための保育者の子供への援助と、環境設定のバランスについてが「問い」として挙げられていた。また「具体的な保育のアイデアや工夫」についても「問い」として挙げられた。

②「問い」に対する参加者の意見から

公開保育当日は、全学級ではなく各学年2学級ずつ公開を行ったが、「問い」は学年で同じ内容とした。学級ごとに「問い」が掲示され、参観した学級ごとに参加者は付箋を貼っていった。「問い」に対する意見の数は、学級によって違うことはなく、ほぼ同様な数の意見が出されていた。

年少組においては、「教員の援助方法（援助と見守りのバランス）」や「活動に対する子供の姿」について共感する意見が多く出されていた。意見が少ない「問い」はなかったが、多数あった意見は「実施園のアイデアや工夫」についてである。

○教員の援助方法(援助と見守りのバランス)に共感

- ・子供の性格を理解していて、子供の「どうしよう」の気持ちをすぐに感じて言葉をかけていて素敵でした。
- ・振り返りの時間で、子供に問いかけながら考えを引き出し、楽しい気持ちを共有できるような先生の話し方が素敵。

○活動に対する子供の姿を共有している

- ・子供たちが自主的に品物を並べたりと意欲的だった。
- ・言葉のやりとりが活発。

○アイデアや工夫

- ・食べるコーナーがあるといいかな、場づくりの工夫
- ・子供のやりたい方法でした方が、生き生きとした活動につながるのではないかな。

年中組の「問い」については、年少組同様に「教員の援助や環境を工夫していると感じる点」についての意見や、「より工夫できる点」について共感する意見が出されていた。年少組同様に、参加者の園でのアイデアや工夫を具体的に書いてほしいという意見は半分くらいであった。

○教員の援助や環境の工夫に共感

- ・子供が自分で考えられるように投げかけている。
- ・個々の興味の違い、発達の差を個別に援助することでそれぞれに達成感があつた。

○より工夫できる点に共感

- ・紙飛行機が折れると、飛ばしてみ、確認することで再度取り組めるような声かけをしていて素敵だと思う。
- ・作り方が一つではなく、色々な道具を使っていて素敵。

○アイデアや工夫

- ・子供たちが「こんなものをつくりたい」と思った時にすぐに作り出せるような環境設定をしています。
- ・出来上がった作品を活動中に紹介しています。

年長組の「問い」についても、他学年と同様であった。

○子供たちが主体的に活動を進めていくための教員の援助に共感

- ・一日の流れを子供たちに伝え確認し、子供たちが疑問に思ったことを解決し、見通しが持てるようにすることで、子供が自ら関われるようにしていた。
- ・「その考え、とてもいいと思うよ。」子供にとって、自分の言ったことが認められ、自信につながる素敵な声かけでした。

○お店作りに向けてのクラスの一体感に共感

- ・クラス全体で、一人一人の言葉を共有する関係性が見られました。
- ・自分の役目がはっきりしているので、子供なりの責任感をもって取り組んでいることが一体感につながっていると感じました。

このことから、参加者が共感したり、意見を出しやすい「問い」とは当日の保育を参観することによって、その実態（子供の姿）を感じたり、考えたりできる内容であることがわか

る。

一方で、参加者の園でのアイディアなどを求める「問い」に関しては、積極的には提示されなかったことから、参加者自身が自園の保育について語ることに對し、更に工夫が必要と思われる。

③公開保育後の分科会の話し合い

「問い」の存在が、公開保育後に行われる分科会の協議にどのような影響を与えたかについても検証してみる。

公開保育後の分科会は、学級ごとに行われた。グループの人数は、ファシリテーターを併せ参加者6人から7人と、実施園からは各担任とフリーの保育者2人から3人の人数で行うことができた。各参加者は「問い」に対する自身の意見や感想を交えながら自己紹介を行い、その後に担任がその時間に最も話し合いたい意見等を選び、その意見を基に話し合いが行われた。「問い」があるため、参加者はその「問い」を媒介として保育を参観していたため、話し合いに関しても「問い」から外れることなく話し合うことが出来たように思う。参加者の園においての具体的なアイディアについての意見は付箋としては出された数は多くなかったが、分科会の話し合いの中では、具体的な内容を詳細に聞くことが出来た。このことから「書く」ことはあまりできなかったが、「話す」ことはできたことがわかる。参加者にとって、「書く」ことが難しかったのか、またはこれまで具体的な自園の取組を語り合う場が少なかったことから、そのような文化がまだ確立していないのかとも思われる。

今回のECEQ公開保育では保育を参観しながら、気付いたことを付箋に「書く」という作業が特長であり、その際使用する付箋は通常より小さめのサイズである。それは「書く」ことを目的とするのではなく、公開保育後の分科会での話し合いを活性化させるために「書く」のである。そのためにあえて小さめの紙に要点だけを書き、書ききれない部分をファシリテーターが聞き出しながら、話し合いを活性化させるという工夫が織り込まれている。よって公開保育参加者には事前に「問い」の存在や、それに対する意見や感想等を短い言葉で要点を書きこみ、書ききれない事柄については分科会において話し合いを深める意図をしっかりと伝える必要があろう。一つ一つ丁寧に皆で話し合うことで、参加者も実施園の保育者も様々な意見を聞くことができ、双方にとっての気付きにつながっていた。特に大きく感じられたことは、保育に対して共感の意見が多かったことで担任の自己肯定感が上がり、これからの保育への意欲が感じられた。この話し合いは、各ファシリテーターが分科会の参加者が意見を出しやすいような雰囲気づくりをしたことと、出された意見を更に具体的にすることにより、話し合いを深めることができたことがそれぞれの気付きにつながったと感じている。

事例 1 多賀城高崎幼稚園（宮城県）

<実施概要>

東北地区教員研修大会において宮城県内 10 園で公開保育が行われたが、そのうち多賀城高崎幼稚園で ECEQ を実施した。公開保育実施日は平成 29 年 9 月 1 日（金）で、東北地区内保育者が約 120 名参加。

<「問い」の有効性>

①「問い」作成までのプロセス

問いづくりを行う前に、STEP2 として 14 名の保育者が参加して園内研修を実施し、園の良さや課題を明確にした。良さとして「教員のチームワーク」や「園庭の広さなど恵まれた環境」、課題として「子供の主体性」や「環境構成」が挙げられた。ここで共有化された課題を起点に問いづくりが始まるが、公開保育当日までの STEP3 の過程において保育者に様々な気づきが生まれたことが実施園アンケートから見えてきた。

例えば「公開保育に向けて、園の現状を話し合う等の取組を通じて園として新たな課題が見つかったか」という設問に対する具体的な記述に「主体性の意識の違いを感じた」という回答があった。これは主体性に関する問いを考えていくに当たって、そもそも主体性とは何なのかについて議論が深まったことを意味する。また、「子供たちの意見やアイデアを表現する場を設けることによって、より主体的に活動に取り組めるのでは」という課題が見つかった」という回答もあったが、問いづくりの話し合いを通じて、主体性を育むためには何が必要なのか、具体的な課題に気付くことができたことがうかがえる。実際、この気づきから次のような「問い」が生まれた。

- ・子供たちが自分の思いや考え、アイデアを出して遊ぶ姿はありましたか？ 具体的な場面があれば教えてください。
- ・子供同士が思いや考えを伝え合っていくためにはどのような援助が必要ですか？

「問い」を作成するまでの過程の中で、保育者同士の話し合いが深まり、園の課題をより具体化し明確化できた経緯が読みとれる。

また、実施園アンケートの同じ設問に対して「園の環境やカリキュラムの改善ばかりを考えるのではなく、今、子供たちが何に興味を持ち、自園の子供たちにはどのような特徴があるのかの理解に努め、どのような働き掛けが必要なのかを考える」という回答もあった。従来の園内研修では、環境構成はどうあるべきか、カリキュラムをどのように編成するべきかという計画中心の議論になっていたが、公開保育に向けての問いづくりの話し合いを通して、子供たちがどのようなことに興味や関心を持ち、どのように育っているのかを把握することが大切だということに気付いた様子が見えてくる。つまり、今の子供たちの姿を出発点に

保育を語り合う文化が芽生え始めたといえることができる。「問い」を生み出す過程の中で、今までになかった学びの文化が醸成されてきたと言えるだろう。

他にも「今まで知ることができなかった同僚の保育に対する考え方や子供への思い等、より深く理解できるようになった」「年齢関係なく意見が出せるようになったことで、新たな発見ができるようになった」という回答もあったが、ここからは、同僚性が育まれることによる対話の活性化と学びの深まりが見てとれる。さらに、「自分のクラスだけではなく他のクラスにも目を配るようになった」という回答もあった。担任は、自分の学級だけに目が行きがちだが、園全体の保育のあり方を話し合うプロセスを通して、目の前の子供だけではなく園全体の子供たちの育ちを考える広い視野を持てるようになったと言えよう。問いづくりは、「問い」そのものを生み出すだけではなく、その過程において ECEQ 実施園の保育者に対話を促し、様々な気づきを生み出したと考えられる。

②問いに対する参加者からの意見から

参加者アンケートの「問いがあることで保育参観の共通の視点を持つことができたと感じましたか」という設問に対しては、「問いがあることで保育のどのような点に着目すべきか明確になった」「見るポイントをあらかじめ提示されていたので、それらを集中的に見ることができた」という回答が数多く寄せられた。ECEQ 実施園が参加者に共通の視点を提供することで、参加者全員が同じ視点を通して保育を見ることができ、後の話し合いの活性化にもつながったと考えられる。実際、「参加者にとっても的が絞られることは学びやすい」「話し合いのために何を見たら良いかわかりやすかった」という回答もあった。

その一方で、「問いが長く具体的でなかったため意識しながらの保育参観は難しかった」「問いを資料にも入れてほしかった」という意見もあった。「問い」は保育室の入り口に貼り出したが、「問い」の内容をいつでも確認できるよう手元の資料に印刷するとか、できるだけ簡潔かつ具体的な問いづくりを心掛けるということも、今後の ECEQ 実施にあたっては検討が必要だろう。

ECEQ 実施園へのアンケートからは、参加者からの意見が ECEQ 実施園にとってどのような意味があったか読み取ることができる。例えば「すぐに実践できるアドバイスをもらえた」「公開保育中の環境について具体的なアドバイスがあり、次の保育に活かせる内容だった」などの回答がいくつもあったが、これは、欲しかった意見を参加者からもらうことができたという保育者の満足の現れである。実施園としての悩みを「問い」として投げかけることにより、参加者の視点が定まり、意見が散漫になることもなく、園の課題に沿った意見を数多く引き出すことができたと考えられる。

また「自分の園の雰囲気や良いところ、改善したほうがよいところ等を客観的に見てもらえた」「子供への声かけやそのタイミング等、自分が意識していなかった場面を客観的に見ていただいて、いろいろアドバイスがもらえてよかった」という回答からは、参加者からの客観的な意見が、保育者にとって大いに参考になったことがわかる。「自分では、子供たち

の遊びに入りすぎて保育者先導の遊びになっていないか不安だったが、子供たちに与える遊びのヒントやアドバイスが良い点として挙げられていたため、外部からの意見の大切さを実感した」という回答もあったが、課題でもあった子供の主体性に関する自らの援助の在り方について、それを客観的に良さとして認めてもらえたことで不安が解消した様子が見えてくる。「問い」から得られる参加者の客観的な意見が、課題の解決に限らず、良さの確認という意味においても、内省を促す大きな役割を果たしたと言えるだろう。

③公開保育後の分科会の話合い

「問い」の存在が、公開保育後に行われる分科会の協議にどのような影響を与えたかについても検証してみる。

参加者アンケートの「問いがあることで、協議会の話合いが活性化したり深まったりしたと感じたか」という設問に対しては、95%の参加者が「とても感じた」「感じた」を選んでいる。当園の参加者からも、「問いという明確なものがあったからこそ、たくさんの意見が出たと思った」「視点が絞られているので話を深めやすいと思った」などの回答が多くあり、共通の視点で保育を参観したからこそ、共通のテーマについて参加者全員が自分なりの意見を持ち、話し合いに臨むことができたと考えられる。

また、「問いに対しての考えを自身の経験から話したり、他の先生方の考えを聞くことができ参考になった」「意見交換が活発だったので、自分とは違った感じ方があること、答えは一つだけではなくいろいろな考え方があることを知った」という回答もあった。幼児教育の営みは唯一の正解を求めるものではない。多様な意見に出会い多様な見方があることを知ることで、新たな気づきが生まれ、それが次の手立てにつながっていく。いわゆる PDCA サイクルに多様な見方を取り込んでいくことが望ましく、互いの違いを認め合い尊重しながら話し合いを進めていくことが大切である。ECEQ における分科会は、参加者全員が「問い」という共通の視点をもって保育を見るからこそ、多様な意見があることの良さを実感できる場になり得ると言えるだろう。

問いは、そもそも子供の姿や育ちの姿をもとに、実施園が抱える課題や悩みを参加者に投げかけるものである。問いの内容も、公開保育当日の子供の姿を具体的に問うものが多い。当園の問いも、先述した「子供たちが自分の思いや考え、アイディアを出して遊ぶ姿はありましたか？ 具体的な場面があれば教えてください。」のように、子供の姿そのものを問うものや、「子供たちがイメージを膨らませ、遊びを楽しみ、遊びを発展させていけるような環境になっていたかどうか、気づいたところをお聞かせください。」のように、子供の姿に関わる環境構成や援助の在り方を問うものがほとんどだった。必然的に、問いについて話し合うことは、子供の姿について話し合うことになる。実施園の保育者と参加者が、表面的な援助・指導の在り方だけでなく、“今日”の子供の姿を共有し、そこを出発点として園の課題について深く語り合うことができた理由は、問いの存在にあったと理解している。

また、「初めから同じ方向で話し合うことができ、短時間でも問いに対する意見、感想が

深いところまで話し合えた」という回答もあった。限られた時間の中で実りある協議を進めるという効率の面でも、「問い」の存在は有効だったと考えられる。

以上のような話し合いの活性化には、もちろん ECEQ コーディネーターの存在が欠かせない。今回も、分科会の各グループで、ECEQ コーディネーターがファシリテーター役を務めたが、「問い」という共通言語の有効性を熟知した者が対話を促す進行役を務めることが、結果的に参加者の内省をより促すことにつながるものと考えられる。

④まとめ

ECEQ 公開保育と通常の公開保育の大きな違いの一つが、「問い」という手法の存在だが、その問いが、ECEQ 実施園の保育者と公開保育の参加者の学びの深まりに、大きな役割を果たしていることがわかる。まず、公開保育に向けた問いづくりの過程の中で、幼児教育の質を更に向上させたいという願いの下、同僚性が育まれ、対話を重ねていく姿が見られた。また、公開保育中は「問い」に応える形で、参加者から多くの意見を付箋を通してもらうことができた。付箋は、直接的な対話ではないものの、コミュニケーションの手法として有効なアイテムである。実施園アンケートの回答に「たくさんの付箋をいただいたことで、これからの保育の方向性を自分なりに考えることができた」という意見があったが、付箋というある種の対話が、保育者の内省につながったことを意味している。

さらに、分科会における話し合いでは、活発な意見交換がなされ、実施園の保育者と参加者が、対話と内省によって共に学ぶ姿が見られた。「様々な視点から意見をいただいたことで、今まで当たり前だと思っていたことがそうではないことに気づき、新たな視点での課題に気づくことができた」「新たな意見を聞くことは、自分の考えだけに凝り固まらず幅を広げていくことができ良いと思った」という実施園の保育者の意見は、多様な意見に出会い、そこから生まれる新たな気づきが、幼児教育の質向上に寄与するものと考えられる。

幼児教育の基本は幼児理解である。子供の育ちの姿を無視して、教師の意図を一方的に押し付けるものではない。子供の心持ちや育とうとしている姿をより良く理解することを始まりとして、教育・保育の構想が生まれる。幼児理解を起点としていわゆる PDCA サイクルを回していくためには、目の前の子供の姿をもとに対話を進めること、その対話において多様な見方を提示し合って保育者一人一人が内省を深めることが大切である。ECEQ は、そのような園の風土を醸成することを促すことで、幼児教育の質向上を目指すシステムだが、その過程において問いの果たす役割は非常に大きいと言えるだろう。

一方で「作成していた問いが最新のものではなかった。日々の保育が続いている中での公開保育で、子供たちの姿を見ていただけるとさらに良いと感じた」という実施園の保育者の意見もあった。「問い」を作成した時点から公開保育当日までに時間差があったことで、今の子供の姿と少しかけ離れた「問い」になってしまったという反省である。「問い」をより有効なものにするためには、「問い」を作成するタイミングにも留意する必要があるだろう。また、「園でも互いに保育を見せ合ったりすることで、保育者同士で視野を広げていくとよ

り発展していくと思った」という意見からは、ECEQ の手法を互いの保育を見合うという園内研修に取り入れることで、ECEQ 公開保育の実施時に限らず、日々の教育活動の中で対話と内省を促す可能性も感じられる。

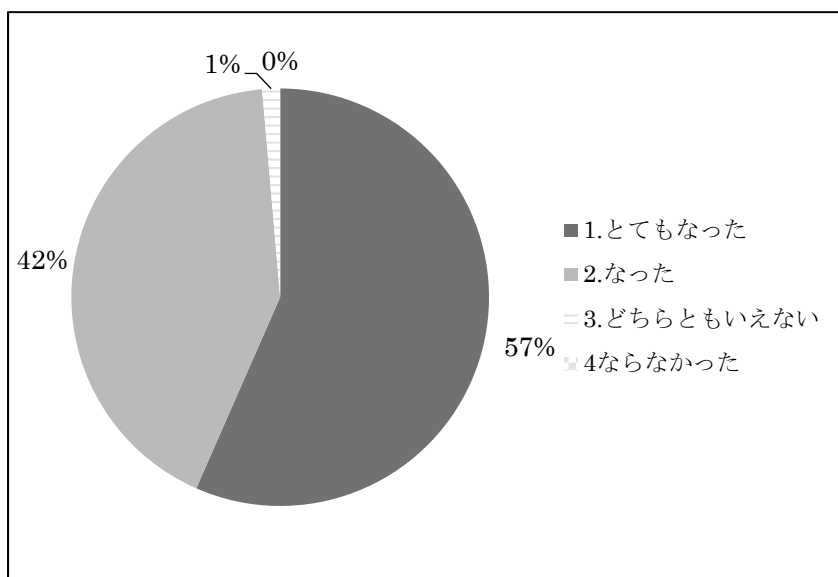
2. ECEQ を実施することによる効果の検証

(1) ECEQ を実施することによる効果～アンケートの分析から

前出の「ECEQ 公開保育参加者用アンケート 2 の(3)(4)」の解答について分析すると、公開保育において「問い」があることが、ECEQ 実施園の保育者のみならず、参加者にも有効であることが理解できる。実際にアンケートでもそのことがうかがえる。

3) ECEQ 公開保育は、あなたにとって「気づき」や「学び」の場となりましたか？

1. とてもなった	57%	245 人
2. なった	42%	182 人
3. どちらともいえない	1%	6 人



参加者へのアンケートにより、99%の保育者が ECEQ 公開保育への参加が自身の「気づき」や「学び」につながっていると感じていることがわかる。下記は自由記載の内容である。

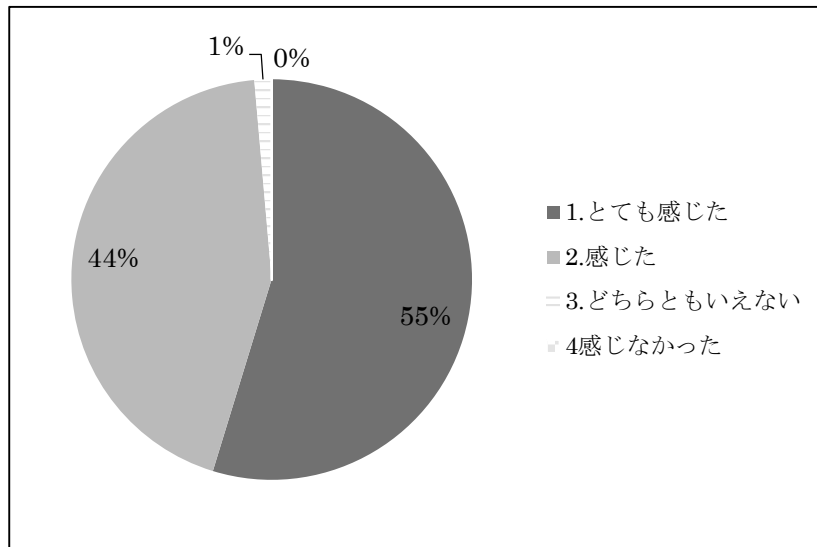
- ・自分が気づいてなかった点を指摘している方がたくさんいて広い視野を持つことができた。
- ・自分の園に帰って、実践してみたいというアイデアがたくさんあった。
- ・私だったらどうするか、新しい発見、やはり保育をしていると逃してしまいがちな子供の小さな表情や気づきの大切さを改めて感じ、自分自身の保育の気づき、改善したいことにつながりました。保育に生かしていきたいと思います。
- ・保育参観をするだけでなく、その後に保育について意見交換する場があって良かったです。これからの保育の参考になりました。
- ・話し合いをすることで自分では気づけなかった点に目を向けることができた。『主体的な保育』をするためにもっと自分の器を大きくしなくてはと思った。
- ・他園を見ることはあっても意見交換までは出来ないのよかった。

- ・プラスの考え方をもち、子供のために本当に大事なことは何か担任の先生や他の先生の意見を聞き、考え直したり、自園・自分の保育を振り返ることができた。
- ・悩んでいることが似ていたので、今まで不安に思っていたことを「こういう方向性でいいんだ!」「こういう方法もあるんだ!」と気付けた。
- ・他園も同じようなことで悩んでいることや、これだという答えはなく、日々振り返り修正することが大事だとわかった。
- ・視点を絞ることで、公開園の先生方の悩みや課題を良い方向へ向けて意見を出してもらえて良いなと思った。
- ・「問い」があることで、色々な感想、意見に気付かされ、とても勉強になった。
- ・自園の保育しか見たことがなかったので、今回のように実際に他園に行ってみるという事はとても学びになりましたし、自分のクラスにも取り入れてみよう!と思うところがあったので、園に帰ったら早速実践していきたいと思います。
- ・どこに悩み、どこを肯定されるかが良くわかる。「学び」は積み重ねですからこうして色々な園から学ばせていただけます。
- ・今までの公開保育より、何について見学し、話し合うべきかよくわかり、より深く自らが考えることができ有意義な時間となりました。

また、参加者が保育後の振り返りを経験したことにより、自園においても保育者間で保育の振り返りや対話することの意義をどのように捉えたかについての検証を行った。これに関しても、99%の参観者が、振り返りをすることの大切さを感じ、保育の質を向上させるために必要であることを認識していたことがわかる。また、公開を行う意義についても改めて感じている参観者もあり、公開保育を活用した幼児教育の質向上システム（ECEQ）により保育を開くことが、保育の質の向上につながることを実感できるシステムであることが実証されたとも言えよう。

4) ECEQ 公開保育に参加して、自園においても保育者間で保育の振り返りや対話をするのが大切だと感じましたか？

1. とても感じた	55%	237 人
2. 感じた	44%	190 人
3. どちらともいえない	1%	6 人



- ・公開保育のやりがいにも感じると思います。反省やこれからの取組にもつながると思います。
- ・自分だけで考えるより、他の意見も取り入れる方が様々なことを想定した保育ができると感じた。
- ・自分だけではなく、他の考えも聞くことができ、さらにより良い保育とは何か追及していくことができると感じました。
- ・保育者の年齢幅もあることで共通理解できていると思ってもいざという時にはまとまらないことが多々あります。たくさんの対話が必要だと思います。
- ・保育の振り返りを行うことで同僚性が深まると感じた。付箋を使った話し合いは、皆が話し合いに参加しやすく、取り入れたいと思いました。
- ・子供一人一人、そして自分自身をもっと深めて考えていくためにも対話の大切さを感じた。
- ・こども園になり、よりじっくり話し合う機会が少なくなったのでより強く大切だと感じた。
- ・教員自身のアクティブラーニングにつながると思う。座学では限界があり、それを超える手立てと感じる。
- ・職員同士のつながりが質の高い保育を生み出すことにつながると思うので自園でも積極的に話し合いをしたいと思いました。
- ・自分を開いていく、相手を知っていくことで、一緒に保育を楽しんで考えていける関係に

なりたいたと思いました。

- ・普段何気なく職員同士で相談したり、エピソードを話しているが、少し時間でもそういう機会をとることで、保育の質を高めることにつながると思った。

(2) ECEQ の実施とカリキュラム・マネジメント～事例報告

ECEQ を実施した園がその後どのように変化してきたか、実施園からの報告をもとに、カリキュラム・マネジメントとの関係性も含めて ECEQ の効果について検証を行った。

◆平成 27 年度 ECEQ 実施園 認定こども園ひまわり幼稚園

認定こども園ひまわり幼稚園は ECEQ を平成 27 年度に実施し、ECEQ の事前訪問・事前研修・問づくり・公開保育と協議・事後研修とコーディネーターを中心に話し合っていくことで、園の方針や子供の育ちの理解、保育者間の意思の疎通が大切なものと理解するようになった。また、自園とは違う子供たちの見取りや子供理解、実践方法や手法などを ECEQ を通して知ることで、多様な考え方ができるようになり、今まで保育者中心の指導計画から幼児の生活体験や発達の過程を踏まえた「ねらい」と「内容」の指導計画へと改善していった。子供の今に寄り添う指導計画の立案をすることの重要性なども理解することができ、公開保育の参加者から自園の良さや課題などに関するアドバイスが保育者等の自信にもつながった。

ECEQ を実施した後も、園の教育の質向上の取組は続けられ、二年間で園が大きく変化してきた。

ECEQ を実施し自園の良さや課題を見つけることができたが、園の理想と保育者等の考えを統一し、幼稚園教育要領の理解や教育課程の編成・指導計画の作成を実施していくためには人的体制や物的体制の確保が必要であった。

保育者等が園の教育課程や指導計画を理解や改善をしていくには話し合いの時間の確保が必要であると考え、教育・保育時間の正職員の増員やパートの増員を行った。各学年のリーダーを配置し、幼児理解から始まる指導計画立案のための話し合いを持つことができるようになったことで、園全体の保育者等が幼児の発達の過程や園の教育課程を理解し、指導計画にも反映できるようになってきている。また、人的環境が整ってきたことで全体での職員会議の時間を確保することや、何か課題がみつかった時に直ちに話し合いの時間を持つことができるようになった。教育・保育の課題、環境の課題、直ちに改善できる課題、時間をかけて改善しなければいけない課題、就業に関しての課題などを、保育者間で共有し改善できるよう目的意識を持てるようになったことが、自園の幼児教育の質向上につながってきているのではないかと考えられる。

ECEQ を経験し話し合う回数を重ねるうちに、園の中に話し合う風土が醸成され、経験が浅い保育者も自分の考えを言えるようになり、中堅以上の保育者も肯定的に意見を聞き入れるようになった。話し合う経験、聞き取る経験、まとめていく経験をすることでミドル

リーダーの育成にもつながってきていると感じられる。

このような経験を重ねることで、保育者間での教育・保育観の共有ができるようになり、教育課程や指導計画が子供に寄り添ったものになり、子供の豊かな育ちを支える教育・保育にシフトチェンジができてきている。

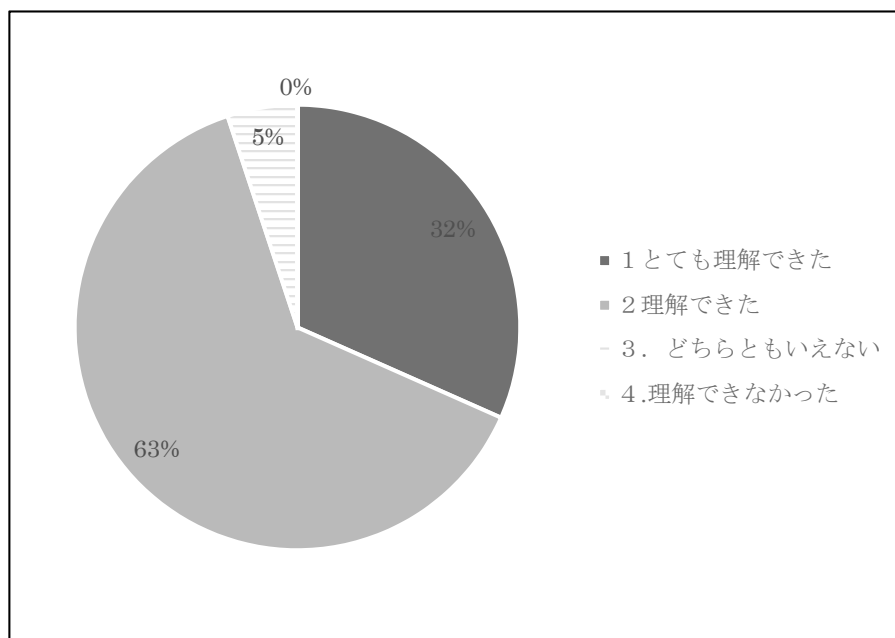
ECEQ を経験したことで、子供の姿を踏まえて教育課程を編成し、その実施状況を全職員で評価し改善していく道筋を作るきっかけになったと実感している。日々模索中ではあるが、いわゆる PDCA サイクルを機能させ、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくことはすべての園の課題である。何も変わらないことから変われることを知り、保育者が一丸となって園における教育の質向上の重要性を学ぶそのスタートが ECEQ であったことに感謝している。

3. ECEQ を幼稚園等で実施するための手立て

これまで5年という歳月をかけて、開発と実践を共に行いながらシステム全体の精度を向上させてきた。今回はアンケートを通じてこの ECEQ システム全体について参加者の意見を聞いた結果が下記の通りである。

5) ECEQ の趣旨や内容については理解できましたか。

1. とても理解できた	32%	137 人
2. 理解できた	63%	274 人
3. どちらともいえない	5%	22 人



ECEQ 公開保育参加者アンケートによれば、参加者は公開保育の全体を通じて、この方法についての理解ができた者が 95%にのぼる。自由記述欄を踏まえても、実際の取組を体験しながらの理解であることが分かる。体験を基にしながら取組のよさが伝わっていくことは、大切なことであると認識したが、事前に広く ECEQ という名称とやり方と意味が正しく伝わるのがまず必要だと考え、本財団では、ECEQ の手法が、各幼稚園や認定こども園での幼児教育の質の向上を図るために有効であると事前に分かるように、その方法と意味と効果について各園に周知を図るようにした。

それが、以下のパンフレットである。

目的と意味、実施方法とそのためのステップの段取りを含めて「認定証」取得までのプロセスをまとめてある。また実際に取り組んだ園長や保育者の感想を取り上げ、イラストを用いて、取組の全体について分かりやすく説明を加えている。なお、このパンフレットは本財団の経費で平成 29 年 7 月から 9 月にかけて全国の加盟園に配布したものである。

・加盟園に配布した「ECEQ PASSPORT」

(表)



(裏)



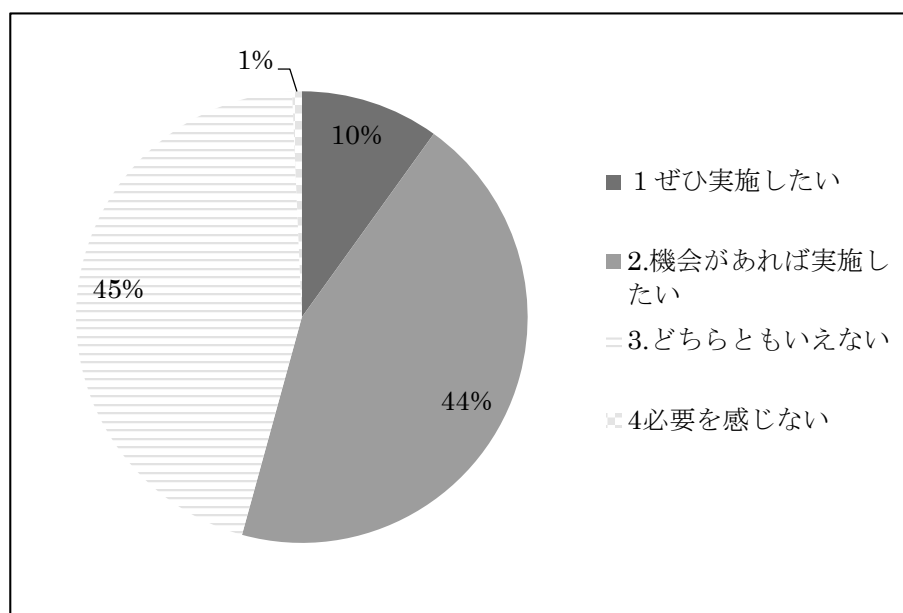
本財団では実施のガイドとなるようにハンドブックを作成した。それは、パンフレットを読んで興味をもったり、あるいは、実際に ECEQ 公開保育に参加して、そのよさに気がついたりして、自園でも取り組もうと考えたりして、ECEQ の手法を用いて幼児教育の質の向上を図ることを決めた幼稚園や認定こども園のためである。ECEQ のステップ毎に何のためにステップを踏んでいくのか、またそれぞれのステップでどのような準備が必要か、時間をどの程度用意すればよいかなどの見通しを各園がもつためのものである。

この実施園ハンドブック「ECEQ 実施園ハンドブック」については文科省委託事業報告書別紙を参照されたい。内容は ECEQ コーディネーターハンドブックと対をなすようにまとめられている。

次に「あなたの園でも ECEQ に取り組んでみたいですか」という項目で、自園での実施をどう捉えるかについて尋ねた。その結果は以下の通りである。

6) あなたの園でも ECEQ 公開保育を実施したいとおもいましたか。

1. ぜひ実施したい	10%	43 人
2. 機会があれば実施したい	44%	192 人
3. どちらともいえない	45%	195 人
4. 必要を感じない	1%	3 人



結果としては、「ぜひ実施したい」「機会があれば実施したい」という意向の園は、過半数にのぼることが分かった。具体的には、

- ・保育を他の園に見てもらうことで保育の幅を広げたい。
- ・実りのある保育につながると思うので。
- ・やることによって、保育者の向上になると思った。
- ・問いをつくることにより課題が明確になることと、振り返りの機会となる。(自分の姿はなかなか見えないため)
- ・開いていくことで、さらなる質の高い保育ができると思うため。
- ・園全体で、保育の取り組みを見直す良い機会になると思うため。
- ・不安は大きいですが、今で満足することなく学んでいかなくてはいけないと感じた。
- ・幼児教育をもっと知ってもらう為にも ECEQ は良い機会になると思う。
- ・園の職員が成長する機会をいただけたと思う。積極的に実施すべき。
- ・学びになるのは間違いないと思う。幼稚園教育の大切な所を守りつつ、質向上を普及し

ていくことができる

- ・自園をよりよくする為には、視野が広がって資質向上につながると思う。
- ・先生たちが自信を持てるような気がする。

などという意見があった。

また、ECEQ をすでに実施した園の保育者も積極的にこの公開保育には参加しているようである。自身の公開保育を振り返りつつ意見を述べている。具体的には、

- ・昨年実施したことを元に、研修を続けている。
- ・会話対話を明確に職員間ですることができ、方向性、想いが共有できた。
- ・昨年実施し大きな学びを経験した。何年か経ち必要を感じた時にまた実施したいと思う。
- ・実施させていただき、遊びに変化が出てきた。

などという意見が出ている。これは ECEQ が一過性のものでなく、幼稚園や認定こども園自体の保育者全員に、幼児教育の質の向上のための仕組みが根付いていったからであろう。最後に実施をためらう意見も出ている。その理由をまとめると、

1. 自園の保育に自信が持てない。
2. 日常の保育だけで精一杯であり、ECEQ に取り組む時間が見いだせない。
3. よいものであると思うが、自分自身では決めることができない。

というものであった。

実施園を地道に増やし、幼児教育の質の向上のためには、大変であっても、自己開示・自園開示しながら、その園のよさと、自園で抱える課題に向かって、園外の保育者もともに協働しながら、支え合っていくという取組と考え方を、今後も一步一步、浸透させていく必要がある。

4. ECEQ コーディネーター育成の充実

ECEQ の 5 つのステップの全体を進行管理し、実施園の保育者に寄り添いながらコーディネートすることが ECEQ コーディネーターの役割である。そのために ECEQ は段階毎の目標ややり方のみならず、なぜその手法を用いるのかについての意味を理解していることが望まれる。また併せて、ファシリテートを初めとした様々な技法の習熟も求められる。

ECEQ が実りあるものとなるかどうかは、コーディネーターの存在によるところが大きい。それは、どのようにすればよいコーディネーターが育成できるのかという課題にもつながるとともに、コーディネーター自身が学び続けるための仕組みへも着目することにつながっていく。

本章では、平成 25 年度からスタートした ECEQ コーディネーター養成研修が、当初は量の拡大（コーディネーター数を一定数確保するための研修）に向かいつつも、年々の ECEQ 実施実績から、コーディネーターの教科書であるハンドブックの加筆修正のプロセスの中で、その果たす役割について、年々その重要性が認識されるようになることに従って、研修においてもどのように内容の充実を図ってきたかについて述べる。

（1）全体の研修構造や時間数について（平成 25 年度～平成 28 年度実施分）

ECEQ は全国で同じレベルで実施されるものであり、コーディネーターの養成研修は、全国から一か所（東京）に参集し、本財団で一括して講義する形式を採用してきた。全体研修については以下の通りである。

講座Ⅰ（全体研修） 時間数…12 時間 2 日間の連続講習

講座Ⅱ（全国各地区）ECEQ 公開保育へ参加し、公開保育後の協議会の分科会で、ファシリテーターを体験

講座Ⅲ（全体研修） 時間数…6 時間

（2）内容について（平成 25 年度～平成 28 年度実施分）

年度	養 成 内 容
平成 25 年度～平成 28 年度	
講座Ⅰ 6 月実施	全体研修 ・ 学校評価の目的と課題について ・ 公開保育を活用した幼児教育の質向上システムの概要について STEP1～5 について ・ コーディネーターに求められる資質について ・ 子供理解について 等
講座Ⅱ	各地区にて公開保育のファシリテーターを体験 ※平成 25 年初年度のみ講座Ⅰの次の日に公開保育を全体で実施

	・公開保育後の分科会におけるファシリテーターの体験とその振り返り等
課題提出	・受講者が実際にファシリテーターを体験し、実施後の課題等を整理
講座Ⅲ 2月実施	全体研修 ・ワークショップを実施し、養成講座を通して理解したこと、わからないことの抽出 ・ファシリテーションのデモンストレーション ・振り返りの園内研修の持ち方 ・報告書の作成について 等

※ 平成25年初年度は、初めてということがあり、ECEQの研修イメージが実際にもてるように、実際のECEQの各ステップを希望受講生に向けて公開実施とした。公開保育当日については、第1期生の全受講生が参加して実際に体験した。

(3) 全体の研修構造や時間数について（平成29年度改善して実施したもの）

講座Ⅰ（全体研修）	時間数…6時間 2日間の連続講習の一日目
講座Ⅱ（全体研修）	時間数…6時間 2日間の連続講習の二日目
	*模擬的にECEQ公開保育を実施し、研修生が全員で参加する。
課題（全国各地区）	各地区で開催されるECEQ公開保育へ参加し、公開保育後の協議会の分科会でファシリテーターを体験することなど
講座Ⅲ（全体研修）	時間数…6時間
講座Ⅳ（自園）	自園にてECEQを実施し、実際に自園での体験を通してECEQのよさや配慮事項を当事者として学ぶ

(4) 内容について（平成29年度実施分）

年度	養成内容
平成29年度～	
講座Ⅰ・Ⅱ 6月実施	講座Ⅰ 全体研修 ・学校評価について ・公開保育を活用した幼児教育の質向上システムの概要について - STEP1～5について ・コーディネーターに求められる資質について ・子供理解について 等 講座Ⅱ 東京都内の園にて公開保育に参加 ・公開保育までの園内研修についての実際（STEP1～3）

	・公開保育に参加（STEP4） ・公開保育後の分科会におけるファシリテーションについての実際
課題提出	・受講者が実際にファシリテーターを体験し、実施後の課題等を整理
講座Ⅲ 2月実施	全体研修 ・提出された課題についてワークショップを実施 ・理解したこと、わからないことの抽出 ・振り返りの園内研修の持ち方について ・報告書の作成について 等
講座Ⅳ (二年目)	自園での ECEQ の実施 ・自園に ECEQ コーディネーターを招聘し、公開保育を実施する側を体験し、システムの理解を深める。

（５）研修等の改善のポイント

a. 公開保育コーディネーターハンドブックの作成と充実

平成 25 年度末には「公開保育コーディネーターハンドブック」を作成した。これは、コーディネーターの役割を果たすためのテキストである。公開保育を活用した一連の流れや、事前研修から公開保育当日、また振り返りの園内研修の持ち方について示した他、コーディネーターに求められる資質について記述した。

このテキストは、年々の ECEQ 実施園からのアンケートやコーディネーターからの振り返りを基にして、加筆修正等を図ってきた。平成 27 年度は（公社）東京都私立幼稚園教育研修会での研究成果を基に、「ジョハリの窓」の概念からのステップの意味付けを加筆（ECEQ コーディネーターハンドブック 30-31 頁参照）して、質の向上はどのようにして図られるのかを整理した。

b. 第三者評価への対応

平成 26 年度には、公開保育を実施する園のための『公開保育を活用した第三者評価公開園実施ガイド』を作成し、コーディネーターの進行管理とは離れた客観的な視点からの園の取組自体の評価ができるような指標（評価の観点）をまとめた。この指標を基に、当機構の研修研究委員の正副委員長以上の役職者によって、認定こども園における第三者評価を実施することとした。

元々同一地域における他の幼児教育施設から（公私を問わず）保育者を広く自園に招き、実際の保育を公開し、その後に協議会を開催して意見交換するという方法は、文部科学省における学校評価ガイドライン（幼稚園版）における第三者評価に位置付ける（幼稚園における学校評価 ガイドライン〔平成 23 年改訂〕12 頁参照）ものである。認定こども園の場合には、従来の保育所における第三者評価も実施されていることから、厚労省の意図する有資格者における外部の視点からの客観的な第三者評価にも資するために作成された指標である。

c. コーディネーター資格の更新システムの設定

平成 25 年度から平成 28 年度までの間に 223 名の公開保育コーディネーターを養成してきたが、講座修了者がコーディネーターとして他園の園内研修に関わる実施体験により様々な課題がでてきた。

例えば、実施後、コーディネーターが最も苦勞するところは、事前の園内研修（ステップ 2）の結果から、保育の「問い」を設定するまでの過程にあることが挙げられた。そのために、毎年度フォローアップ講座を本財団の幼児教育実践学会に合わせて開催し、課題についてコーディネーター同士が共に考え合う機会を持ってきた。

またコーディネーターが独善的に振舞ってしまった場合に、実施園との間での行き違いが起きてしまうことがあり、翌年の研修の重点事項として、コーディネーターの立ち位置についての研修の強化などもはかってきた。

d. 研修の構造の修正について

平成 29 年度は、「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」を ECEQ と改名したことも踏まえ、養成内容の更なる充実を図ることから、養成講座の見直しを行い、養成課程を二年間とし、二年目には受講者が自園で ECEQ を実施し、ECEQ コーディネーターと共に学ぶ経験もその課程に加えた。一方で平成 27 年度より園長・リーダー研修会を、平成 28 年からは評価者の育成も開始したことに伴い、公開保育コーディネーターは、園内研修を支援する援助者であること等、養成内容を整理し、新たなカリキュラムの構築を図った。

e. 研修内容の精選について

従来の養成研修は、全体研修 I においては、ECEQ のシステム開発に中心に関わった者によって、2 日間の時間を割り振って、ECEQ のシステムの概要や具体をそれぞれにまとめて講義してきた。この間、ECEQ コーディネーターハンドブックは、年々、加筆修正され、コーディネーターの役割も明確になり、また ECEQ の捉え方もより深化する方向でその意味が解釈され、改善がされてきた。このため研修もハンドブックの改訂に合わせて、変化させる必要がでてきた。

そこで、平成 29 年度は、平成 28 年に実施された研修において、実際にそれぞれの担当者がどの部分の講義を行っているかについてのリサーチを実施した。方法としては、あらかじめ研修項目（細目）を羅列したシートを用意し、内容に触れたところを確認して、講師間の内容の重なり等を確認した上で、誰にどの部分の内容を講義してもらうかについて、あらかじめ調整をすることにした。

（6）今後の課題

ECEQ システムは内容としての深化や洗練、コーディネーター自身の養成研修の充実、

コーディネーター資格者となった後も質の向上を目指すという各々歩みを進めている。

一方で重要な視点は、ECEQ 実施園自身がこの取組を基にして、園自己評価の取組から課題を設定し、向上をし続ける PDCA サイクルを内包する組織になるということである。園という組織においては、園長以下、全職員が共に園の現状を把握し、向上を目指す意識が根付いていくことが重要である。また、全職員の意識の醸成とともに、主にその役割を担う保育者の育成もまた必要になってくる。

今後、コーディネーターにとっては、ECEQ のステップを最後までやり遂げ、報告書を作成するといういわゆるルーティンが終了することがゴールなのではなく、ECEQ 実施園が、この取組が終わった後に、更に向上する園になるために何を残すことができるかをコーディネーター自身が意識した取組に向かっていく必要がある。

5. 教育の質を評価するための指標の開発

(1) これまでの取組

本財団では、これまで、公開保育を活用した学校評価実施支援システムの開発に加えて平成 27 年度には第三者評価の一手法として「幼稚園・幼保連携型認定こども園における評価実施試行例」を作成し、現在までに全国 10 カ所で第三者評価を実施している。その手法としては ECEQ コーディネーターと連携しながら公開保育時における保育のプロセスについての評価を中心に置きつつ、実際の保育を支える指標として実践と運営面に分け、更に実践を以下の 4 つのカテゴリーに分けて構造的な質についても評価を行ってきた。

A 教育・保育

- ・愛されて育つ子供・・・子供の人権、安全と健康
- ・子供と共に育つ保育者・・・保育者の資質向上・研修
- ・実践・・・子供理解・保育の計画・保育環境・保育の実践・記録振り返り
- ・家庭・地域連携

B 運営

- ・運営体制
- ・安全管理
- ・子育ての支援

人生の始まりである乳幼児期に全ての子供が愛されて育ち、自分が自分であってよいという感覚と、人は信頼するに値する存在であり他者と共に居ることが心地良い、という感覚が育つことが重要である。そのために子供の思いに寄り添い、子供一人一人が自らの良さを伸ばせるように支えていくことを大切にしたい実践がなされるよう、保育の質を評価するとともに、園が主体的に自園の課題の解決に取り組むなど、自己評価を中心とするその園の学校評価全体が充実することが重要であると考えている。そのためこれまで真に教育の質が向上するよう、会議や研修の場で全ての保育者の意見が尊重され、主体的に参加するような園の風土づくりを支援してきた。

(2) 教育の質を評価するための指標の開発に当たり

前回の幼稚園教育要領の改訂からこの 10 年間で、幼児教育の重要性が世界的に広く認知されるようになり、本財団においても保育のプロセスを重視して ECEQ の開発ならびにコーディネーターの養成を実施してきた。幼稚園設置基準や行政の監査のレベルではなく、実践者自らより高い質を目指すために各園の実情に即して幼児教育の質向上の支援を行ってきた。

これまでも数々の幼児教育・保育の質の指標が開発されてきたが、それらは単独で幼児教育の質を完全に評価できるものではなく、様々な指標を踏まえながら幼児教育の質を評価してきた現状がある。又、多くの指標は客観性を求めるために正か否か、つまりその基準を満たしているかどうかという、わかりやすい量的な評価であったが、そもそもその基準を満たすための風土や園文化、関係性はどうであったのかという視点やそれらの文化を創造するための視点や指標が十分とは言えなかった。

日本の幼児教育の質の高さ、特に子供の気持ちへの共感や子供に関わる際の細やかさは、これからも大切にしていきたい日本独自の保育の文化であると考えられる。しかし、一方でその細やかさや配慮が同僚への過剰な気遣いになり、主体的に研修や会議に参加し自らの考えや意見を述べる際に障壁となるおそれがある。これまでの ECEQ 実施園の事例からも保育の課題を解決し、質を向上させることができた園では主体的に話し合える風土が形成されつつある。

個々の保育者が自分の意見を安心して出せることが園の保育を振り返り、課題を解決し、向上させていくことにつながると共に、主体的に生きる大人が身近に居ることが子供の成長、特に子ども自身の主体的な態度や市民性の育ち、コミュニケーション力や試行錯誤を通しての思考力等にも関わってくるものと思われる。

幼児理解、保育の計画、環境の構成や関わり等の質の高さを支えているのは園の保育者の関係性であり、その風土を構築する園長や主任等のチームマネジメント力やリーダーシップと言える。そのような観点から、これからの幼児教育の質向上に欠くことのできない重要な指標として、チームマネジメント（リーダーシップ）の視点が重要であろう。園長、主任のリーダーシップはもとよりミドルリーダー等のフォロワーシップやメンバーシップが様々な場面で機能的に発揮されることにより、働きやすさ、専門職としてのキャリアの構築、保護者・社会との幼児教育の目標等の共有、開かれたカリキュラム等に波及し、結果として質が高まっていくであろう。

（３）チームマネジメントの指標（案）

A リーダーシップ

①園の理念の共有

- ・園の理念、建学の精神、大切にしていることが明文化されており、園長・主任はそれを明確に語ることができる。
- ・園長は、保育者が園の理念、建学の精神、大切にしていることを保育者や保護者に伝えている。
- ・園の理念、建学の精神、大切にしていることは、教育目標へと置き換えられ、全体的な計画、教育課程、指導計画に反映されている。

②園風土の醸成

- ・園では、保育者が精神的に安心・安定して保育に取り組めるよう同僚との関係性を構築したり、互いの良さを認め合うような雰囲気を出すためにさまざまな取組をしている。
- ・園では、保育者が協働し、保育の質の向上に繋がるように、さまざまな工夫を行っている。
- ・園では子供の育ちを中心に置き、子供の育ちを喜びとする雰囲気がある。
- ・経験年数や年齢に関わらず、個人の思いや意見が尊重される雰囲気がある。

③協働的リーダーシップ

- ・それぞれの役割や経験年数に関わらず自ら主体的に保育についての情報を発信し共有する雰囲気がある。
- ・同僚のみならず、保護者や地域を巻き込んで教育活動を進めている。

B 人財育成

①新任の育ちを支える

- ・新任保育者に対しては園の理念、保育の方針等基本的なオリエンテーションがある。
- ・新任研修プログラムがある。
- ・新任の言葉や態度に対して、相手の思いを無視しての否定や批難批判の言葉や態度を表す人がいない。

②メンターシップ

- ・経験の浅い保育者は経験のある保育者によってサポートされている。
- ・経験の浅い保育者をサポートする保育者のためのプログラムがある。
- ・園には子供の育ちはもちろん、保育者が成長していくことを喜びとする雰囲気がある。
- ・経験の浅い保育者の課題に寄り添い、解決する場が保障されている。

③働きやすさ

- ・保育者の経験年数や個性に応じた働きやすさを促進するための計画や取組がある。
- ・園は、保育者が専門性を発揮し、保育に集中できるよう、働く環境や労働条件の向上に努めている。
- ・体調不良や家庭の事情等に応じて無理せず休めるように配慮している。

④専門性の向上

- ・園長、主任、学年リーダー、専門リーダー等の役割に応じて計画的に研修に参加している。
- ・研修俯瞰図、キャリアパスに応じて研修が受講されている。
- ・園の課題や自己評価の重点について園内で研究をまとめ、園内外で発表している。

IV.研究の成果と今後の課題

本年度は、幼児教育の質向上を目指した学校評価の推進に関して、私立幼稚園等における独自性・多様性というものを尊重した学校評価の在り方という観点で研究を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

本財団において開発した「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム(ECEQ)」は、幼稚園等が公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の良さや課題を見付け、教育活動における PDCA サイクルを機能させることによって教育の改善を図るものである。しかし、建学の精神の下に多様な特色ある教育を実践している私立幼稚園等の保育者が、公開保育の場において、互いの違いを理解し認め合いながら、教育の改善につなげる対話を深めるためには、そのための手法が必要であると考えた。その一つの手法として ECEQ の特長である「問い」というものに着目した。

公開保育に参加した保育者へのアンケートの分析結果や ECEQ 実施園の事例研究から、以下の二点のように保育者が互いの違いを認め合いながら対話と内省を深めていくために「問い」という手法が大変有効であるということが明らかになった。

①「問い」作成時において同僚との対話が促進され、課題が共有化される

ECEQ 実施園の保育者にとっては、「問い」を作る過程で、同僚との対話が生まれ、そこで互いの見方、考え方の違いに気付きながら、更に対話を重ねることで子供の育ちの理解や保育のねらい、そのための環境の構成や援助などについて考えを深め、自分たちが今、課題としていることを共通理解する体験をしていることが分かった。これらの体験により、園内の同僚性が育まれ、より対話と内省が促進されることで教育の質が向上していくことが明らかになった。

②公開保育の視点や課題が参加者のなかで共有化され、協議が深まる

公開保育の場においても、「問い」があることで参加者の保育の視点が共通になるという効果と、子供の姿を中心にした参観ができるといった効果があげられた。このことは、保育参観の後の協議会においても良い影響を与えており、「問い」があることで話し合いが活性化したり深まったりしていることが分かった。協議会の中で活発な意見交換がなされることで、ECEQ 実施園の保育者と参加者との対話と内省が進み、より深い学びへとつながっていくことが見てとれた。「問い」という共通の課題意識を持った対話だからこそ、参加者から提示される多様な見方、考え方がより意味をもち、保育者一人一人の内省を促すものとなっている。「新たな意見、様々な視点からの意見をきくことで、今まで当たり前だと思っていたことについても、今一度考える機会となったり、自分の考えだけに凝り固まらず幅を広げていくことができたりして良いと思った」という実施園の保育者や参加者の意見は、多様な意見に出会い、そこから生まれる新たな気づきが、幼児教育の質向上に寄与することを表している。

次に、ECEQ を実施することによる効果としては、ECEQ 実施園のみならず公開保育に参加した保育者にも教育の質の向上につながる効果が二点あることが、アンケート調査か

ら明らかになった。

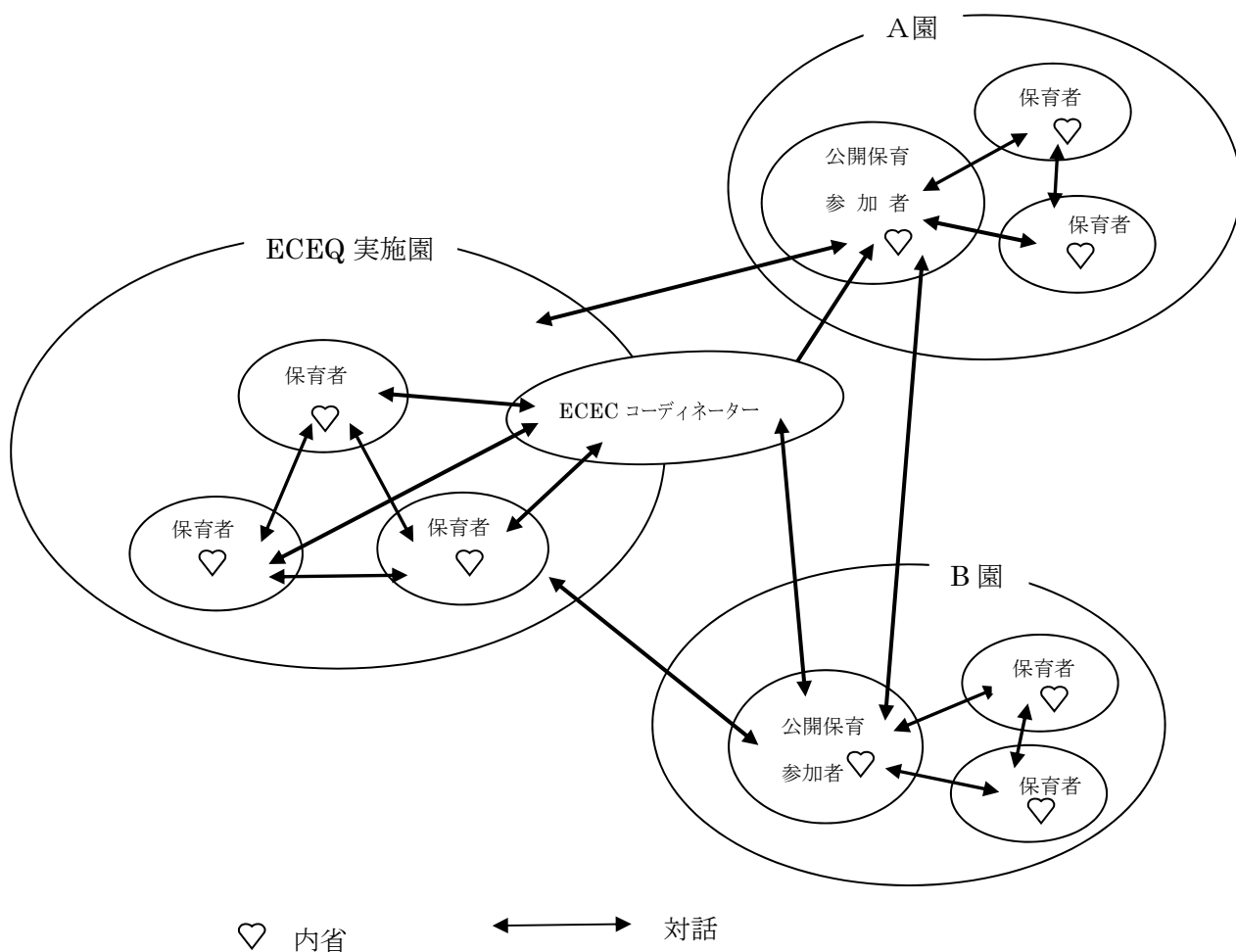
①保育についての多様な意見と出会い、新たな気づきや学びがある

ECEQ の公開保育に参加して、保育を参観したり他の参加者や実施園の保育者と協議したりすることで新たな気づきや学びがあり、そのことが保育の質向上につながるということである。

②公開保育参加者の園でも対話と内省が促進される

保育後の振り返りや対話を経験し、そのことが保育の質向上につながると実感した参加者が、自園においても同僚と保育の振り返りや対話をする必要性を感じ、積極的に取り組もうとするようになったという効果があげられた。

下に示す図のように、ECEQ を実施することによって、ECEQ 実施園及び公開保育参加者の園における保育者の対話と内省が促進されることが分かった。幼稚園等が幼児教育の質向上を目指した学校評価を推進していくためには、保育者間での保育の振り返りや対話の深まりが不可欠であることから、今後 ECEQ が多くの園で実施されることにより、実施園のみならず公開保育参加者の園の教育の質向上にも大きく寄与することが期待できよう。



また、全国の幼稚園等の学校評価の在り方を改善するためには、私立幼稚園関係者のみで行う公開保育にとどまらない公開保育の在り方が求められる。今年度の ECEQ 公開保育においては、県の幼児教育アドバイザー、保育者養成を行う大学の教官、地方自治体の行政担当者等も参加者として加わった園もあり、公開保育後のアンケートや感想からも、ECEQ の目的やその方法、効果等についての理解が深まった。

ECEQ を幼稚園等で実施するための手立てとしては、幼稚園等の保育者が ECEQ について関心を持ち、その目的や方法、効果等について理解することが重要である。そのために、ECEQ の公開保育に参加する体験を基に理解推進を図るという手立ての、ECEQ について分かりやすくまとめたリーフレットを作成して全国の加盟園に配布することを実施した。また、リーフレットを読んで ECEQ について興味を持ったり、実際に公開保育に参加してその良さに気付いたりして、自園でも取り組もうとする幼稚園等のために、実施のガイドとなるような「ECEQ 実施園ハンドブック」を作成し、本財団のホームページからダウンロードできるようにした。

ECEQ コーディネーター育成については、平成 25 年度から平成 28 年度までに実施した ECEQ コーディネーター養成研修のカリキュラムについて見直しを行い、研修内容の充実を図った。具体的には、ECEQ コーディネーター養成研修の構造を修正し、これまで一年間で行っていた研修を二年間とし、二年目には受講者が自園で ECEQ を実施し、ECEQ コーディネーターと共に学ぶ経験をその課程に加えた。また、研修内容の精選も行い、より実効性のある研修内容に変えることができた。また、「公開保育コーディネーターハンドブック」を加筆修正した「ECEQ コーディネーターハンドブック」を使用して、ECEQ コーディネーター更新講習を実施し、ECEQ コーディネーターの更なる質向上を図った。

幼児教育の質を評価するための指標については、これまで国内外で様々な指標が開発されているが、それらを踏まえながら日本の幼児教育にマッチした質の評価の指標について検討を行った。その結果、幼児理解、保育に関する各計画、環境の構成や関わり等の質の高さを支えているのは園の保育者の関係性であり、その風土を構築する園長や主任等のチームマネジメント力やリーダーシップがその園の教育の質に大きく影響すると思った。そのような観点から、これからの幼児教育の質向上に欠くことのできない重要な指標として、チームマネジメント（リーダーシップ）の視点が重要であるとの考えに至った。園長、主任のリーダーシップは元より、ミドルリーダー等の役割が様々な場面で機能的に発揮されることにより、働きやすさ、専門職としてのキャリアの構築、保護者・社会との幼児教育の目標等の共有、開かれたカリキュラム等に波及し、結果として質が高まるものと考えられる。

以上のような成果とともに、新たな課題も見出されている。ECEQ を実施したことによって、その後も継続して園の教育の改善に取り組むようになったという事例報告があった。幼児教育の質を向上していくためには、園の教育課程の実施状況を評価し、改善を図る必要がある。各幼稚園等においては、全体的な計画に留意しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて教育課程を編成し、教育課程の実施に必要な人的・物的な体制を

確保して改善を図っていくことが重要である。各幼稚園等の教育課程に基づき、全職員の協力体制の下で、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの実施が大きな課題である。カリキュラム・マネジメントの推進に関して、ECEQ がどのような役割を果たすことができるのか、今後の課題としたい。

また、ECEQ コーディネーター養成研修のカリキュラムの改善にあたり、養成研修を二年間とし二年目には受講者が自園で ECEQ を実施するという研修内容を加えたが、それらについての評価も今後行っていきたい。

さらに、幼児教育の質を評価するための指標については、チームマネジメントの視点に基づいて指標を開発したが、これらをどのように評価するかといった課題がある。

幼児教育の質向上を目指した学校評価の実施を支援するシステムとしての ECEQ が幼稚園等に広く支持され、ECEQ を実施する園が増えることによって、日本の幼児教育の質は着実に高まっていくものと理解している。幼稚園等の保護者や地域社会が、学校評価の重要性や ECEQ について関心を持つことによって、各園の学校評価への取組がさらに推進することを願っている。

おわりに

教育という営みは、本来とても主体的な営みであると思います。近年幼稚園等における評価の重要性が社会的に認識されてきておりますが、教育が主体的な営みであることを考えると、その教育の評価の在り方も主体的であることが望ましいのではないのでしょうか。日本における学校評価は、以前より自己評価というものを基本にしていますが、それは教育が主体的な営みであることと深く関わっているように思います。

より良い教育をめざすという意志のもとで、自らの教育を真摯に振り返り、改善策を見出し、アクションを起こしていく、このような主体的な評価の営みがあってこそ、質の高い幼児教育が生み出されていくのです。各幼稚園等が組織としての人格をしっかりともち、主体的に教育を行っていけば、そこには独自性というものが生じてきます。特に建学の精神に基づいて教育を行う私立幼稚園等にとって、この独自性というものは園の存在意義にも繋がるととても重要なものです。私立幼稚園等がそれぞれの独自性を活かしながら、質の高い教育を行うことによって社会に貢献していくことが、今後さらに求められてくることでしょう。それに応えていくためには、園長だけではなく、保育者全員が自園の教育の共通のビジョンをもつことが大切であると思います。

それぞれ独自性をもった幼稚園等が多数存在することで、幼児教育の世界に多様性が生まれます。多様性とは「幅広く性質の異なる群が存在すること」ですが、多様性があることは豊かさに繋がります。本財団がこれまでに研究を積み重ね開発してきた「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム(ECEQ)」は、独自性と多様性の両方を尊重した学校評価であると言えます。園の教育を広く公開し、外部の視点をもった多様な人々と様々な意見を交わし合うことによって、一定の客観性を担保しながら、園の内省を促していくこの評価の在り方は、評価のための評価に終わることのない、幼児教育の質向上に繋がる評価であると確信しています。互いの違いを尊重し、認め合い、学び合うことによって、主体である各園や保育者の内省が深まり、自己評価の質が高まるといった成果が上げられています。このことによって、さらに園の独自性が磨かれていくのだと思います。

独自性と多様性を尊重した学校評価の在り方を考えていくうえで大切にされるべきものは、皆が共感できる“共通の願い”ではないのでしょうか。それぞれの園がどのような独自性をもっていようと、また意見が多様であったとしても、「子どもたちの幸せのために」という願いは、日本のみならず世界共通のものであると思います。これからも、子どもたちの豊かな育ちを支える“子どもにとっていい幼児教育”をめざして、多くの方々と様々な意見を交わしながら、より良い評価の在り方を追求していきたいと思います。

最後になりましたが、「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」にあたって、ご尽力、ご協力くださいました皆様に、心からお礼を申し上げます。

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員長 宮下友美恵

参考 ECEQ コーディネーターハンドブック

公開保育を活用した幼児教育の質向上システム

E C E Q

コーディネーターハンドブック



公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

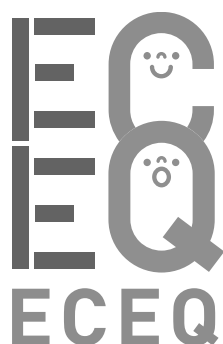
目 次

はじめに	4
1. ECEQコーディネーターの意義	5
(1) ECEQコーディネーターに求められる資質	
(2) ECEQコーディネーターがファシリテーターとして大切にしたい 4つのこと	10
2. ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の流れ	14
STEP1 ヒアリング・打合せ	15
(1) ECEQ実施園への訪問に当たっての準備内容	
(2) ヒアリング・打合せ	
STEP2 事前研修	19
(1) 研修の流れ	
(2) 田の字ワーク後の園内研修の持ち方（例）	
(3) STEP3の「問い」作りに向けて	
STEP3 公開保育に向けての準備	32
(1) 「問い」作りにおけるECEQコーディネーターの役割	
(2) 「問い」作りにおいて気を付けたいこと	
(3) 「問い」の例	
(4) 参加者に公開保育の意図や「問い」を周知する準備	
(5) 公開保育の計画を立てる	
(6) 公開保育の準備についてECEQ実施園との打合せ	
STEP4 公開保育当日	37
(1) 会場準備	
(2) オリエンテーション	
(3) 実践見学	
(4) 午後の分科会に向けて	
(5) 分科会	
(6) 全体会	

STEP5 振り返りのワークショップ	42
（１）ワークに入る前に	
（２）進行について	
（３）まとめとして	
（４）STEP1 からここまでを終えて	
STEP6 報告書の作成	49
（１）作成の視点	
（２）報告書の形式	
おわりに	56
Q&A	57
ファシリテーション参考図書のご案内	60
参考様式	61
様式1 申請書	
様式2 園長、主任等への園の現状についてのヒアリング記入表	
様式3 STEP5終了時アンケート用紙	
様式4 報告書	
説明資料	69
1 ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の仕組み	
2 ようこそ！公開保育へ	

※本ハンドブックにおいては、幼稚園における幼児と幼保連携型認定こども園における園児をまとめて「子供」として、また、幼稚園教諭、保育教諭を「保育者」としております。

ECEQ のロゴマークについて



Early Childhood
Education
Quality System
全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

ECEQ の「E」を縦積みにして身長計のメモリに見立て
「C」は幼児、「Q」は乳児を表し、背の高さの違いは
子供の成長していく姿を表現しています。

また、メモリはECEQ が「評価スケール」の意味をもつ
ことも示唆しています。

色のイメージ

赤色・・・命の源やエネルギー、たくましさ

水色・・・知性、思いやり、安定、平和

オレンジ色・・・情緒、親しみ、コミュニケーション

〇はじめに

公開保育を活用して幼児教育の質向上を図る

～イーセック
ECEQコーディネーターと共に園の良さと課題を明らかにすることから～

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるという認識が高まってきている今、幼稚園や認定こども園（以下、幼稚園等とする）において、環境を通した質の高い幼児教育が行われることは、きわめて重要です。

学校評価は組織的、継続的に教育の改善を図り、保護者や地域社会から理解と参画を得ながら、信頼され魅力ある幼稚園づくりを進めること等を目的としています。

公的な教育を担う私立幼稚園等としては、独自性を失わずかつ独善に陥らないために学校評価に積極的に取り組む必要があります。しかし、現状としては学校評価の中でも最も重要な自己評価がうまく機能せず、園としての課題が明確になっていない園も多く見受けられます。そのような園の園長や主任においては、幼稚園教諭・保育教諭（以下、保育者とする）が会議や園内研修に主体的に参加できていないことや教育実践の振り返りができていないこと等を課題と挙げつつも、どのように改善していけばよいか困惑しているのが現状です。

また、現在、乳幼児施設等で実施されている第三者評価においても、外部の専門家による評価で外部監査的であるという指摘があり、子供の育ちにおいて最も重要である教育実践の内容やプロセスについての視点が不十分である等、実際の現場における教育の質の向上に至るまでの課題は山積しているように見受けられます。

そのような現状を踏まえ、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（以下、本財団）では、幼稚園等が公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の教育実践の質向上に繋げていく学校評価実施支援システム「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」の開発を進めてきました。平成 29 年度からは「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」Early Childhood Education Quality System の頭文字をとって ECEQ(イーセック)とし、この取組の更なる普及を目指しているところです。

ECEQ は複数の保育者が ECEQ 実施園の実践を見学し、その園の良さや課題について対話することによって ECEQ 実施園の内省を促し、PDCA サイクルを機能させることで、教育の改善に繋げていこうとするものです。またこのシステムは、私立幼稚園としての理念や地域事情の違い等に配慮しつつ、幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育という視点も大切にしており、ECEQ 実施園のみならず公開保育に参加した保育者にとっても幼児教育の質について考えたり、対話と内省を重ねることの重要性について学んだりする機会となります。

ECEQの実施をきっかけとして、それぞれの園の教育が充実し、真に幼児教育の質向上につながれば幸いです。そして ECEQを進めていくうえで重要な役割を担っている ECEQコーディネーターにとって、このハンドブックがよき羅針盤となることを願っています。

1. ECEQ コーディネーターの意義

ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）を進めるためには、ECEQ コーディネーターの役割は大変重要です。公開保育までの準備段階から ECEQ 実施園のサポーターとして、事前研修等において園の良さや課題を保育者間で共有する支援を行ったり、公開保育当日はファシリテーターとして参加者全員が質問や意見を述べやすい雰囲気を作ったりしながら、ECEQ 実施園の課題についての話し合いを深める役割を担います。又、公開保育当日だけではなく、その後も ECEQ 実施園が自園の良さを更に伸ばしたり、課題解決に向けて取り組んだりすることができるよう支援していきます。

ECEQ コーディネーターの役割は、正か非か、あるいは A B C のような評価をすることでも、指導や助言をすることでもありません。最も重要なことは、ECEQ を実施した園が自園の良さや課題に気づき、「公開保育をしてよかった」と思えること、個々の保育者が同僚との関係に支えられる中で、意欲的に園の課題を解決し、教育・保育の質向上を目指す園の風土の醸成を支援することです。

（1）ECEQ コーディネーターに求められる資質

ECEQ コーディネーターには次のような資質が求められます。

- ①保育についての理解
- ②ファシリテーションについての理解

①保育についての理解

ア. 幼稚園教育要領並びに幼保連携型認定こども園教育・保育要領の理解

園が幼稚園教育要領及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえながら、それぞれの教育理念や教育方針、教育目標に基づいて、多様で豊かな教育を展開していくことを支えていくためには、幼稚園教育要領及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領を理解することが必要です。

- ・ 幼児期の特性と幼稚園教育等の役割について
- ・ 幼児期の教育・保育の基本について
- ・ ねらい及び内容について
- ・ 指導計画の作成に当たっての留意事項 等

イ. 教育課程及び指導計画等への理解

幼児期の教育は、子供自らが積極的に事物や他者、自然事象、社会事象等の環境に関わり、体験することを通して、生きる力を育て、発達を促すものです。

幼児期の教育のねらいが実現されていくためには、子供が発達にとって必要な経験を積み重ねていくことができるように、発達の道筋を見通して、教育的に価値のある環境を計画的に構成しなければなりません。教育・保育の質向上において、園の教育の全体的な計画を示した教育課程は大変重要です。ECEQコーディネーターは教育課程の意義や、教育課程の編成の手順等についての理解が必要です。また、それぞれの園では、教育課程に基づいて一人一人の子供が発達の時期にふさわしい生活を展開し、その生活を通して発達に必要な経験が得られるように、具体的な指導計画を作成する必要があるため、長期、短期両方の指導計画作成についての理解や、反省や評価、指導計画の改善についての理解が求められます。

- 教育課程の意義と役割
- 教育課程の編成
- 教育課程の評価と改善
- 指導計画の作成（ねらい、内容、子供の姿、環境の構成）
- 反省、評価（保育の振り返り）と指導計画の改善 等

ウ. 子供理解

子供を理解することは教育・保育の出発点であり、そこから一人一人の子供の発達を促す保育が生み出されます。したがって、子供の発達の特性を十分理解し、発達や学びの連続性を確保するための視点や、子供一人一人の活動の意味を捉える視点等について理解する必要があります。そして、より深く子供を理解するための様々な方法や記録の取り方、記録の読み取りやその活用についても理解することが大切です。

- 子供の願いや思いを理解する
- 子供を肯定的に見る
- 活動のプロセスや意味を捉える
- 子供の発達や学びを捉える
- 子供理解の方法
- 記録の方法（日々の実践記録・個人記録等）
- 記録の読み取りと活用
- 幼稚園幼児指導要録、認定こども園こども要録について 等

エ. 環境を通して行う教育への理解

幼児教育においては、教育内容に基づいて計画的に環境を構成し、その環境に関わって子供が主体性を発揮しながら展開する生活を通して子供の発達を促すといった「環境を通して行う教育」です。したがって、ECEQコーディネーターは、子供の周りにある様々な環境（人・もの・こと・時間・空間等）について理解することが大切です。環境を理解するということは、環境そのものの特性を理解することにとどまらず、それらの環境が子供にどのように受け止められ、いかなる意味を持つのかといった、環境と子供との関係性についても理解することです。さらに、環境の中に教育的な価値を含ませながら、子供自らが興味や関心をもって環境に関わることができるような環境の構成についても理解していなければなりません。

- 環境や教材研究
- 環境の構成、再構成 等

オ. 保育者の関わり（援助の在り方）への理解

保育者は、子供の発達を見通した教育的な環境の下で、実際に子供と関わりながら援助等の指導を行っています。子供が主体的な活動を通して、発達に必要な豊かな経験を得ていくためには、保育者の多様な関わりが必要となります。ECEQコーディネーターは、遊びを通しての総合的な指導や、子供一人一人の発達の特性に応じた指導、集団の中で個人の良さが生かされるような指導等について深く理解し、具体的な場面で保育者が子供との適切な関わりをもつことができるよう支えることが重要です。

- 子供との信頼関係の構築
- 子供の主体的な活動の尊重
- 遊びを通しての総合的な指導
- 一人一人の発達の特性に応じた指導
- 保育者の役割と多様な関わりについて
- 様々な指導方法、保育形態について
- 保育者間の協力

力。園内外の研修・研究への理解

それぞれの園が教育・保育の質を高めていくためには、保育者が「学びの専門家」となっていくことが大切です。保育者は自分の実践を省察することで多くのことを学び、他の保育者の実践を見たり、実践について話し合ったりすることからも学ぶことができます。課題をもって園内で研修や研究をしたり、園外の研修に参加することも大切です。また、保護者や地域の方たち、他の職種の人たちと対話することで学ぶことも多くあります。ECEQコーディネーターは、保育者の専門性を高めるための研修や研究について理解を深めると共に、学び合いを支える「同僚性」についても理解することが必要です。

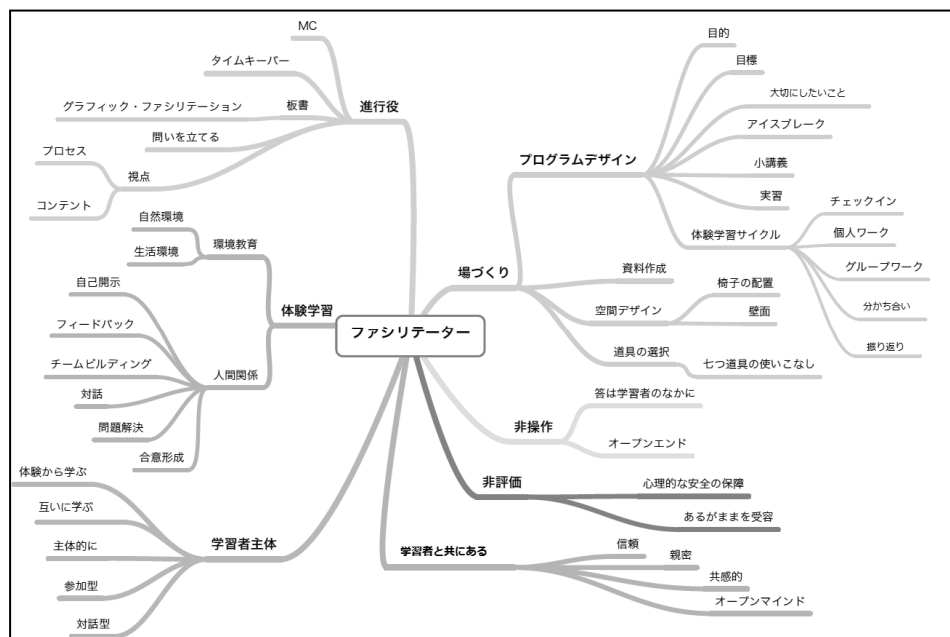
- ・ 実践の省察（保育の振り返り）
- ・ 園内での研修や研究
- ・ 園外の研修や研究への参加
- ・ ECEQ 公開保育への参加や自園での実施
- ・ 同僚性 等

②ファシリテーションについての理解

ア。話し合いを活性化させる役割とその有効性

学校評価の取組や公開保育で自園の課題が見つかったとしても、それを実際に解決していくには、園長・主任だけで取り組んでも園として全保育者で理念や方向性を共有することにはなりません。まずは全ての保育者が主体的に参加し、話し合いを活性化することが重要です。

話し合いを活性化させるためには、経験年数に関わらず全ての参加者の意見が尊重されることが大前提となるため、全ての意見を肯定的に受け止めつつも最も大切なことを、共有していくことができるような話し合いを進めて行くファシリテーターが必要となります。



イ. ワークショップの実践及び手法

社会の様々な場所や企業等でも研修の手法としてワークショップ形式が取り入れられていますが、それは人間関係を良くし、その関係を基に問題を解決したり、合意を形成するために有効であるからです。ファシリテーターとして様々なワークを考える際には、個人や集団の現状から企画していくことになりますので、内容に即したワークの手法やあるいは自発的な意見が出にくい場合に行う手法について理解し、話し合いを円滑化することが大切です。

内容に即したワークショップのテーマ例

- ・対人関係に関するワーク
伝える、聴く（傾聴）、自己開示、共感、鏡になる（フィードバック）等
- ・組織や人間関係に関するワーク
協力する、介入する（グループプロセス）
影響を与える（リーダーシップ）等
- ・課題解決のワーク（応急的に解決、根本的に解決）
- ・アイデアを出し合うワーク

機能に即したワークショップのテーマ例（具体的な仕掛けや手法）

- ・意見が言いやすくなる仕掛け・・・見える化、付箋、ノートリング、マッピング等
- ・意見が言いやすくなる場の雰囲気・・・アイスブレイク、風土作り
（個々の意見が大切にされている実感、肯定的な受け止め、多様性を肯定する雰囲気、意見を整理する方法としてグルーピング、KJ 法、田の字法、議事録等）

ワークショップの活用は、園において子供の実際の姿（動画、写真、エピソード）等を基にした話し合いや、行事についての話し合い等、様々な場面で行われています。しかしその進行においては、一部の保育者の意見に流されてしまうといった傾向が強く、改善の余地があると指摘されているところでもあります。保育者間の良好な同僚性があるからこそ実りある話し合いとなるため、上記のような自己開示やフィードバック等の具体的なテーマや手法を用いて実践できることが ECEQ コーディネーターとして必要となります。

ウ. 課題の明確化や共有化の支援

私立の幼稚園・幼保連携型認定こども園は基本的に人事異動がないため、学校評価における自己評価がうまく機能していない場合には、教育・保育に関する考え方や実践内容が固定化されてしまいがちです。そのような場合に潜在化している個々の保育者の課題や悩み等を明確化し、園としての課題として共有することが重要です。取組の例として、田の字法等を用いて園の肯定的な側面から話し合いを始め、園の抱える課題について保育者が出し合い整理することで、課題が明確になると共に今後の解決に向けての取組が共有されます。

エ. コーディネーター間の協働

本財団が派遣する ECEQ コーディネーターは、通常1人ではなく複数人です。複数の場合には進行役と、記録役(グラフィック役)、その他タイムキーパー役等に役割を分担するとよいでしょう。記録役のコーディネーターは進行役を支える立場であり、参加者の発言が見えるように書き出す他に、参加者の思いを代弁したり、進行役の言いたいことを繰り返し発言する等、参加者の同意を得たりする雰囲気を作ることも必要でしょう。コーディネーター同士は、実際に ECEQ 実施園へ出掛ける前に事前に打合せをして役割を決めましょう。コーディネーター上級者になると、途中で役割を交代して進行していく方法もあります。コーディネーター同士は主従関係ではなく、共に作り合うパートナーです。



(2) ECEQ コーディネーターがファシリテーターとして大切にしたい4つのこと

ECEQ コーディネーターが、ファシリテーターの振る舞いや構えとして大切にしたい重要なポイントは、「ECEQ 実施園が中心」「共にある」「非評価」「非操作」の4点です。

① ECEQ 実施園が中心

公開保育によって実現したいこと(公開保育の目的)は、ECEQ 実施園の教育・保育の質が向上することです。しかし、質向上のための課題発見や問題の解決策を行うのは、あくまでも ECEQ 実施園の保育者にあります。ECEQ コーディネーターが問題を指摘し、解決のための指導をすることはファシリテーションではなくコンサルテーションになります。質向上のための答えは ECEQ 実施園の保育者の中にあり、ECEQ コーディネーターは、保育者たちがそれを見付け出せるような手伝いに徹することが大切です。良かれと思って課題に対するレクチャーを始めたり、アドバイスを送ったりすることは控えなければならない行為だと心に留めておきましょう。

保育者が自分たちを語り合い、互いに気づき合い学び合う風土は、誰かに押し付けられても、誰かに依存してもできません。話したくなるような場作りが、ECEQ コーデ

ィネーターの最も重要な仕事です。そのためにSTEP 1ではECEQ実施園を知るための園長や主任教諭等の管理職を対象にヒアリングを対話的に行います。

STEP 2では田の字法等のワークを用いて保育者が主体的に課題抽出を行えるように支援しますが、ECEQ実施園の保育者がリラックスしてワークに取り組めるようにアイスブレイクを取り入れるのも効果的です。STEP 3では適切な問いを立てるために、公開保育の参加者の立場になって客観的な視点を提示します。STEP 4では、分科会や全体会がECEQ実施園の保育者たちの成長につながる示唆を与えているかチェックしながら進行し、STEP 5では、この先ECEQ実施園が自分たち自身で課題解決ができるような方向性を見定めることを念頭に置いて振り返りをします。

ECEQコーディネーターは各STEPにおいて「(私が)理解するために教えてほしい」「それはECEQ実施園の成長にとってどのように重要か」という態度で問いかけます。決して「教えてあげる」「改善する」等、一方通行にならないように留意しましょう。

② 共にある

ECEQコーディネーターは、「教える者」ではなく「共に学ぶ存在」であることが基本スタンスです。「教える—教えられる」関係性ではなく、ECEQ実施園の主体性を尊重した信頼関係を築くことが土台となります。そのためにECEQコーディネーターが心掛けたいのは、ECEQ実施園のことを「わかりたい」と思う親密さです。「なぜそうなのかがわからない」と断るのではなく、「あなたのことをわかりたい」と心の間口を広げ、どのような発言や考えも肯定的に受容することが大切です。自園の成長のために親身になって接してくれるECEQコーディネーターは、ECEQ実施園の保育者から信頼され、保育者一人一人も自己開示がしやすくなります。普段マネジメント職にあるECEQコーディネーターにとっては、「一緒に学ばせてもらっている」姿勢でい続けることは強く意識しないと難しいようです。そうならないために、ECEQコーディネーター同士は互いの姿勢を振り返ることも大切です。

③ 非評価

「正しい」「間違っている」という判断で物事を見ない立ち位置が、ECEQ実施園の保育者の心理的な安心感を保障します。ECEQ実施園の目標が達成できるように、ECEQコーディネーターはECEQ実施園の成長を願い、あるがままを評価せずに受け止めるのです。

ECEQ実施園は教育・保育の質向上のために、今の課題を解決したいと真摯に取り組んでいます。時折、STEP 2では、ECEQコーディネーターの前で自園の課題を見付けたりマイナス要素を開示することは勇気のいることであり、それだけでストレスになる保育者もいます。ECEQコーディネーターの受容的な見方によって、ECEQ実施園の保育者に「心許せる味方」であることを感じられるよう心掛けたいものです。

時にECEQ実施園の保育者がECEQコーディネーターに自分たちの実践が「間違っていないか」と評価を求めてくることがあります。そのような時も良し悪しをフィードバックするのではなく、その不安感や問いの意味を問い直す応答をしてみるとよいでしょう。

④非操作

ECEQ コーディネーターとして公開保育に関わることにより、ECEQ コーディネーターは自園との違いに気付き、学びを得ることができるでしょう。異なる理念、価値観、メソッド、ねらい等、知れば知るほど他園との違いが鮮明になる中で、自園を振り返ることは良いのですが、ECEQ 実施園に対して「もっとこうしたらうまくいく」「それは違うのではないか」と課題を逆に突き付けてしまわないようにします。

課題や問題に接した時に何が正しいかではなく、それをどのように考えているのかを十分に話し合い、共有することがまず大切です。そうしてECEQ 実施園の保育者が自らの答えを導き出していくプロセスを支援していくのがECEQ コーディネーターの構えです。その課題解決のプロセスの中で、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領や教育課程との整合性はどうなのか、ねらいに対する合理性はどうなのか等を問い掛ける対話力が求められています。

補足資料1 【ECEQ コーディネーター 知識と技能の俯瞰図】

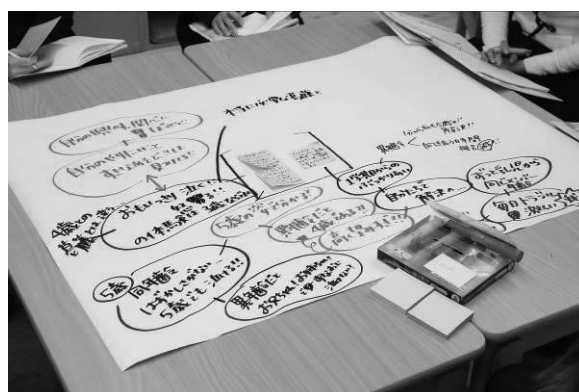
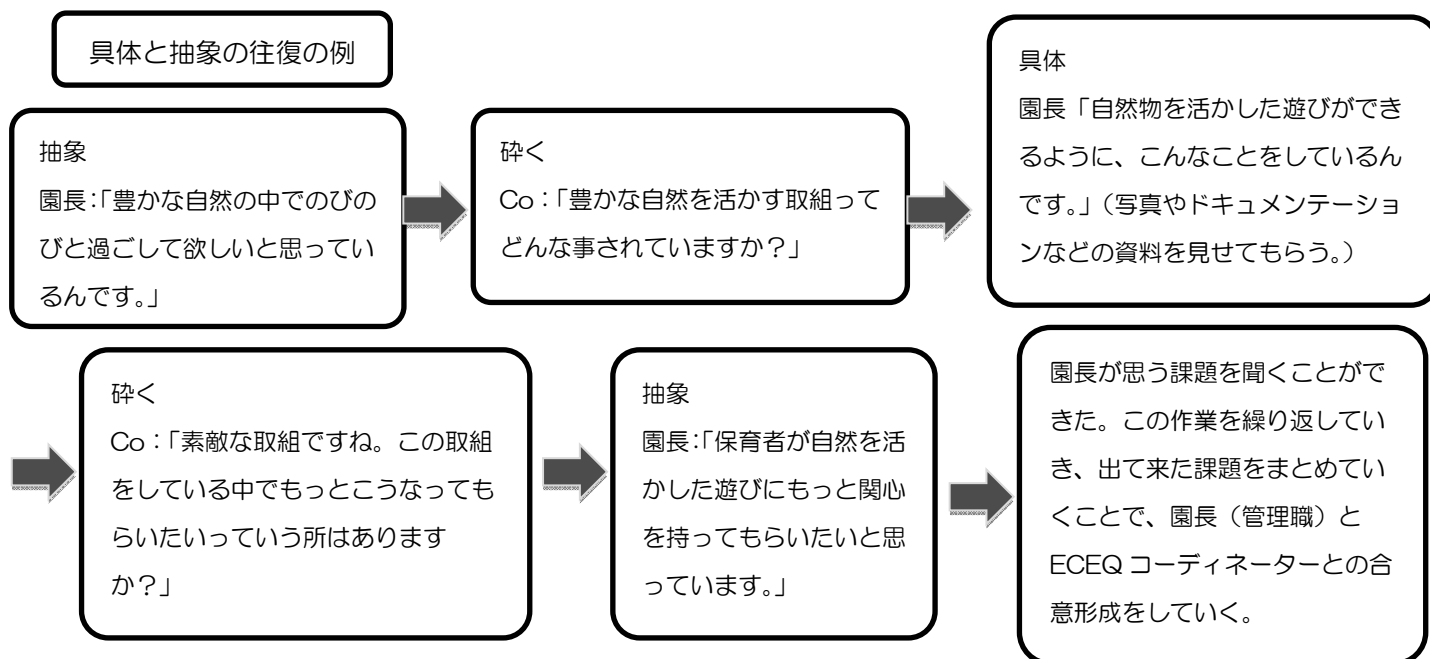
ECEQ コーディネーターに求められる知識と技能をまとめると、下記図のようになります。各STEPの目的を意識しながら各々の力を身に付けていきましょう。

知 識		各 STEP の目的	技 能	
総 論	各 論		対話の技能	対話の技能
幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領とは 教育・保育の質と ファシリテーターとは ECEQ コーディネーターとは 同僚性 新制度との関わり	・ECEQ コーディネーター同士の合意形成 ・リソースとは何か ・協議会会場の下見	STEP1：園長と7リング 園長（管理職）の「現状・課題・改善」認識と ECEQ コーディネーターとの合意形成。	・やりとりの技法 ・リソース探し ・リソースの読み解き	砕く ずらす
	・田の字の進め方と読み方 ・アイスブレイク ・事前ワークの環境設定	STEP2：田の字ワーク 保育者の「現状・課題・改善」認識と ECEQ コーディネーターとの合意形成（園長の意図と合わせる）。	・田の字の読み方 ・雰囲気作りのワーク・見える化・やり取りの技法・足場作り	くくる なぞる
	・問い立てに関する知識 ・足場と問いの関連性 ・準備に必要なもの	STEP3：公開保育への準備 自分たちが知りたいことについて問い立てができる。	・足場と問いの関連性の確認・問い立ての修正・当日の流れの確認・参加者の動き方への段取り	束ねる
	・参加者の意識 ・ガイダンス手法 ・ファシリテーターの役割	STEP4：公開保育当日 問いを巡る協議会が成立する。	・カードを忍ばせる・協議会運営の方法・病んでいる人（保育者や園長）へのフォロー	まとめる 受け止める
	・振り返りのための手法 ・保育の質向上のための知識	STEP5：振り返り・課題に応じた園内研修 次の取組の具体的課題を見出し、課題と改善の取組の意識化。	・雰囲気作り・課題を改善していく手法・課題と改善に見える化する。	確認する
	・子供の姿から保育の質を見る ・報告書の書き方	STEP6：報告 幼稚園教育要領等と組織風土の醸成・学び合い、育ち合う「仕組」の観点から報告書の作成。	・報告書の書き方・公開保育から見えてきた課題と園の取組と報告書の視点の照らし合わせ。	つなぐ

補足資料2

【ECEQ コーディネーターに必要な技能】

砕く・ずらす・くくる・まとめる・束ねる・受け止める等の技能を用いながら、ファシリテーションを進めていくにあたり、STEP1 でのヒアリングや STEP2 の田の字ワーク等では、具体的な取組について聞きながら、補足資料1に示した技能を利用しながら抽象化していきます。



2. ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の流れ

段階	ECEQ コーディネーター	ECEQ実施園
事前	本財団よりECEQコーディネーターの依頼を受けた後、チームとなる複数のECEQコーディネーターとECEQ実施園への訪問日程等について調整	本財団の所定様式にて申請手続きを行い、ECEQコーディネーターの派遣を要請
STEP1	ヒアリング・打ち合わせ	
	①園長・主任等に対するヒアリング ②今後の日程等についての打合せ	①ECEQコーディネーターによるヒアリング ②今後の日程等についての打合せ
STEP2	事前研修	
	保育者によるワークの実施 ・話しやすい雰囲気作りのためのアイスブレイク ・園の良さや課題の整理	保育者による田の字ワークの実施から、自園の良さや課題を整理
STEP3	公開保育へ向けての準備	
	①ECEQ実施園が課題として捉えた視点を参加者と共有するための「問い」作り（園・学年・個々の保育者）の支援 ②公開保育当日の日程等や準備するものについての打合せ	①園の課題を参加者と共有するための「問い」作りへ向けての園内研修の実施 ②公開保育当日の日程等の打合せと資料や会場等の準備
STEP4	公開保育当日	
	公開保育全体への支援 ①オリエンテーションで挨拶 ②公開保育へ参加 ③保育後の分科会でファシリテーターとして参加者から問いへの意見や感想等の整理→良さ・課題等の整理 ④全体会での進行等	公開保育の運営 ①会場準備 ②オリエンテーション ③保育の公開 ④保育後の分科会への参加 ⑤全体会への参加
STEP5	振り返り	
	①参加者からの「問い」への意見や感想等を基に、課題に応じた園内研修への支援 ②ECEQ実施園アンケートを配布	参加者からの「問い」への意見や感想等を基に、課題に応じた園内研修の実施
STEP6	報告書の作成	
	①ECEQ実施園からのECEQ実施記録を基に報告書の作成 報告の視点 ・園の良さや課題に関する視点 ・課題解決に向かう園の姿勢や同僚性に関する視点 ・幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育活動や運営に関する視点 ②ECEQコーディネーターが作成した報告書と実施園からのECEQ実施記録を本財団へ提出	STEP5終了後 ○STEP2からSTEP5のECEQ実施記録をECEQコーディネーターへ提出 ○ECEQ実施園アンケートを園内で実施し、本財団へ郵送 ○当年度末に本財団より「公開保育を活用した幼児教育の質向上の取組」を実施したECEQ認定証が送付

STEP1 ヒアリング・打合せ

STEP1では、ECEQ実施園にECEQコーディネーターが複数人で訪問し、公開保育の流れの説明や園長又は主任に対してヒアリングを行います。

(1) ECEQ 実施園への訪問に当たっての準備内容

①ECEQ実施園との日程調整

ヒアリングの日程を公開園や他のECEQコーディネーターと調整します。

②ECEQ 実施園に準備するものを伝えます。

- ・教育課程 ・指導計画（月案や日案等）
- ・園の要覧や園紹介のパンフレット
- ・園の自己評価公開シート等

③ECEQコーディネーターが準備するもの

- ・ECEQコーディネーター認定証
- ・ECEQ実施園ハンドブック
- ・ECEQ PASSPORT (ECEQ に関するリーフレット)
- ・ヒアリング記入表
- ・ICレコーダー等
- ・参考様式2「園長、主任等への園の現状についてのヒアリング記入表」
- ・説明資料1「ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の仕組み」
- ・説明資料2「ようこそ！公開保育へ」

④ECEQコーディネーター同士の打合せ

- ・事前に、互いのイメージの確認をしておきましょう。
- ・役割確認（進行役と記録役等）
- ・今回の取組への園や園長の準備状況について確認しておきましょう。（ただし、その後の思い込みに通じないように）。例えば園長と保育者のかい離状況の把握等が挙げられます。

📌ここがポイント

※ECEQコーディネーターとしてのスキルアップのために、STEP1終了後ECEQコーディネーター同士で内容の振り返り、プロセスを語り合うことができるとよいでしょう。進行上「あの発言はどのような意図で言ったのか」等が話し合えると、次のSTEP以降のコーディネートへの理解と互いの信頼にもつながっていくでしょう。

(2) ヒアリング・打合せ

①ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）についての説明

ECEQ実施園がECEQコーディネーターを信頼し、安心して公開に臨むことができるように、下記についての説明を行います。

ア 教育・保育の質向上を目指して公開保育を行うことの意義

(参考) ECEQコーディネーターハンドブック「はじめに」

イ ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）について

(参考)・説明資料1「(ECEQ 公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)の仕組」

・ECEQ PASSPORT (ECEQ に関するリーフレット)

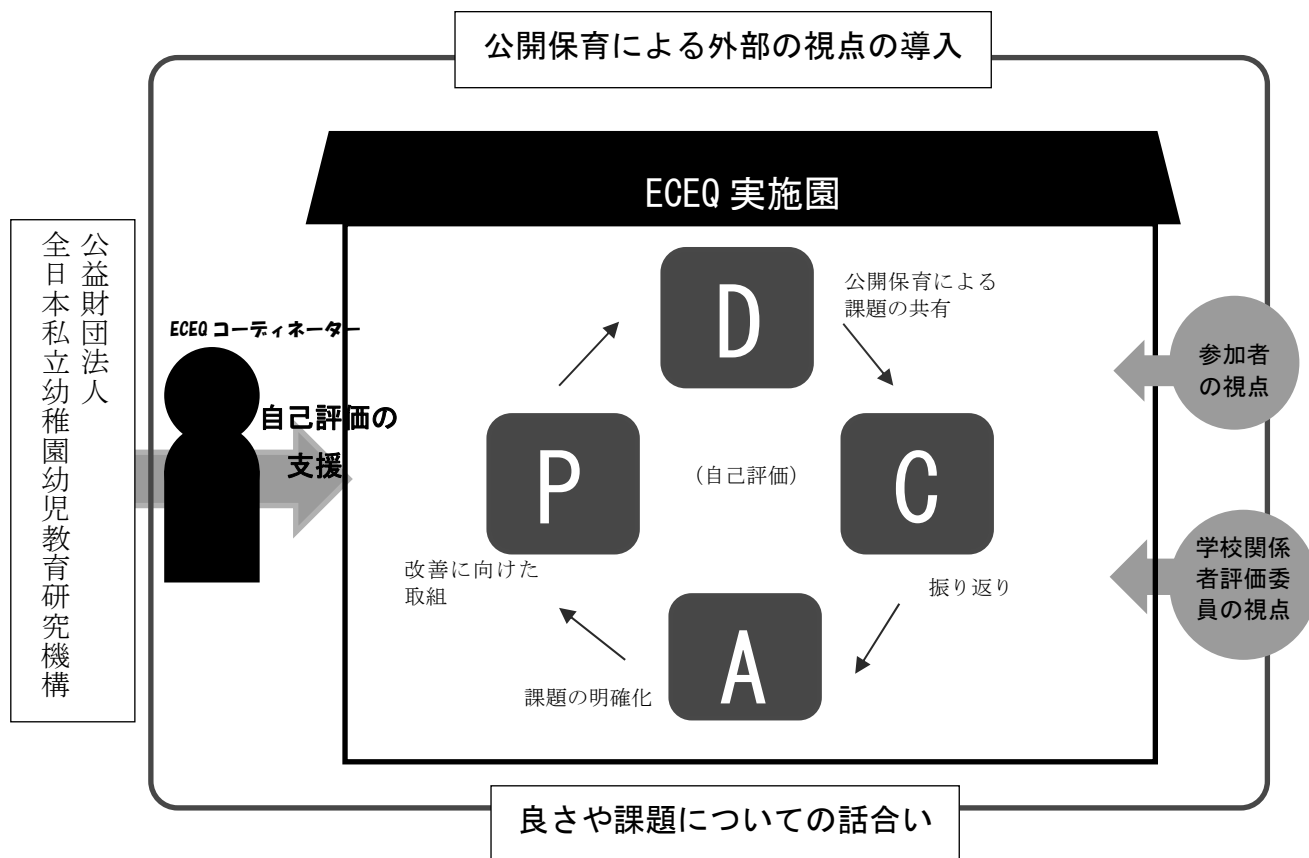
ウ ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の流れ

(参考)・説明資料2「ようこそ！公開保育へ」

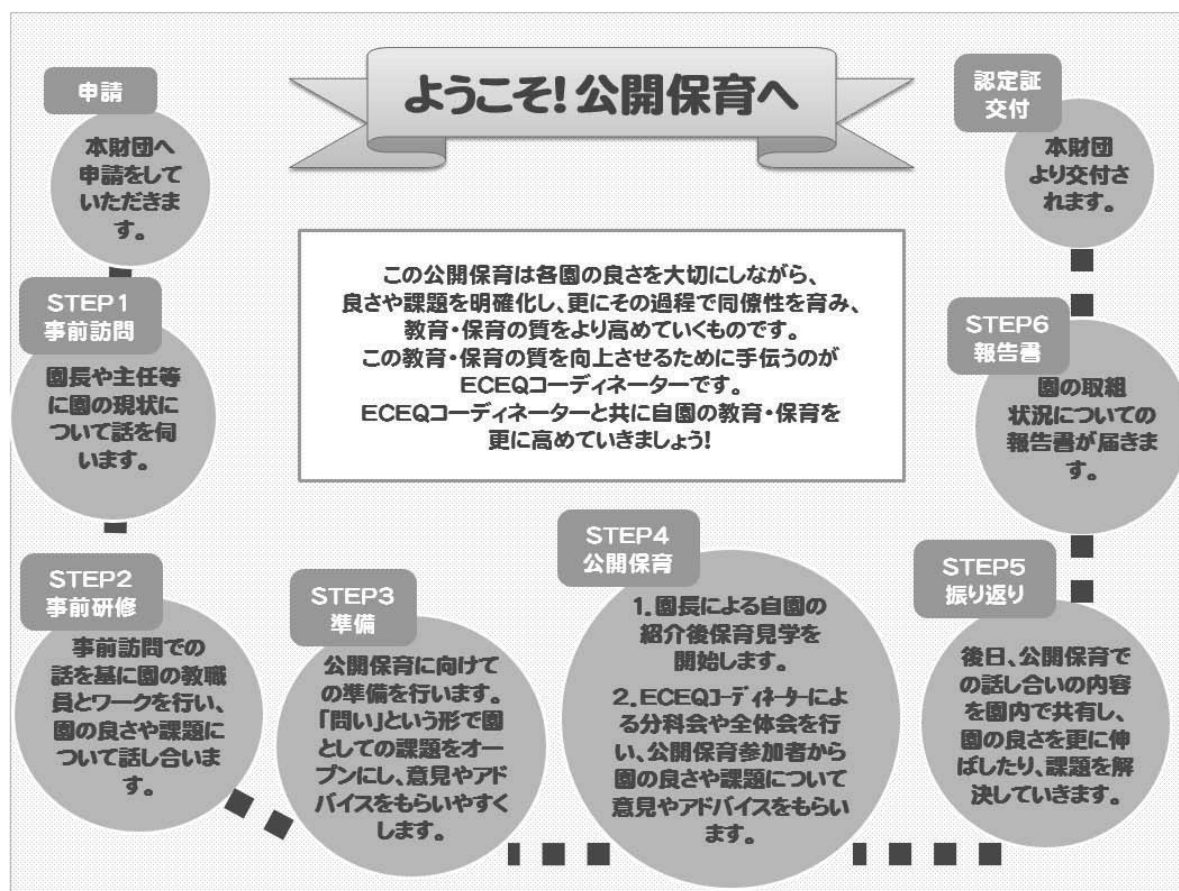
・ECEQ PASSPORT (ECEQ に関するリーフレット)

【説明資料1】ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の仕組

この図は園に説明するものでもありますが、この仕組は園を良くしていくためのものであるということをECEQ コーディネーター自身も再認識しましょう。



【説明資料2】 ようこそ！公開保育へ



📌ここがポイント

公開保育実施上の課題がある場合には、特に丁寧に主旨や良さ（課題の発見、質の向上、同僚性の向上等）を説明しておきましょう。ECEQ 実施園アンケートからも「公開保育の実施や ECEQ コーディネーターの支援は園の教育の質の向上に有効」との回答が「非常にあてはまる。」「あてはまる。」の合計が95%を超える結果を得たことを伝えると良いでしょう。

※ECEQ 公開保育については日常の実践を公開する中で園の良さを伸ばし、課題を発見していくことを伝えましょう。ECEQ 公開保育を行うに当たり、特別な事をする必要はないことを伝えると良いでしょう。

① 園長・主任等に対してのヒアリング内容

参考様式2「園長、主任等への園の現状についてのヒアリング記入表」を利用しヒアリングを行います。

（記入表の内容）

※以下の内容を全て聞こうとは思わないようにしましょう。尋ね方も大切です。尋問ではないことを意識しましょう。

園長先生が話したいことを引き出すための質問例です。話したいという気持ちを汲んで、研修へ結び付く情報集めをしていくことがねらいとなります。

- ・園長の思いは？
- ・建学の精神について
- ・何代目なのか？
- ・何が変わったのか？（代替わりして）
- ・代替わりして苦労したことは何か？
- ・1年目の先生が困った時のサポート役は誰か？
- ・大事に思っていることは何か？
- ・職員の組織体制について、キャリアのバランス
- ・園長がいなときは誰が軸になっているか？
- ・どのように園長の思いを伝えているか？
- ・現場へいつ伝えているのか？
- ・保護者にどのように伝えているのか？
- ・会議の持ち方はどのような在り方か？
- ・週日案の在り方、価値付け、それはどのようなことに気を付けて見ているか？
- ・週日案は誰が目を通しているか？
- ・何を週日案から読み取るのか？
- ・子供たちの今の姿を、園全体としてどのように共有しているか？



事前に依頼していた資料（実践の様子がわかるもの）を基に話し合いを進めます。この時に、園長や主任等が抱えている課題等についても話題が及ぶと今後の支援の参考となり重要なポイントとなりますので丁寧に行いましょう。

② 日程調整

今後の研修の進め方や公開保育等の日程を話し合い、この一連の取組に関する計画を立てます。それに伴い、ECEQ実施園が公開保育開催の案内発送や公開保育参加者の募集等を行うことを伝え、準備を進めてもらうようにしましょう。

STEP2 事前研修

公開保育当日にECEQ実施園と参加者が共に学び合えるよう、STEP2では保育者と田の字ワークを行うことにより、ECEQ実施園の良さや課題を抽出し、STEP1の事前訪問でのヒアリングとのつながりを見つける等、ECEQ実施園の課題を参加者と共有するための問い立てにつながる足場作りをします。

(1) 研修の流れ

①挨拶(5分)

「ECEQ(公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)」についての説明

自園の良さや課題、課題解決に向けての見通し、目標等を保育者間で話し合い共有することを目的にしていることを説明し、ECEQ実施園の保育者がやる気になるような公開保育にしましょう。

※園や保育者を責めるわけではないこと、過去のECEQ実施園から公開保育をやって良かったという声が多く寄せられていること等を説明します。



②アイスブレイク(5分)

アイスブレイクとは集団で行う研修で心が氷のように固まっている状態を砕いていき、緊張をほぐしていくツールです。また、心をほぐすだけではなく和やかな雰囲気を作り、参加者の誰もが気軽に言葉を交わすことができ、表情と体がリラックスできる状態を作り上げます。そして、誰もが気兼ねなく発言し、その発言を認められる和やかな雰囲気を作り、人と人をつなぐことができます。まずは保育者の心をほぐしてワークショップに移りましょう。

(例)・バースデーチェーン(ジェスチャーだけで誕生日順につながる)

- ・ネームチェーン(下の名前で あ〜んの順)
- ・身長順 ・通勤時間順 等

※アイスブレイクについては、今村光章『アイスブレイク入門』(解放出版社2009年)等参照のこと。

📌ここがポイント

アイスブレイクは心をほぐすための目的なので、園の雰囲気が良ければ入れなくても良いでしょう。STEP1の時の聞き取りの内容や、園の中に入った時の雰囲気等を参考に判断していきましょう。

③田の字ワーク

田の字法は、園の肯定的な側面から話合いを始め、園の抱える課題について保育者が出し合い整理することで課題が明確になり、今後の解決に向けての取組が共有されます。

【E C E Q実施園が用意するもの】（1グループ6名として参加人数分）

- ・付箋（7.5 cm×5 cm）
- ・模造紙
- ・水性ペン（黒と何色かカラーがあるとよいです。）
- ・ホワイトボード
- ・マグネット
- ・お菓子⇒ワークを円滑にするためのアメやチョコレート等

※STEP1 が終了した段階で必要な備品についてE C E Q実施園に伝え、用意しておいてもらいましょう。

田の字ワークのポイント

- ・ STEP1 との接点を探すので、最初は自由に話し合ってもらうのがいいでしょう。
- ・ 第二象限まで進む中で、経営・労働面に話が偏る場合もあります。その場合にはSTEP1 での聞き取りを参考に、保育で取り組んでいることや、課題になっていることについても聞いてみましょう。
- ・ 保育者それぞれの意見を尊重しながら話合いを進められるようにしましょう。
- ・ 建設的な話合いになるために、保育者間の力関係に配慮しましょう。わかる範囲でグループ分けにも配慮できるとよいでしょう。

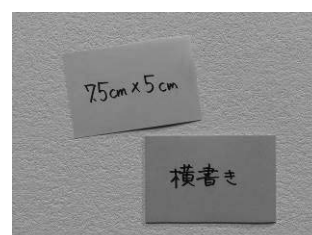
◆田の字ワークの手順

ア グループ分け

- ・ 学年別等その園の実情や規模に合わせるとよいでしょう。
- ・ STEP1 の段階で、園長・主任に相談しておきましょう。

イ 話合い時のルールを伝えます。

- ・ 付箋の使用時は太めのペンで端的に書きます。後は言葉で補足します。補足するために発言をするプロセスが大切です。付箋は 7.5 cm×5 cm がベストです。
- ・ 1 人何枚の付箋に記載するかを伝えましょう。設問に対して 1 人 3 枚から 5 枚がよいでしょう。人数や時間などを考慮して決定しましょう。



ウ 田の字ワーク

- 模造紙を4つに折り、図のように第一象限から第四象限に対しECEQ実施園の保育者が記載した付箋を貼り付けていきます。

第一象限 - 園の良さ - 大事にしているところ - 誇れるところ	第四象限 - 希望 - こうなりたいというイメージ
第二象限 - 園の課題 - 悩み - 難しいと思う所	第三象限 第二象限の原因

※以下の説明の時間配分は参考程度にしてください。

第一象限 園の良さ・大事にしているところ

- ⇒好きな所、続けたい、気に入っている、園の強み、自分たちの強み、誇れる所等
- ・「うちの園の〇〇が好き」と思う所を保育者に書き出してもらいます（3分～5分）。
- ・書き出したものを順番に付箋で紹介してもらいます（15分）。
- *それぞれの考えを肯定的に受け止めるように伝えます（「いいね」等）。
- 「あなたが、それを言うのか」というような雰囲気にならないようにしましょう。
- *似ている意見はまとめていくように伝えましょう。
- *タイトルを付けてもらいます。

第二象限 課題

- ⇒困っている所、悩んでいる所、まだできていない、取り組めていない、難しいなという課題
- ・具体的なレベル、自分のこととして、書き出してもらいます（3分～5分）。
- *付箋の紹介以降、第一象限と同じ過程で行います（15分）。
- ※第三象限に進む前に、STEP1との接点がどこにあるのか、「田の字ワーク読み解きのポイント」を参考に、第三象限で何に焦点を当てたらよいかを考えましょう。

第三象限 第二象限の原因（課題に対しての原因・不安）

- ⇒課題と感じていることに取り組めていないその障壁・不安は何か。
- ・今できていないことに取り組みたいが、やりたいと思っても自分の中に引っかかるものがある。その引っかかるものは何か。どうしてよいかわからないこと等を書き出してもらいます（3分～5分）。
- *付箋の紹介以降、第一象限と同じ過程で行います（15分）。

第四象限 目標

⇒「こうなったらいいな」「〇〇だったらいいな」

第一象限から第三象限を振り返ってみて、こうなりたい・こうしたいというイメージを浮かべた上で、第四象限に進みます（3分～5分）。

*付箋の紹介以降、第一象限と同じ過程で行います（15分）。

☞ここがポイント

田の字の四象限が問い作りにつながるためにも、記述する前に第三象限までを見返して、良さや課題を基に考えていけると、よりECEQ実施園の実情に基づいた問いが立ちます。そのためにも、STEP1でのヒアリング内容との接点も見つけながら、ECEQ実施園の公開保育に向けての方向性が見えてくるようにしていきましょう。

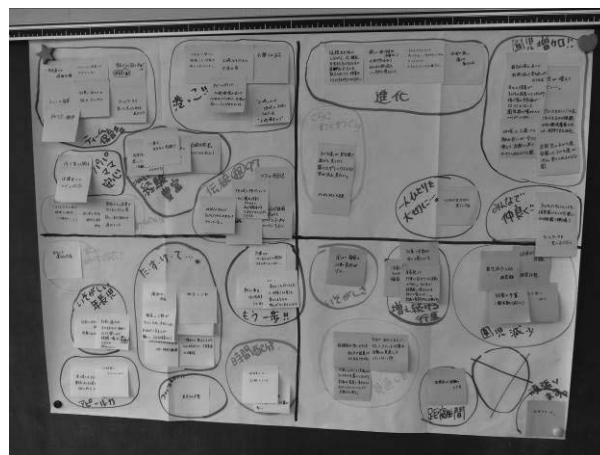
④整理（20分）から最後まで

・田の字ワークをしたことの振り返り、良さと課題、見えてきたこと等を整理します。いくつかのグループに分かれた場合、その内容を全体で共有する等しながら、自分たちの良さや課題についてまとめていきます。

公開保育当日に自分たちの実践のどこに対して意見をもらいたいのか、見てほしいポイントを整理し、意見をもらうための仕掛けである「問い」を設定し、参加者を受け入れるための準備をすること等を伝えます。

☞ここがポイント

ECEQ実施園に問い作りの足場を残していくことが重要です。「ここが足場になりますね」という共通認識を持てると、その後の問い作りのための、ECEQコーディネーターとECEQ実施園とのやり取りがスムーズにいくでしょう。



Keyword: 共に気付く

教えるのではなく、保育者と ECEQ コーディネーターが対話をする中で、保育の課題に共に気付いていくというプロセスが大切です。そのためにも、STEP1 の時から、様々な情報を集め、園についての理解を深めておきます。

保育の中で子供が没頭するのは、自らが見つけた課題に取り組む（主体的に遊ぶ）時です。ECEQ実施園が自分たちの園をよくしたいという課題を見つけていくことも同じことです。先に課題を教えてしまうと、ECEQ実施園の保育者から反発の感情が生まれる可能性があります。自分たちの園を自分たちでよくしたいという必然性は、課題を園自らが見つけていくプロセスそのものの中にあります。そうしたプロセスを作り出すためにも、ECEQ コーディネーターは、あくまでも寄り添いながら共に気づくというスタンスを大切にしていきましょう。



田の字の読み解きのポイント

① 矛盾が生じている箇所がある。

(例) 第一象限：自然が豊かだ ⇔ 第二象限：自然を活かせていない。

○この場合、自分たちが園環境として自然が豊かであることに気が付いているにも関わらず、その自然を保育の中にうまく活かすことができていないと言っているのですから、園の課題として浮かび上がっていると考えてもよいことになります。

② 数の多さからこだわりが見える。

(例) 良さとして、「製作が自由にできる」といった付箋がたくさん出ていますが具体的にはどのような取組をされていますか。

○この場合、ECEQ実施園の良さ、強みとして付箋がたくさん出ています。意識して取り組んでいることなので、具体的な取組を聞いてみると、もっと良くなるために悩んでいることが出てくるかもしれません。

③ 記載のない項目を探す。

(例) 第一、第二象限に子供や遊び、実践に関する記載がない場合、そこについて尋ねていく。

○この場合は、田の字ワークの原則である「見えているもの以上のことは聞かない」というところから外れます。子供や遊び、実践に関することが課題として認識されていない可能性が考えられます。丁寧な尋ね方で、具体的な取組について尋ねていく必要があります。幼稚園教育要領等との照らし合わせをすることも必要になるかもしれません。

「足場」とは

(足場)

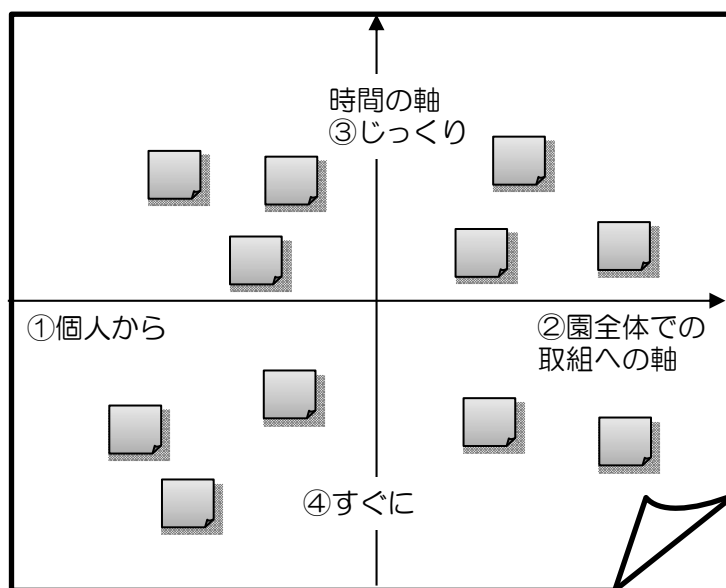
園長及び保育者が取り組みたいと意識できている具体的な課題

ここの「課題」とはECEQコーディネーターや他の人たちから指摘されたことではありません。あくまで園長及びECEQ実施園の保育者が課題と思っていることが「課題」となります。必然性のあるものです。

(隠れている足場)

尚、園長及び園の保育者は必ずしも気付いていない、外部者であるECEQコーディネーターや参加者が感じている園の可能性(ポテンシャル)に気付く事があります。これを出していけると、新たな足場になる可能性が生まれます。

（第四象限の読み解きのポイント）



項目別での分類から、新たな視点として「時間（すぐに取り組むのか、時間を掛けて取り組むのか）」の軸と「主体（個人の取組か、皆での取組か）」という軸で付箋を再整理して実践の課題を振り返ります。第四象限で出た事が問い作りの足場になります。

第四象限に「田の字」と同じように十字を書きます。上に行くほど時間をかけて取り組むことです。下に下がるほど、すぐに取り組めることとします。横軸は、「個人の取組か、皆での取組か」を表す軸です。左端になるにしたがって個人で取り組むことであり、右端になるにしたがって園全体で取り組むこととなります。

- ① 自分が取り組めばよい事柄
- ② 皆で取り組まなくてはならない事柄
- ③ じっくりと取り組む事柄
- ④ すぐにできる事柄

という事象で付箋を整理することで、課題が具体的に再整理されて問い立ての足場となります。

（２）田の字ワーク後の園内研修の持ち方（例）

田の字ワークで見えてきた園の良さを伸ばしつつも、同時に見えてきた課題を整理し、実践の見直しを行うための園内研修として次の二つの方法があります。

①ＫＪ法を用いる方法

ＥＣＥＱ実施園自らが、取り組むべき課題や改善したいことを整理するために、田の字ワークで出された付箋を、ＫＪ法を用いて整理する方法。

②ビフォーアフター表を用いる方法

【ビフォーアフター表とは】

事前の園内研修を通じて見えてきた自分たちの園の実践の課題について見直しを行う際に実践のどこをどのように見直すのか、その方法をだれにでもわかるようにし、取組の結果どのように変化しているのか、記録をすることで見える化ができます。

取組前（before）と、実践のどこを見直すのか、その取組内容と、取組後（after）を記録する方法です。

Before 子供の姿・環境	目標 after	どんな関わりをしているか	その結果どうなったか
A <安心して過ごし、没頭して遊んでいるか>			
●●な姿が見られる。 ●●に取り組んでいる	□□の不思議さに気付く ◇◇の感触を楽しむ	××を準備する △△な対応に心掛ける	●●な様子が見られる
B <片付けの仕方>			
●●な姿が見られる。 ●●に取り組んでいる	□□の心地よさを知る ◇◇設定に配慮する		

(3) STEP3の「問い」作りに向けて

①「問い」とは？

このハンドブックの中でも、すでに何度も使われている「問い」という用語について整理しておきましょう。

「問い」は、公開保育当日に、参加者からのフィードバック（質問・意見・感想等）をもらうための仕掛けで、保育室やコーナーなど、園内の何カ所かに掲示しておきます。実践を見た参加者は、その問いに対する質問・意見・感想等を付箋に書き込んで、スペースに貼り出します。問いが媒介となって、ECEQ実施園と参加者の間にコミュニケーションが生まれます。せっかく公開保育をするのですから、参加者からは、教育・保育の質の向上に寄与するフィードバックをたくさんもらいたいものです。そのためには、「実践のどこを見てほしいのか？」「何を聞きたいのか？」「どのようなことを教えてほしいのか？」、ECEQ実施園から参加者に具体的な投げかけが必要です。つまり「問い」を設定するということは、「このような視点で実践を見てください！」「このようなテーマについての意見をください！」というメッセージを伝えて、参加者に「窓」を与えることになります。参加者は、主にこの「窓」を通して実践を見てくれるので、ECEQ実施園が抱える課題に多くの目がフォーカスされます。質の向上につながるフィードバックを得るためには、参加者に適切な「窓」を与えることが欠かせません。だからこそ、「問い」作りは重要なのです。

なお、「問い」は、基本的に次のように構成されます。

「問い」の基本的構成

- I この時期の「子供の様子」「育ちの姿」
- II 幼稚園教育要領等を踏まえ、自園の教育理念や教育課程を通じて、子供の今の姿をどのように援助していくのがよいか、保育者の願いや考えていること
- III 保育者の願いを具体的にするための「環境の構成・援助・工夫・手立て」
- IV 「参加者に聞きたいこと・教えてほしいこと」

この「問い」を作成する主体はあくまでもECEQ実施園ですが、その過程において、ECEQコーディネーターが適切に支援していくことが求められます。具体的な課題である「足場」の確認や、別の視点を提示する「糸口」探し、話を砕いていく「具体化」の作業を保育者と一緒に進めていくことにより、「問い」をブラッシュアップしていくお手伝いをしましょう。（詳細は、STEP3で触れます。）

「問い」は、ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）にとって、要となるものです。STEP1からSTEP2のプロセスを通して、ECEQコーディネーターとして、具体的な「問い」のイメージをある程度つかみながら進めていくと、STEP3にスムーズに接続できます。

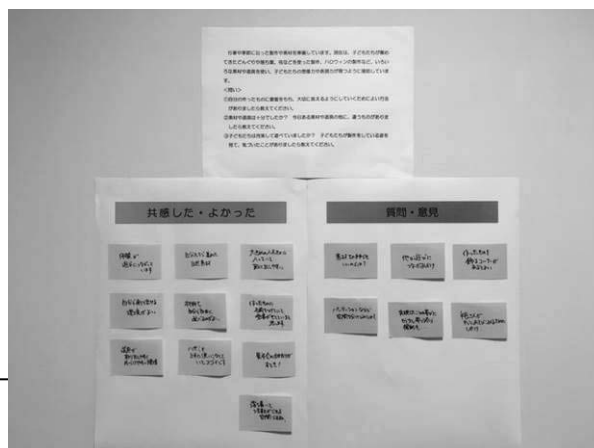
※参考

「問い」の一例（製作コーナーに掲示するもの）

行事や季節に沿った製作や素材を準備しています。現在は、子供たちが集めてきたどんぐりや落ち葉、枝などを使った製作、ハロウィンの製作など、いろいろな素材や道具を使い、子供たちの想像力や表現力などが育つように援助しています。なかには、作ったものを持ち帰らず置きっぱなしにしている子供がいるので、作ったものに名前を付けたり、飾ったりして大切に扱えるようにしていますが…

- ①自分の作ったものに愛着をもち、大切に扱えるようにしていくためのよい方法がありましたら教えてください。
- ②素材や道具は十分でしたか？ 今日ある素材や道具の他に、違うものがありましたら教えてください。
- ③子供たちは充実して遊んでいましたか？ 子供たちが製作をしている姿を見て気付いたことがありましたら教えてください。

○「問い」に対して貼られる付箋



○実際に貼られた付箋のコメント

「共感した・よかった」

・様々な素材や道具が種類ごとに分けられていて、大きめの入れ物に収納されていることで、子供たちが取り出しやすく片付けやすい環境だと感じました。

・「公園で拾ってきたんだよ」と、子供が教えてくれました。体験が遊びに繋がっていますね。

「質問・意見」

・作り方を図示したり、伝え過ぎてしまい、みんな同じような出来になっていませんか？

・この活動で体験したことを他の遊びに繋げる仕掛けもあると、より主体的に夢中になれるのでは？

・実現したことの喜びに、もう少し寄り添う援助があるといいのでは？

②「問い」作りにおいて大切にしたい視点

今回は、園の課題を参加者と共有するための「問い」作りへ向けての園内研修が行われます。「問い」作りにおいて大切にしたい下記の視点を伝えましょう。

I この時期の「子供の様子」や「育ちの姿」

園としての願いや思いが先行してしまわないように、あくまでも今、この時期の子供の様子や育ちの姿から、教育・保育を考える視点を大切にしましょう。

★子供の様子や育ちの姿

「今、子供たちはこんなことに興味を持っています。」

「子供たちはこんな様子です。」

II 幼稚園教育要領等を踏まえ、自園の教育理念や教育課程を通じて、子供の今の姿をどのように援助していくのがよいか、保育者の願いや考えていること。

この時期の子供の様子から、保育者が意識していることや保育者の願いがどこにあるのか？参加者に伝えることで、ECEQ 実施園が大切にしていることが明らかになります。

★私たちが目指していること・ねらい・課題

「今、私たちはここを大事にしています。意識しています。」

「こんなことを話し合っています。」

III 「保育者の願い」を具体的にするために環境の構成や援助等でしたこと、していることの工夫や手立て

ECEQ 実施園や保育者の願いや、意識していることが、どのように実践されてきたのか、環境構成や援助等でしてきたことや、現在取り組んでいる様子が記録物等を通して見える化できていると、参加者に伝わりやすく、意見をもらいやすいことを伝えましょう。

★課題を解決するための実践と子供たちの姿

「だから、こうしています。こんな実践をしています。」

「子供たちはこんなふうに育っています。」

IV それでよいのか、さらにより方法があるのか、設定した視点でよいのか等、参加者に聞きたいこと、教えてほしいこと、伝えたい悩み等。

★具体的なアドバイスを得るために

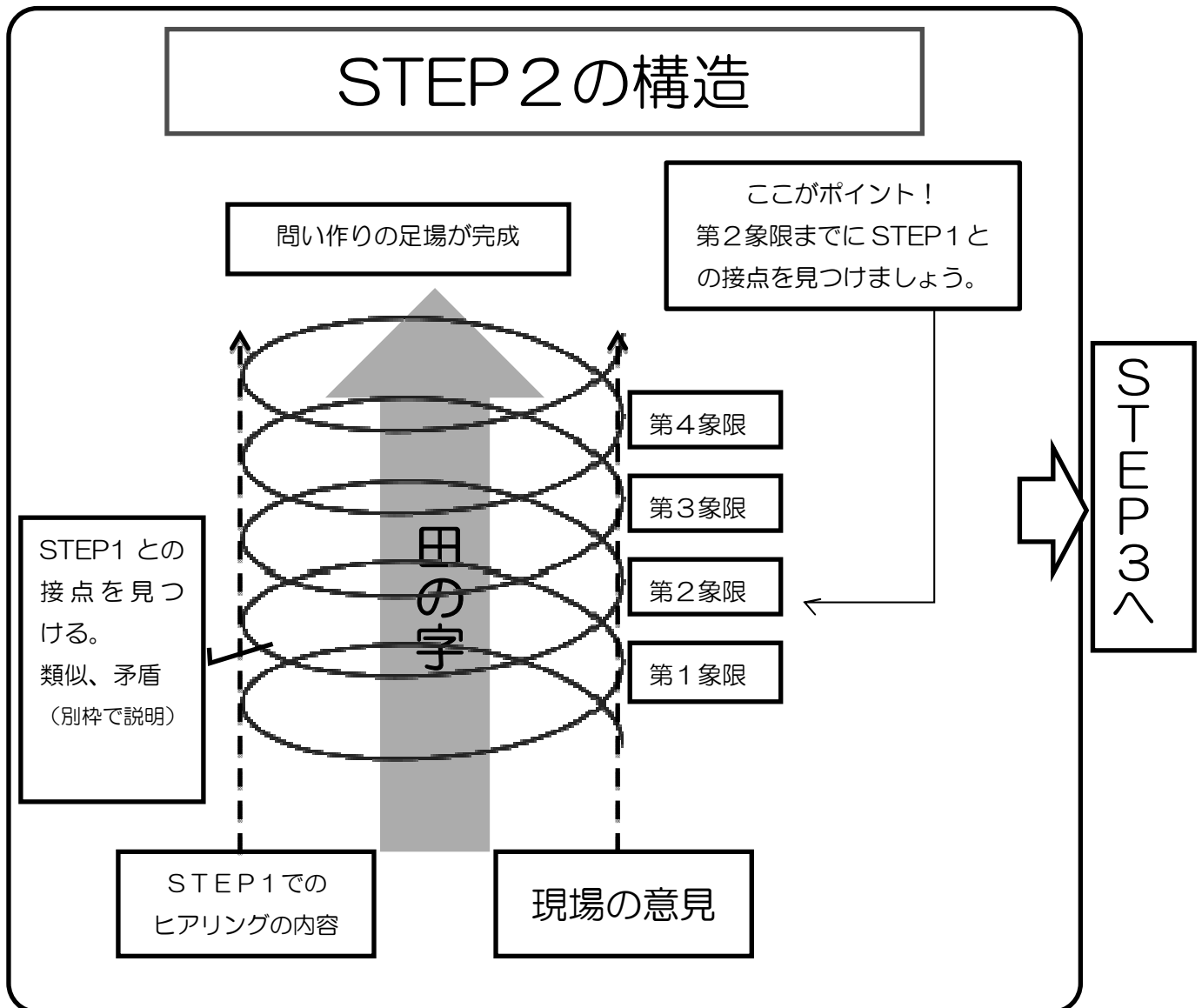
「ねらいとしていることは、実践できているでしょうか。」

「他にはどうしたらよいでしょうか。」

「より良くするためには、さらにどうしたらよいでしょうか。」

【補足資料3】STEP 2からSTEP 3への流れ＜解説図＞

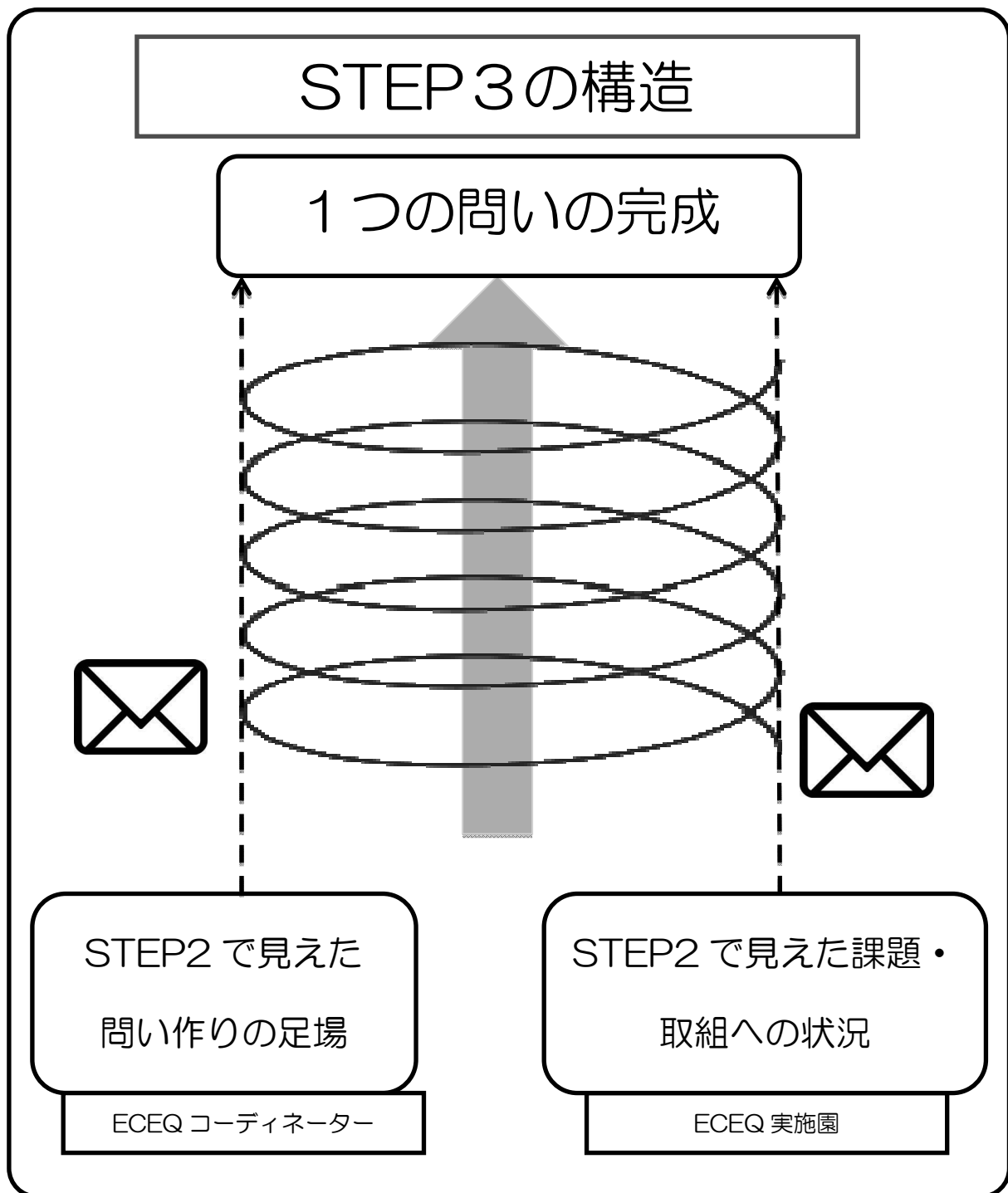
実践の営みが今の子供の姿、保育者の援助、環境構成等の全てが関連しているように、『ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）』における各STEPでの取組も、それぞれが独立しているのではなく、全てが関連しています。STEP 2の構造は、事前に行った STEP 1 でのヒアリング内容との接点を見出す中から構築されていき、STEP 2での足場が、STEP 3での「問い」へとつながっていきますので、それぞれを丁寧にいきましょう。



ここがポイント

★STEP 1 との接点が見えた時に、「どんなこととしていますか」等、合いの手を入れてみると、問い立てのヒントが見つかるかもしれません。





☞ここがポイント

★問いの数だけ、上の構図のプロセスがあります。とても大切なところなので、STEP2 の問い作りの足場を基に、ECEQ 実施園の意見を尊重しながら問い作りをしていきましょう。この時に、公開保育当日に「この問いを使うとどのような協議が行われるか」もイメージできるとよいですね。

STEP 3 公開保育に向けての準備

STEP 3では、公開保育当日に見てほしいポイント等を整理し、「問い」作りをします。また、来園者を迎える準備等を行います。

(1)「問い」作りにおけるECEQコーディネーターの役割

STEP 2でできた、「問い」作りの足場を基に、実践の何を見てほしいのか、どこに対して意見をもらいたいのか、見てほしいポイントを整理し、意見をもらうための仕掛けである「問い」を考えていきます。

「問い」を立てるのはあくまでもECEQ実施園ですが、ECEQコーディネーターの役割として、ECEQ実施園が参加者に聞きたい内容であるのか、参加者が応えやすい「問い」であるのか等を共に考えていきながら支援していきます。

(2)「問い」作りにおいて気を付けたいこと

- ①丁寧に記述すると長文になり、参加者に読んでもらいにくかったり、読むことに時間がかかってしまったりします。できるだけ短く、読みやすくするとよいでしょう。要点を押さえて読みやすく書くことが大切です。
- ②大まかな「問い」であれば、大まかな答えしか返ってきません。聞きたい内容の答えが出るような、参加者が答えやすい具体的な「問い」がよいでしょう。
- ③各学年で共通の内容については、資料にまとめて記入する等、資料の作り方も工夫しましょう。
- ④公開保育の参加者から適切な意見を得るために、資料等の配付物や掲示物があったほうがわかりやすいでしょう。
- ⑤どの時期に公開保育をするかによって、子供の成長の姿や実態が変化します。過去に実施した他園の「問い」を参照する場合には、公開時期に気を付けてください。
- ⑥「〇〇の取組はどうですか。」というような「問い」であると、よいか、悪いかのどちらかの意見しかもらうことができないので、具体的に意見をもらえるような「問い」にすることが大切です。

(3) 「問い」の例

STEP 2までで明らかになった園の課題や日頃から感じている問題を、参加者が答えやすい「問い」にします。

例文のように「子供の今の姿」→「保育者のねらいや願い」→「そのための手立て」→「課題意識（問い言葉）」の基本構造を押さえて、参加者の気持ちになって端的で明快な文章を作りましょう。

例1) 【課題】話しを聴く態度を身に付けてほしい・・・

年長組

明るくおしゃべりが好きで、自分の意見を積極的に言える子が多いにぎやかな学年です。「こうしたい!」「こう思う」と主張することも良いのですが、落ち着いてお互いの意見や話を最後まで聞く態度が身に付いてほしいと思っています。そのために、子供たちと話し合って約束を決めたり、話し方を工夫したりしています。

問い

- (1) 学級活動中、落ち着かず話が聞けない時、どのような対応をされていますか。
- (2) 話を聞く態度を身に付けるためには、どのような工夫や保育者の関わり方が必要だと感じられましたか？

例2) 【課題】トラブルを子供自身で解決するには・・・

年長児

学級を越えて、鬼ごっこやリレー、お店屋さんごっこなどをして遊ぶ姿が見られます。しかし、相手の話を聞くより「自分は…!」という自己主張の方が強くなってしまうため、言い合いばかりが続いてしまうことがあります。トラブルを子供たち自身で解決できる力を身に付けてほしいと思い、きちんと話し合いをしたり、他の人の意見を聞くことも大切であることを言葉だけでなくペープサートなどを使ってわかりやすいように伝えたりしています。

問い

- (1) 子供たちが遊び込めるための学級の環境設定、材料の提供は適切でしたか。
- (2) 学級活動中の保育者の子供への声掛けはいかがでしたか。

例3) 【課題】 保育者の振舞いや声掛けは・・・

年少児

友達と遊ぶことが増え、関わりが持てるようになってきましたが、その中で玩具を取り合ったり、順番を待てずトラブルになることもあります。「貸して」「まだ遊びたいのに」と言うことがあるので、保育者は互いの気持ちを伝え、そのことについて、子供たちと話し合ったり、ルールを決めて使うようにしたりしています。

問い

- (1)遊びや学級での活動中の保育者の立ち位置は、いかがでしたか。
- (2)相手の気持ちがわかっていても、なかなか玩具を譲ることができない場合、どのように声を掛けていけばいいですか。

例4) 【課題】 気持ちをうまく伝えられるようになるには・・・

年中児

友達同士で声を掛け合って遊ぶ姿が見られるようになってきました。その一方で集団になかなか入れない子供や、遊びたくてもうまく自分の気持ちを伝えることができずにちょっかいを出してしまう子供もいます。

言葉で思いを伝えられるよう、「ぼくも入れて」「一緒に遊ぼう」など、具体例を示すようにしています。

問い

- (1)集団の中になかなか入れない子供や、ちょっかいを出してしまう子供に対してどのような声掛けをしていますか。
- (2)友達の遊びに興味を持てるような環境、関わりで工夫できる点があれば教えてください。



(4) 参加者に公開保育の意図や「問い」を周知する準備

教育・保育の質向上につながる ECEQ 公開保育は、まだこの方法に慣れている保育者が少ないため、公開保育実施に向けて、園内の意識共有はもちろん、公開保育の案内文章、公開保育当日に参加者が集まった時点等の機会を得て、この公開保育は何をするものなのかという意味を説明して意識の共有を図ります。

また、どこに「問い」が掲示されているのか、どのような「問い」があるのか、資料があると参加者にわかりやすいため、配布物の一つとして「問い」掲示場所とその内容が記されているものを用意することを ECEQ 実施園に伝えましょう。

(5) 公開保育の計画を立てる

公開保育当日の流れについて計画を立てます。

【時程例】

9:00 受付

9:30~10:00 オリエンテーション

※教育・保育の質向上につながる ECEQ 公開保育は、まだ慣れている人が少ないため、この公開保育は何をするためのものか、参加者も共に学び合うことができるように、「問い」の意味や、参加者の意見や感想を付箋に書くこと、その付箋の活用の仕方等を含め説明を行い、意識の共有を図ります。

※園長挨拶、一日のスケジュールについて・昼食の案内、撮影の可否、ECEQ コーディネーターの自己紹介等もこの時間内に行います。

※この時間に、午後の分科会はその学年（またはどの学級）に参加し協議をしたいのか、参加者の意向を確認しておきます。場合によっては、参加する分科会を ECEQ 実施園の方で指定することもあります。

10:00~12:00 公開保育

12:00~13:00 昼食

※昼食後、この時間内に分科会を担当する ECEQ コーディネーターと ECEQ 実施園の保育者は、貼り出された付箋の内容を見ながら、分科会の持ち方について打合せを行います。

13:00~14:30 分科会

※参加者から ECEQ 実施園に対しフィードバックを行います。「問い」に対する付箋を基に話し合いを行います。

14:30~14:45 移動・休憩

14:45~15:30 全体会

※分科会で話し合った事を全体で共有します。各分科会での協議内容を ECEQ 実施園の保育者が発表します。

15:30 解散

★オリエンテーションの進行は、ECEQ 実施園でも ECEQ コーディネーターのどちらでもかまいません。事前に相談して決めておきます。

★分科会の人数

一つの分科会の人数はあまり多くない方が話し合いも進みます。ECEQ 実施園の規模にもよりますので、学年毎である場合等、参加者数等が決まった段階で ECEQ 実施園と相談します。

★分科会のファシリテーター

分科会の数だけファシリテーターが必要になります。ECEQ コーディネーターだけでは足りない場合には、事前に ECEQ 実施園と相談し、各県の研究研修委員等に依頼が必要です。また分科会の進め方についても、その内容について事前に打合せが必要です。

(6) 公開保育の準備についてECEQ実施園との打合せ

ECEQ 実施園が準備するものについての確認

項 目	準備する物	チェック欄
参加者数の把握	一般参加者（地域内の園の保育者） ECEQ実施園関係者（学校関係者評価委員、地域の方、行政関係者等）、 ECEQ コーディネーター	
配布物	○実践のテーマ、日案、週案などの取組がわかる資料 ○会場案内図（荷物置場、各学年、トイレ、昼食会場、全体会、分科会の会場が示されている園内マップ） ○名札 ○フィードバック用付箋 ○水性ペン	
受付	○受付用名簿 ○受付用長テーブル ○昼食代領収書 ○スリッパ（参加者に持参してもらう場合も有）	
掲示物	○会場案内のための表示 （全体会会場・分科会会場・昼食場所・トイレ・立入禁止場所等）	
昼食	○数の把握と注文 ○昼食場所（休憩の際のお茶等）	
会場	○控室（参加者により、必要に応じて） ○受付場所 ○荷物置場 ○オリエンテーション・分科会・全体会等の会場設定 ※参加人数にもよりますが、分科会の会場は学年毎になるので、学年分の部屋を用意するとよいでしょう。事前に ECEQ 実施園と相談します。 ○下足置場	
問いの 掲示場所	○作成した「問い」を掲示する場所の設定 ○これまでの取組等、実践に関する掲示物	
分科会で 使用する物	※分科会でのグループは5～6人が1ユニット ○模造紙（グループ数分） ○付箋 （参加者一人につき二色の付箋各3～5枚×学級数×人数分） ○水性ペン（参加者分 ※ペンを参加者に持参してもらう場合は事前の案内に書き加えるとよいでしょう） ○ホワイトボード	

STEP4 公開保育当日

いよいよ公開保育当日です。緊張の一日ですが、ECEQ 実施園の保育者ができるだけ普段通りの実践ができるよう、ECEQ コーディネーターがサポートしていきましょう。保育者がいつもと違う言葉や態度でいると子供たちにも影響し、結果的によい公開保育になりません。ECEQ コーディネーターは、参加者の視点に立って、気付いたことがあればECEQ 実施園にその都度伝えていくことも必要です。

(1) 会場準備 公開保育当日の朝に園長と一緒に確認をしましょう。

① 受付

②オリエンテーション・全体会会場（講堂やホール等）

マイクや、ホワイトボードの準備

③分科会会場（保育室）

公開保育が終わった後に、適当な保育室を用意します。会場の模様替えは公開後にします。「分科会会場」等の案内も用意しておくといよいでしょう。

※昼食場所はホールや保育室を開放して使います。

④参加者の荷物置場（全体会会場を用いることもあります。）

⑤保育室・園庭に「問い」ボードの貼り出しが正しくできているか確認しましょう。

(2) オリエンテーション

公開保育についての留意点や ECEQ 実施園の紹介を当日資料に沿って園長等が説明します。撮影の可否、一日のスケジュール、昼食の案内、施設の案内等、あまり長すぎる事のないように進めます。ECEQ コーディネーターの自己紹介も、ここで行うといよいでしょう。



(3) 実践見学

参加者は各自申し込みの分科会学年を中心に見学します。

ECEQ コーディネーターも一参加者となって見学します。

☞ここがポイント

園にとってプラスになるような分科会の話題が考えられる場合は、付箋で参加するということを考えてみてよいかもしれません。

（４）午後の分科会に向けて

ECEQ コーディネーターも参加者と一緒に昼食をとりますが、この時間を用いてファシリテーターは、午後からの分科会で取り上げたいテーマ等を「問い」ボードに貼られた付箋を読みながら整理していきます。

ECEQ実施園の保育者が参加者に聞いてみたい事柄が書かれている付箋があれば、優先順位を付けてピックアップしておきましょう。

📌ここがポイント

ECEQ実施園の保育者が、午後からの分科会に向けて期待を持って臨むことができるように、もらった付箋で一番うれしかった付箋を事前に選んでもらい、分科会の始めにその付箋を基に自己紹介等してもらうとよいでしょう。

（５）分科会

公開保育終了後の流れによって、分科会及び全体会の持ち方を考えましょう。公開保育をア）午前保育で行っているイ）１日保育で行っているウ）保育者がバスに添乗している等の条件で変わってきます。



★分科会の持ち方のポイント

- ・ ECEQ実施園の物理的環境（部屋数等）
- ・ テーマの違い
- ・ １グループの人数
- ・ 参加者の人数
- ・ 参加者の属性
- ・ ファシリテーターの人数
- ・ 「問い」の内容（園庭の使い方や、複数学年に渡る場合）
- ・ 分科会の中身の予想（公開園の保育者の状況）
- ・ ECEQ実施園の耐性（どれくらいのモチベーションでいるのか）

★分科会の持ち方例

分科会は、参加者からの貴重な「フィードバック」の場であり、公開保育の最も重要な時間です。参加者からスムーズにフィードバックを得るためには「対話の仕組」が必要です。ファシリテーターが和やかであると共に、活発に話し合いができるような場作りをしましょう。

各分科会にファシリテーターが必要ですので、ECEQ コーディネーターだけでは足りない場合は事前にどなたかにお願いしておきます。

○分科会参加者

- ・ ファシリテーター（複数いる場合、進行役と記録係等）

- ・ ECEQ実施園の保育者
- ・ 公開保育参加者

○用意するもの

- ・ フィードバック用付箋
- ・ ホワイトボード
- ・ 水性ペン
- ・ 模造紙
- ・ A4白紙

○対話体形

ECEQ 実施園の保育者、ファシリテーター、参加者が車座になります。

○対話の進め方

ここでも一例を紹介します。

①ファシリテーターによる自己紹介

所属、名前、現在の自分の気持ち、ECEQ 実施園等への謝辞等

②ファシリテーターによる分科会の進め方の説明

下記内容を説明し、参加者で互いに共有します。

- ・ 分科会は、粗探しをする場ではない。
- ・ ECEQ 実施園の成長を願って感想を述べ合う。
- ・ ECEQ 実施園の聞きたいテーマを取り上げる。
- ・ 限られた時間を有効に使いたいこと



③ECEQ 実施園の保育者による自己紹介

- ・ 学級、経験年数、名前等

⇒保育者や参加者等の自己紹介の時に、話しやすい雰囲気にするためにアイスブレイク等を兼ねても良いでしょう。

(例) 自己紹介の時に付箋に書いてもらった中で一番嬉しかった 1 枚を選んで語ってもらう等。

④参加者による自己紹介を兼ねた感想を述べ合う。

- ・ 園名、担当、経験年数、名前等
- ・ 気付いた点、共感した点、興味を持った点、なるほどと思った点等を話してもらいましょう(時間に余裕があればフィードバック用紙に書いてもらう時間を数分とり、その後に話合いを始めると、場の緊張を解くことに繋がります。)

この時、ファシリテーターは話合いの内容を模造紙に書き留めていくようにします。参加者から見えるように書いておくことで、意見が出にくい時の足場となります。

⑤ECEQ 実施園保育者による話題提供

ECEQ実施園の保育者から下記の点について話題提供をしてもらおうとよいでしょう。

- ・ 本日の実践のねらい
- ・ 分科会で参加者から聞きたいこと（問い掛け）

⑥参加者からのフィードバック

全員からフィードバック内容について話してもらいましょう。

ECEQ 実施園の保育者は、発表に対してコメントがあればその都度話します。その場合、参加者に更に聞きたいことがあれば続けて話してもらってもよいでしょう。ファシリテーターはコメントを聞きながら、ECEQ 実施園にプラスになるような介入をします。

☞ポイント 【全員から意見をもらいやすくするための方法例】

- ・ 各自付箋に書く（5分）→発表する（1分）
- ・ 隣の人と二人組で話す（7分）→発表する（1分）

☞ポイント 【ファシリテーターの介入例】

（技能「砕く」）

- ・ 「もう少し詳しく話してください。」
- ・ 「具体的に言うとどのようなことですか。」

（技能「ずらす」）

- ・ 相手の発言の意図を例として提示する。

（意見が出にくくなっている時にきっかけとして使う）

「〇〇という事ではないのですよね。」（「〇〇という事でいいですか。」という言い方はきっかけとしてあり得るが、意見が出にくい時には「はい」「いいえ」で終わってしまう恐れがあるため、上記の言い回しがある。）

尚、スキルアップのためには12ページの俯瞰図を見て、どの技能をどのような場面で使ったかを振り返ると、次回のコーディネート時に意識化されていくでしょう。

⑦ファシリテーターがクロージング

ECEQ 実施園への謝辞も述べ、分科会を閉じます。

(6) 全体会 ※全体会の持ち方にも定型はありません。ここでは一例を紹介します。

分科会で話し合った事を全体で分かち合う時間を取ります。

各分科会で話された内容を ECEQ 実施園の保育者が発表し、どのようなことに気付いたり学んだりしたのかを参加者全員で共有します。

○参加者

- ・ ECEQ 実施園の保育者
- ・ 参加者
- ・ ECEQ コーディネーター

○対話体系

ECEQ 実施園の保育者、参加者、ECEQ コーディネーターが車座になります。

○進め方

司会は ECEQ コーディネーターが務めるとよいでしょう。

(例)

①開会

ECEQ 実施園への謝辞に始まり、全体会の進め方について説明をします。一つの分科会が長く話してしまうことがないように、時間配分等についても説明しておくといよいでしょう。

②ECEQ 実施園の保育者から発表

分科会で話されたことを、各分科会の代表の保育者から発表してもらいます。

③発表を受けて質疑応答

④閉会

ECEQ 実施園を代表して園長または理事長が挨拶します。その後、ECEQ 実施園への謝辞を述べ、閉会とします。



STEP5 振り返りのワークショップ ～課題に応じた園内研修～

STEP5では、公開保育において参加者からの意見を受けた後、ECEQ 実施園の全保育者で『振り返り』を行う場です。まずは、公開保育当日の分科会でまとめた情報を園全体で共有することからワークショップはスタートします。

(1) ワークに入る前に

それぞれの園が自分たちの力で良さを伸ばし課題を解決していくために、STEP2で実施した田の字ワークで明らかになった園の良さや課題について、もう一度振り返っておきます。

①園の良さ、大切に伸ばしていく点

- ・園がこれからも大切にしたい価値はなんでしょうか。
- ・どのような実践や行動が園の未来につながるでしょうか。
また反対に、どのような実践や行動が園の未来を妨げるでしょうか。
- ・私たちの園の実践で、絶対に譲れないものは何でしょうか。
これが無くなったらこの園でなくなるこだわりは何でしょうか。
- ・子供たちや保護者に感謝される素晴らしい行動は何でしょうか。
失望される残念な行動は何でしょうか。

②園の課題

- ・私たちが目指す実践を実現する上での障害は何でしょうか。
何を克服しなければいけないでしょうか。
- ・私たちの理想とする実践や園は、どのようにして作り上げることができるのでしょうか。
- ・自分たちの何を変えないといけないでしょうか。
何が最も重要な変化となるでしょうか。
- ・私たちが抱える課題のうち自分たちの力で変えられることは何でしょうか。

ポイント

ECEQ コーディネーターは、事前に公開保育実施以降の園の様子を把握しておくといでしょう。

【用意するもの】

- ・公開保育当日の分科会でまとめた付箋を貼った模造紙
- ・分科会で意見交換している中で、参加者の意見をまとめたもの
- ・STEP2で行った田の字ワークの模造紙と、その結果をまとめたもの
- ・模造紙 ・付箋 ・カラー水性ペン
- ・お菓子⇒ワークを円滑にするためのアメやチョコレート

(2) 進行について ※所要時間の目安…1時間30分から最大2時間

①分科会の情報共有

公開保育当日の午後の分科会は、学年毎やテーマ毎で、いくつかのグループに分かれて実施される場合が多いでしょう。公開保育当日には、全体をまとめきることができないために、STEP5ではまず公開保育当日の分科会の内容を園の全保育者のこととして皆で共有する時間とします。しかし、ただ漠然と情報共有をしても効果が半減しますから、大きく次の2つの柱立てを意識しましょう。

ア 「自園の良さ」について

イ 「自園の課題や改善していきたいこと」について

ア「自園の良さ」について

公開保育当日、参加者に認められた「自園の良さ」について、全保育者の前で分科会毎に発表をします。さらに、ECEQ コーディネーターに余裕があれば、事前ワークで実施した田の字のワークショップで、左上にあたる第一象限にまとめた園の保育者が自園の良さとしてまとめたものと、参加者の付箋で良さとして認められたことと比較して、同一点や差異点について、ECEQ コーディネーターが進行しながらまとめていくことも可能です。

☞ポイントー限られた時間の中での研修なので…

ECEQ 公開保育とSTEP5の期間が十分に取ることができる場合や、園内での取りまとめができそうな園の場合には、園内の主任等を中心にして、事前に分科会毎の付箋を一つにまとめて項目毎に並べ替えることを済ませておきます。さらには、保育者が把握している自園の良さとの比較、同一点や差異点についてまとめておけば、この良さを発表するワークは、主任等保育者のリーダー役が一括して発表するため、ワークショップの時間を短縮することが可能となります。この依頼は、ECEQ 公開保育当日の終了時に、園長や保育者のリーダー役に、STEP5の見通しを相談する時にしてください。ただしくれぐれも、園の保育者が負担感を感じそうな場合や、付箋等の情報を上手にまとめるのが難しそうな雰囲気の場合には、依頼そのものがリーダー役の保育者への大きなストレスになりますから、よく状況をみて、依頼はせずにSTEP5当日のワークとして実施するか判断してください。

イ 「自園の課題や改善していきたいこと」について

ECEQ 公開保育を通して得られた情報を基にして「課題や改善していきたいこと」に取り組むための方法等について、保育者間で理解、共有し、ECEQ コーディネーターと共に具体的に取り組むイメージを明確化するワークショップです。

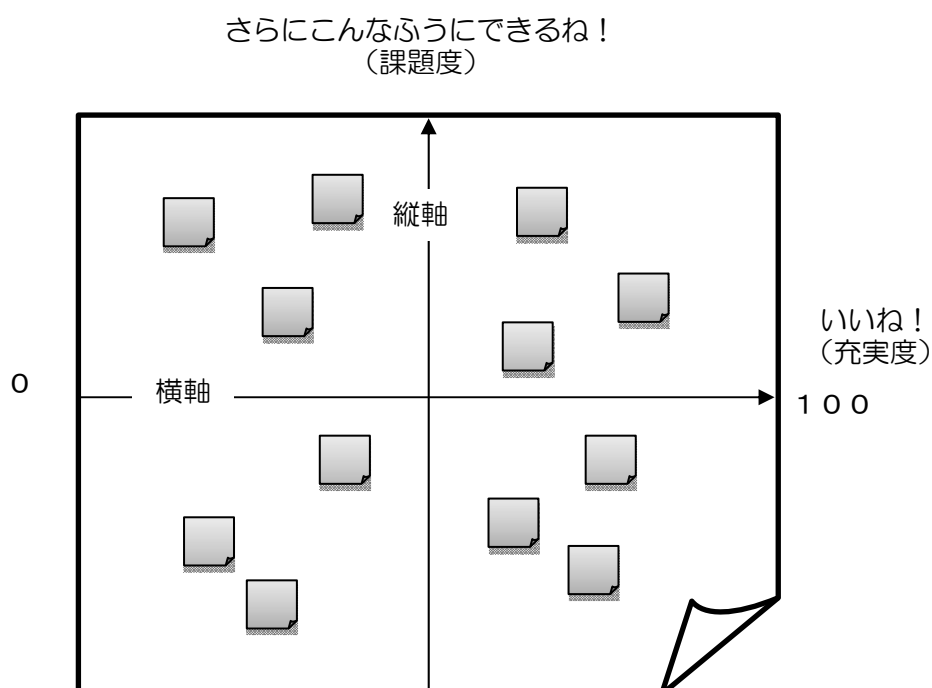
ですから、このワークショップでは単なる情報共有ではなく、この後に何をどう取り組めばよいかまでをイメージできるようにしていきます。基本的には分科会において付箋を項目毎にまとめた模造紙をそのまま利用して、分科会グループ毎にワークを進めていきましょう。

以下に二つのワークショップの進行を例示します。

例1 課題と充実度での整理

項目別での分類から、新たな視点として「さらにこんなふうに見えるね！（課題度）」や「いいね！（充実度）」という縦軸横軸で付箋を再整理して、実践の課題を振り返ります。図1を参考に、新しい模造紙を用意し「田の字」と同じように十字に折ります。縦軸が「さらにこんなふうに見えるね！（課題度）」として、横軸は「いいね！（充実度）」として、一番左を0と考え、一番右を100とします。

【図1】



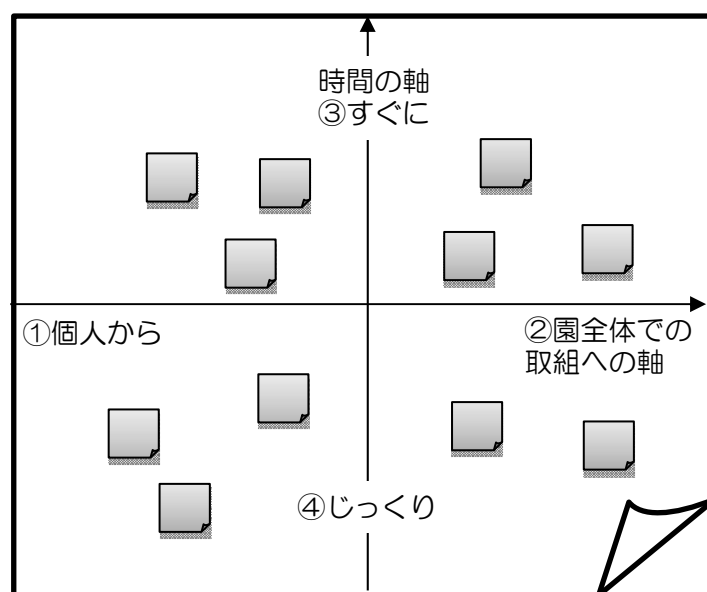
この軸に付箋を並べ替えると、左上の第一象限は、さらにやることがありそうだという課題が中心に記された付箋が貼られます。左下の第二象限は、ECEQ 実施園があまり課題として把握できない、よくも悪くも評価できない付箋が貼られます。あるいは質問項目等が貼られます。右下の第三象限は、「いいね！」が高く、このままでよくできているという付箋が貼られます。右上の第四象限は、「いいね！さらにね！」という部分で、現状でもよいけれど、さらにこのような工夫ができるのではないかとという付箋が貼られます。課題については、同時に全てのことを一斉に取り組むことはできません。ECEQ 公開保育の参加者からの貴重な意見（付箋）を項目だけで整理するのではなく、充実度と課題度で整理することで、次に何をすることが大切か、園内の保育者が、優先順位を決めて取り組むための情報として受け取ることを中心にした場合のワークショップです。

例2 自分とチームの区分けや時間の掛け方での整理

項目別での分類から、新たな視点として「時間（すぐに取り組むのか、時間を掛けて取り組むのか）」の軸と「主体（個人の取組か、全体での取組か）」という軸で、付箋を再整理して実践の課題を振り返ります。

図2を参考に新しい模造紙を用意し、田の字法と同じように十字に折ります。縦軸が「時間の軸」です。中央から上側に上がるほど、すぐに取り組むことができる事柄です。下に下がるほど、時間を掛けて取り組む事柄とします。横軸は、「個人の取組か、全体での取組か」を表す軸です。左端になるにしたがって個人で取り組む事柄、右端になるに従って、園全体で取り組む事柄となります。

【図2】



- ①自分が取り組みばよい事柄
- ②全体で取り組まなくてはいけない事柄
- ③すぐにできる事柄
- ④じっくりと取り組む事柄

という事象で付箋を整理することで、課題が具体的に再整理されて次へのアクションプランが作りやすくなります。

(3) まとめとして

これまでの取組を通じ、共に歩んできた ECEQ 実施園の支援者として、ECEQ 実施園の保育者へ最後に下記のことを伝え、教育・保育の質向上のための更なる取組への意欲が高まるようにしたいものです。

- ・「この ECEQ 公開保育を通じて、保育者の何が変化したか？」ECEQ コーディネーターとして気付いたこと。
- ・この ECEQ 公開保育を通じて、実践内容を誰かのものとして捉えるのではなく、自分が皆と一緒に作るという意識を持つことが大切であること。
- ・それぞれの協力の土台となっているのは、同僚性であること。
- ・自分や自分達が取り組んでいるからこそ、課題が生まれ、課題があるからこそ、次に解決する手立てを考えることができ、その結果が次の課題につながる。これが正にPDCAのサイクルであり、教育・保育の質向上のために必要なことであること。
- ・結果を慌てることなく、今、目の前にある課題にこつこつ取り組むことが大切であること。
- ・多くの参加者からの良さを伝えることで、皆も元気が出たことと思う。日々の実践に一生懸命に取り組んでいることに自信をもってほしいこと。

(4) STEP1 からここまでを終えて

①ECEQ コーディネーターの心持ち

ECEQ コーディネーターは、ECEQ 実施園が自らの力で園の教育・保育の質を高めていくことや、会議や研修の場で全ての保育者の意見が尊重され、話合いに主体的に参加するような園の風土や、子供の姿から教育内容を考える園の風土の醸成を支援することから始めることが大切です。

そのためには「課題→正解」というようにすぐに答を求められることで逆に思いや意見が言い辛くならないように、正解ではなくアイディアを出し合えるように、「こうあるべき」ではなく、「感じたこと」を素直に語り合える雰囲気を作ることが大切です。

話合いの中で「子供にどうかかわるか？」という答を現場の保育者は求めがちにな

りますが、STEP 3の問いと同様に、話合いの基本的な構造は子供の姿から話し合うことです。決して保育者の願いが優先され、その願いを実現するためにどうかかわるかという話合いにならないように心掛ける必要があります。

②良さや課題等を整理するために

話合いの中で良さや課題等が浮かび上がってきますが、整理したり、話合いの中で考える視点を持ち、意見を言いやすくするために軸を持つことも大切です。上記図1・図2の具体的な進行において「課題度（さらにね）、充実度（いいね）、時間の軸、主体（誰が）の軸」が例として書かれていましたが、その他にも重要性の軸や、下図のような子供理解に始まる実践の普遍的な循環の中で、園としての課題を整理していく方法もあります。



例えば、ECEQ 公開保育を通して園の課題が一斉保育中心で、子供が主体的に活動できるような場や時間が不十分というような場合は、環境の構成が課題となることが多いでしょう。また、教育課程・指導計画がどうも今の子供の姿に即していないようであれば、教育課程や指導計画を見直すために子供理解がその園の課題となるでしょう。

また、整理後に具体的に更に良くしていく時に、保育者の関わり方を中心にあるいは保育者の関わり方のみで課題を解決していこうとする園もあります。もちろん保育者の関わりが重要であることは当然なのですが、例えば下図のような「更に良くしていくために」のような視点で課題解決を図る方法の視点を提供することの一つの方法としてあります。ただし、あくまでも視点の提供であって強制的に取り組むものではなく、その園、保育者の主体性を尊重していくことが大切です。

更に良くしていくために

環 境

教育・保育の場の構成、遊具、道具、材料等

集団の雰囲気

保育者と子供、あるいは子供同士の関係性

主体性の発揮

主体的に参加している。

活動や活動の場を選ぶ。

決まりや約束事が理解されている。

教育・保育の運営

子供の興味・関心に合わせた見通しによって一日の計画が立てられているか。

活動に応じた柔軟な集団編制

保育者の関わり方

臨機応変の対応—伝える、問い掛ける、褒める、認める、尊重する、モデルになる、支える、見守る・・・等や個別の関わり等

家庭との連携

園の様子を伝える、家庭の様子を知る、実践の意図を伝える・理解を図る、話し合う。

② 何を話し合うのか。共有するのか。

振り返りの話し合いの中で、話し合いの中心はもちろん子供であり、現場での実践が中心になります。直接実践に携わる保育者、特に経験年数の若い保育者にとっては直接的に子供にどう関わるか、どのような環境を構成するのかが課題となります。しかし、例えば3歳児で入園間もない5月に母の日の製作をしようとする時に、一斉保育で手の込んだものを作ってもらいたいのにうまくいかないような場合や、行事のことを中心に教育活動が進められ1年間行事の準備で忙しくしているような場合には、そもそも教育課程の中に無理があるということが考えられます。そのような時に、限られた時間の中で教育課程の改善について、若い保育者と話し合うことが難しいことが予想されます。園の課題を整理していく中で、園長や主任など園のリーダーが解決すべき課題については別に時間を設けて課題を話し合うことも必要です。

園として大切にしたいことは皆で共有することが必要ですが、園の様々な課題に関しては時にはその課題に応じて誰とその課題を共有し、解決していくのかということも大切です。

STEP6 報告書の作成

ECEQ コーディネーターはECEQ 実施園からの ECEQ 実施記録等を基に報告書を作成し、本財団へ提出します。

ECEQ コーディネーターとして、ECEQ 実施園に寄り添いながら実施したSTEP 1からSTEP 5。STEP 6では、最後に ECEQ コーディネーターが報告書を作成することにより、ECEQ 実施園が客観的に振り返ることができるよう支援します。

報告書は次のような視点を基にして、園の取組状況全体を報告書にまとめます。

報告書をまとめたら、一度 ECEQ 実施園に確認をしてもらい、報告書に捺印の後に ECEQ 実施園からの ECEQ 実施記録と共に、本財団へ郵送してください。

(1) 作成の視点

STEP 1からSTEP 5までの実際の研修内容については、ECEQ 実施園が報告書を作成しますので、あくまでも ECEQ コーディネーターの視点で作成しましょう。

①園の良さや課題に関する視点

- ・ヒアリングや事前研修時に、抽出された自覚的な園の良さや課題について
- ・ECEQ 公開保育に向けての準備や ECEQ 公開保育実施時の課題について
- ・ECEQ 公開保育後の協議会における外部の参加者から見た園の良さや課題について
- ・ECEQ 公開保育後の園内研修での振り返りにおいて整理された園の良さや課題、並びに課題解決の方策について

②課題解決に向かう園の姿勢や同僚性に関する視点

- ・園として主体的に課題解決に向けた取組をしようとする姿勢について
- ・保育者が、経験年数に関わらず主体的に園内研修や話し合いに参加し、学び合い、育ち合う組織風土の醸成について
- ・子供の姿を保育者間で共有したり、話しやすくしたりするための仕組みや仕掛けについて

③幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育活動や運営に関する視点

- ・幼児期にふさわしい生活が展開
- ・遊びを通しての総合的な指導
- ・一人一人の特性に応じた指導
- ・子供が主体的に活動できるような環境の構成
- ・教育課程の編成や改善、指導計画の立案 等

(2) 報告書の形式

①ECEQ 実施園情報

基本情報は、ECEQ コーディネーターの依頼を受ける際に、本財団より依頼書と同時に送付されますので、その資料を参考にします。

基礎情報内容	ECEQ 実施園情報						
法人名							
理事長名							
園名							
園長名							
担当者名	役職名		氏名				
住所	〒						
電話番号							
FAX 番号							
メールアドレス							
園児数	人						
学級数と人数	年長組	学級	名／年中組	学級	名／年少組	学級	名
	満3歳組	学級	名／2歳児	名／1歳児	名／0歳児	名	
教職員数	人						

派遣コーディネーター名					
研修履歴	STEP1	平成	年	月	日
	STEP2	平成	年	月	日
	STEP3	平成	年	月	日
	STEP4	平成	年	月	日
	STEP5	平成	年	月	日

②STEP 1からSTEP 5までの研修を通じて

STEP 1からSTEP 5を通じて、ECEQ 実施園が気付いた自園の良さや課題について記載します。この場合、記載者は評価者ではなく報告者であることに留意します。記載項目は下記の通りです。

【報告書の形式】

1. STEP 1・STEP 2で抽出された自覚的な良さや課題

2. ECEQ公開保育実施時の課題等

3. ECEQ公開保育後のカンファレンスにおける外部から見た良さや課題

4. 事後の園内研修において整理された良さや課題並びに課題解決の方策

5. まとめ

平成 年 月 日

ECEQ実施園園長
担当ECEQコーディネーター

印
印

③報告書の記載例

1. STEP 1やSTEP 2で抽出された自覚的な良さや課題

A幼稚園では平成25年度から、「経験やプロセスを大切にしたい教育実践をめざす」という課題を持って教育実践に取り組んできている。特に2月の造形展においては、「子供たち一人一人の発想や考える筋道を大切に、表現が生まれるまでのプロセスやそこで経験している様々なことを重視した取り組みに挑戦したことで、

- ・子供たちが様々なものと出会い、それに触れたり、感じたりする経験
- ・友だちと一緒に試したり、調べたり、発見したりする経験
- ・これまでの経験を生かしながら、友だちと一緒に様々なものやことを創り出していく経験

などを大切にするすることで、子供たちは自分たちの力で夢の実現に近づいていく喜びを感じながら、次の日の活動に向かっていくという実感を得ている。一方で、こうした教育経験の保障は、園生活全体に対し年間を通じて実践していくことが求められるという認識から、改めてA幼稚園では自らの教育実践の中での課題を探り、本年度の公開保育を実施する上で「戸外遊び」に焦点をあてることとなった。A幼稚園が戸外遊びにおいて課題に感じていることは以下の通りである。

- ・戸外遊びがマンネリ化している。
- ・もっと活用できる環境があるのではないか（場・遊具・用具・自然物など）。
- ・異年齢の子供達と一緒に遊ぶことの意味を理解し、それらを生かしたい。
- ・保育者間でディスカッションし合いながら、子供の経験や育ちを共通理解し、それを環境構成や援助に繋げていきたい。

⇒STEP 1で語られた園長・主任等の思いや願いと、STEP 2で保育者から示された付箋の内容から明らかになったことを記載します。憶測をせずに、言葉や文字から明らかになったことをまとめます。

2. 公開保育実施時の課題等

STEP 2で今年の課題とした「戸外遊び」に対し、A幼稚園では1学期からの戸外遊びについて、写真や週日案を基に学年ごとに見直しを行った。その結果、以下のように課題を明確化し、その改善の方向性の軸を立てている。

①園庭のどこで、どのような遊具や用具を使い、どのような遊びをしていたかについては十分な話し合いがなされているが、その遊びの中で、子供がどのような経験をし、どのような育ちがあったかという視点が足りない。

→子供たちが戸外遊びの中で経験していることを捉える（幼児理解）。

②子供の思いに応えたり、新たな発見を促したりするような環境構成が足りない。

→戸外の環境が持つ特徴や可能性を探る（教材研究）

→子供の願いや次に必要な経験を考えて環境構成をする（環境の工夫）。
③戸外遊びは異年齢の子供が一緒に遊ぶことから、各保育者が自分の思いで新しい環境を出していくことが難しい。
→保育者間でディスカッションし合いながら、共に教育を進めていく（システム作り）。
こうして示された軸は、さらに公開時においては、より具体的に「泡遊び」「色水遊び」「砂遊び」の3つの活動に焦点をあて取組を進めてきている。こうした取組は、幼児期の教育が「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」ことの核心である「プロセスの質」の向上に取り組もうとしている点、また、その実現のために子供一人一人を捉え、そのために必要な環境のあり方を考えようとしている点で、まさに現行の幼稚園教育要領が求めるものに正面から取り組もうとしていると言えよう。

⇒公開保育当日までの期間は、直接園を訪問せずにメールでやりとりする場合も多くあります。その過程における ECEQ 実施園の取組や、「問い」として示された課題等について記載します。

3. 公開保育後のカンファレンスにおける外部から見た良さや課題

公開保育においては、一人一人の子供の実態を的確に捉えるために記録の採り方を工夫し（写真を用いて「吹き出し」という手法で子供を捉えようとする方法や、子供の活動のプロセスの把握をMAP型で把握する等）、環境としての素材や教材の可能性への研究や実践について開示され、その開示に基づき参観者からも多様な見方やアイディア等を受け、園の教育実践の質向上を考える上で非常に質の高い取組であると考えられる。

⇒公開保育当日に ECEQ 実施園が示した「問い」に対する参加者の意見を集約します。午後の分科会後の全体会にて報告された内容をまとめ、ここでの内容がSTEP5へ繋がります。

4. 事後の園内研修において整理された良さや課題並びに課題解決の方策

公開保育後、A幼稚園ではSTEP5以前に、公開保育当日に参加者から寄せられた様々な意見を整理することから始めた。その上で、「泡遊び」「色水遊び」「砂遊び」の3つの各遊びについて寄せられた課題の中で深める必要のあるものについて検討を行った。

●泡遊び・・・関わり方についての具体的な課題と、自分たちの求めるものとの意識の違いについて検討。(結果) 寄せられた意見は、実はSTEP 2で示された課題意識『戸外遊びは3つの学年が入り混じっているため、各保育者がどこまで踏み込んで関わってよいのか躊躇してしまう。』に起因するものであり、改めて次の点が確認された。

→個人レベルでの子供の姿や手立てに対する情報共有や意見交換は実施されているが、園全体としての「仕組」としては確立されていない。意見の多様さは豊かさであることの再確認の必要性。個々の保育者が提案し、その土俵について意見を寄せ合う(肯定的に意見を寄せる)ことの必要性や、それを行う具体的な「仕掛け」の必要性が確認された。

●色水遊び・・・「泡遊び」同様に、関わり方についての具体的なレベルで寄せられた課題と自分たちの求めるものとの意識の違いについて検討。(結果)「泡遊び」との違いとして、「泡遊び」という活動(教材)が持つ、構造的に着目する必要があること(年齢によって楽しみ方や、経験できることの違いに目を向けることの必要性)。また、それを踏まえた素材や環境の提供のあり方についての検討の必要性について確認された。

●砂遊び・・・道具や使用方法に意識が向かい過ぎることの前段に、改めて「幼児理解」の重要性についての検討。(結果)一人一人の幼児を丁寧に理解しようとする態度や実践はこれまでも園において取り組まれてきたことである。それを更に向上させていくためには、抽象的な観念論ではなく、具体的な取組を更に生み出すことの必要性が確認された。

以上のことを踏まえ、A幼稚園では次のような課題解決へ向かっていくこととなっている。

○担当の遊びグループは作らず進めてみる。

○写真を利用してみる。

吹き出しを皆で考えることで、それぞれの子がどんなことを感じているのか、どんな楽しみ方をしているのか、どんなことをしたいと望んでいるのか等を探り、それを記録として残していく。これらの吹き出しを、個人の成長の記録を書く上でも利用する。

○ボードを利用してみる

自分がチャレンジしてみたいと思っていること。他の保育者に投げかけたいこと。相談したいこと。こんな遊びが見られるようになってきた等、ボードに書き込んで皆で共有していくのはどうだろうか。

○週に1回は、グループで教材研究をする時間をつくる。

グループで話し合った内容も簡単にまとめ、ボードに貼って他のグループに知らせる。

⇒この項目では、公開保育後の振り返りの園内研修により整理された良さや課題を明記します。その際に、課題に対する取組方法等をどう考えたのか、その点についても記載できるとよいでしょう。

5. まとめ

今回の一連の取組の背景には、「異年齢の子供達と一緒に遊ぶことの意味を理解し、それらを生かしたい。」「保育者間でディスカッションし合いながら、子供の経験や育ちを共通理解し、それを環境構成や援助に繋げていきたい。」といった課題意識が存在していた。「戸外遊び」は、異年齢の子供たちが交流しあう場としての園庭や戸外ならではの活動であり、だからこそ、より多様な情報交換や連携が保育者間で実施されることで実践の質が更に向上するのではないかと、極めて組織として具体的に課題の把握の意識化・共有化することを志向した取組だと言える。

個々の保育者が一人一人の子供を十分に受け止め、丁寧に対応するという、自分たちの指導の姿勢の重要性を改めて確認するのみならず、子供の育ちの保障のためにより連携が求められる園庭遊び・戸外遊びに目を向けることで、これまでに増して同僚から学び合う取組を組織的にを行い、それが個々の保育者に還元されるというよい循環を生み出し、仕組作りへの意識が醸成されてきている点にも、今回の公開保育による取組が成果を示している点だと言えよう。

今後は、これまでも取り組んできている点ではあるが、幼児期の教育のあり方について、更に多様な視点から研修や研究を重ねることを通して、それを保護者や社会に発信すると共に、若い保育者の育成に取り組まれ、幼児教育の価値や意義、そしてその専門性を共有する社会の実現に向けて努力されていくことが期待される。

大妻女子大学 岡 健

⇒項目 1 ～4 までの中で記載できなかった、課題解決に向かう園の姿勢や同僚性に関する視点についても記載するとよいでしょう。

〇おわりに

ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の開発に当たっては、本財団がこれまでの調査・研究を通して、全国の私立の幼稚園及び認定こども園において、日々の実践の振り返りを行うための一つの手法として考えてきたものです。この研究は、その過程における大きな特徴として、日々現場で子供たちと共に過ごす保育者が公開保育に参加し、その園の実践を見て、共に考え、振り返りを行うことでよりよいものにしてきたことがあげられます。いわゆる「臨床」的立場で、現場の声を教育活動に反映させ、より質の高い教育実践が行われるようにと願ってのことです。本財団では、目の前の子供の姿から、また現場から学ぶといった姿勢を重視して、様々な研究研修事業を行っておりますが、今後も臨床的視点を十分に活用しながら、この取組を全国に普及させてまいりたいと思っております。

子ども・子育て支援新制度が施行された今、この制度において教育・保育の質のどこがどのように改善され、子供たちの生活や遊びが充実し笑顔が増えたのかということを改めて検証することが必要となります。本財団が指向するこのシステムが、全国の幼児教育の質の向上に貢献することができれば幸いです。

これまで数年にわたり改善し続けた本システムは、時代と共に更なる改善が求められることは言うまでもありません。今後も改善を図りながら、幼児教育の質の向上へ貢献してまいりたいと思います。

この「ECEQ コーディネーターハンドブック」が、ECEQ コーディネーターに寄り添うものであるようにと願います。



Q&A

Q ECEQ 公開保育のアンケートの結果や当日の意見を整理し園内でまとめていく時に、ECEQ コーディネーターはどういう手順で進めるとよいのでしょうか。

(特に冒頭、切り出し方について)

A 「ECEQ 公開保育の後、どんな風に園内で整理されたのでしょうか。教えてくださいませんか。」とまず、保育者間で ECEQ 公開保育の際の意見やアンケート等をどう活用し、話し合い、整理してきたか、振り返りの現状をまず確かめる必要があります。特にどのようなプロセスでの振り返りを行ったのか、それによって整理が付いた具体的なものは何か（作成資料等を含めて）、ECEQ 実施園の保育者と確認の作業をしましょう。振り返りのプロセスの中で、どのようなことに気づき、議論の焦点がどこだったのか、ECEQ 実施園の保育者との対話の中で探ってみることを通じて、園の良さ、大事にしていること、もっと工夫したいこと、課題とこれからの改善への手立ての整理付けを行いましょう。

Q 課題を改善していく手立てとしての具体案等が、ECEQ 実施園の保育者から有効なものが発案されない場合はどうすればいいのでしょうか。

A 園内の振り返りで作成した表や資料があれば、その説明の具体化を求めると、具体案が ECEQ 実施園から出てくるかもしれません。ECEQ 公開保育参加者からの意見や問いへの応え等をヒントにしながら、もう一度軸を組み直して話し合う等し、園の保育者が納得できるものを探り、「じゃあそのためにどんな仕掛け（仕組）を園内で作ってみましょうか。」と問い掛けてみてはどうでしょう。特に課題への改善の具体案は今、現在やっていることにプラスアルファでできる範囲の手立てが現実的です。

Q 保育者間で見解に矛盾しているところには理由があり（園がこだわっているところに矛盾が集約される、と言われますが）、園内の保育者間の議論ではゴールイメージが共有しにくかったり、合意形成ができなかったりした場合は、どうその矛盾を整理（止揚）すればいいのでしょうか（STEP5のゴールイメージの指標）。

A 具体案が仮に出てこなくても、ECEQ 実施園の保育者で「今後ここを意識していこうね。」とか、「こういうことを取り組んでいこう。」というイメージが漠然とでも共有できれば、それがこの段階でのゴールイメージです。特に保育者間で矛盾しているところは、その園の大事にしている良さと課題が表裏一体となって出ていることがあります。保育者各々で異なる見解、理由付けが出てくるかもしれません。合意形成は一つの意見に集約されることではなく、多様な見解が生まれることで実践の幅や見方が広がると考え、こういう考え方もあるしこういうやり方もあると列挙しながら、優先順位や実現可能性の順位はどうなのか等々、いろいろな軸を立てながら整理するのもよいでしょう。

Q ECEQ 実施園の保育者との振り返りの対話の中で、もし場が煮詰まったり、袋小路に入ったり、一部の保育者との対話に終始したり、あるいは園の保育者を不愉快にさせる言葉を言ってしまったら、ファシリテーターとしてどう対応すればよいのでしょうか。

A 休憩を入れたり、お茶菓子を出したり、アイスブレイクを入れる等して、クールダウン（気持ちを切り替える）する間を取りましょう。とにかく場数（経験）を踏むしかありません。失敗を恐れずに、どうしても難しい場合はその日は中断させてもらい ECEQ コーディネーターの先輩に助言を仰ぎましょう。

Q 振り返りの際に ECEQ 実施園内の人間関係等から話合いが進まなかったり、逆に話が盛り上がり具体的なものが多すぎてまとまらなかったりした場合はどうすればよいのでしょうか。あるいは園長の思いや考えと、保育者との考え、方向性にズレが生じた場合はどう調和させていけばよいのでしょうか。

A 同僚性が発揮されていない園では具体的な話があり出てこないかもしれません（園長や主任の顔色を見て話す保育者もいるかもしれません）。その場合はまず話しやすい雰囲気を作る必要性があります。園長と他の保育者との課題意識のズレがある場合等は、教育・保育の質向上に帰する視点で ECEQ コーディネーターが整理して（とりあえず園長の意見も汲み取りつつ）、話合いが子供の姿を中心に活発になるように努めましょう。逆に同僚性がよすぎて意見が多面的すぎるケースもあるでしょう。この場合はポイントを決めて整理していく必要があるでしょう（優先度の高いものか、派生的な課題か、実現性の高いものか、将来的な展望、希望等）。

Q 振り返りの方向性が園側の大事にしたい思いであったとしても、これは教育・保育の質向上に向けたものとはずれていると感じる場合はどうすればよいのでしょうか。ECEQ コーディネーターが例示や見解を述べてもよいのでしょうか。ECEQ コーディネーターの価値観を押し付けてしまわないように、でも問われた場合に（問われなくても）どこまで自分の意見を出してよいのでしょうか。

A 「子供にとってどんな意味があるのか教えてください。」と尋ねながら、内容にもよりますが「これは別の課題としてとりあえず別枠で押さえておきましょう。」と仕分けることも必要かもしれません。あるいは ECEQ 実施園として重要なテーマと課題として整理を深める場合もあるかもしれません。また ECEQ コーディネーターはコンサルタントでもアドバイザーでもありません。「支援者」として ECEQ 実施園内の保育者に働きかける存在です。価値観を押し付けるのではなく、場合によっては違う見解や例示を提示することから議論を深める役割が求められます。

Q 支援のポイントとして、組織風土（同僚性）の醸成と幼稚園教育要領等への順守があります。振り返りの中で幼稚園教育要領の5領域の視点での話し合いへ ECEQ コーディネーター側から踏み込んでよいのでしょうか。

A：ECEQ 公開保育参加者から出てきた意見や見解であれば、それを受け止めていく必要がありますが、あえて ECEQ コーディネーター側から意図的に踏み込んでいく必要はありません。仮に ECEQ 公開保育参加者から「問い」に対する応えの中から5領域の視点における育ち等へ言及した意見があり、そこから ECEQ 実施園の保育者が「問い」に関わる遊びのそれぞれに5領域の視点で学びを考えていこうとなれば、それはそれで園内研修の振り返りに通じる意味があると思われますが、ECEQ コーディネーター側からの提起によって、貴重な「問い」による具体的な議論が抽象的な内容になってしまってはもったいないし、避けるべきでしょう。

ファシリテーション参考図書のご案内

★が多いほど上級向け

基本を知る

- ★『人間関係トレーニング』ナカニシヤ出版、津村俊充 編、山口真人 編、2005 年
- ★★『ファシリテーター・トレーニング』ナカニシヤ出版、南山大学人文学部 心理人間学科 監、津村俊充 編、石田裕久 編、2010 年

総合的に学ぶ

- ★『生涯学習支援のための参加型学習のすすめ方』ぎょうせい、広瀬隆人 著、沢田実 著、林義樹 著、小野三津子 著、2000 年
- ★★『プロセスエデュケーション』金子書房、津村 俊充 著、2012 年

実践ワークブック

- ★『ファシリテーターの道具箱』ダイヤモンド社、森時彦、ファシリテーター の道具研究会 著、2008 年
- ★『参加のデザイン道具箱』世田谷まちづくりセンター、1993 年
- ★★『Creative Human Rerations』プレスタ임、星野欣生・津村俊充 共著、2012 年
- ★★『Creative O.D.』プレスタ임、柳原光 監修・著作、1992 年

チームづくりに効く

- ★『チーム・ビルディング 人と人を「つなぐ」技法』日本経済新聞社、堀公俊 著、加藤彰 著、加留 貴行 著、2007 年
- ★『チーム・ファシリテーション 最強の組織をつくる 12 のステップ』朝日新聞出版、堀公俊 著、2010 年

ファシリテーターってどんな人？ファシリテーションって何？読み物として

- ★『対話する力』日本経済新聞出版社、中野民夫 著、堀公俊 著、2009 年
- ★『ワークショップ』（岩波新書）岩波書店、中野民夫 著、2001 年
- ★『ファシリテーション 実践から学ぶスキルとところ』岩波書店、中野民夫、森雅浩、鈴木まり子、富岡武、大枝奈美 著、2009 年

その他

- ★★★★『ダイアログ』英治出版、デヴィッド・ボーム 著、金井真弓 訳、2007 年
- ★★★★『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社、フラン・リース 著、黒田由貴子 訳、2002 年

参考様式 1 申請書

平成 年 月 日

(公財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長 田中 雅道 様

住 所

園 名

代表者名

㊞

平成 年度 E C E Q実施申請書

E C E Q（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）について、別紙のとおり実施を希望するので、申請いたします。

(申請書別紙)

基礎情報内容	ECEQ 実施園情報
1. 法人名	
2. 理事長名	
3. 園名	
4. 園長名	
5. 担当者名	役職名 氏名
6. 住所	〒
7. 電話番号	
8. FAX番号	
9. メールアドレス	
10.園児数	人
11.学級数と人数	年長組 学級 名 年中組 学級 名 年少組 学級 名 0～2歳児 名
12.教員	人
13.職員	人
14.ECEQ 公開保育実施予定日	平成 年 月 日
15.ECEQ コーディネーター名 (全員の名前を記載)	
16.備考	

＜送付先＞102-0073 東京都千代田区九段北 4-2-25 私学会館別館 4 階
 (公財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 ☎03-3237-1957

参考様式2 園長・主任等への園の現状についてのヒアリング記入表

開催県 _____

園名 _____

記載者氏名 _____

ECEQ コーディネーター名 _____

○ヒアリングに入る前に「はじめに」「ECEQ コーディネーターが知っておきたいファシリテーターとしての心持ち」を熟読し、下記のことをご説明ください。

1. ECEQ 公開保育を含めた学校評価の進め方についての説明

(1) 本財団としてのECEQ 公開保育を活用した教育・保育の質向上の取組の考え方について

(2) ECEQ (公開保育を活用した幼児教育の質向上システム) について

(3) ECEQ 公開保育への取組並びに方向性について

(4) ECEQ 公開保育当日までの準備について

2. 園長、主任等に園の現状についてヒアリング (園長・主任の考えを丁寧に聞き取りましょう)

(1) 建学の精神						
(2) 教育目標 指導計画						
(3) 園の考えとして大切にしているところ						
(4) 園の組織について						
園児数	満3歳 名	3歳児 名	4歳児 名	5歳児 名	計	名
学級数	満3歳	3歳児	4歳児	5歳児	計	学級
	縦割りの場合クラス数					
職員数	園長 名	主任 名	学級担任 名	フリー 名	計	名
	事務 名	給食 名	バス 名	その他 名		

(5) これまで取り組んできた学校評価について
自己評価について
学校関係者評価について
第三者評価について
(6) これまでに行った公開保育について ※よかった点、意見等
(7) 園運営上において、園長や主任の悩みや困っていること課題や改善していきたいこと
(8) その他、聞き取りの中で深く話を聞いておいたほうが良い点を記載

参考様式3 STEP5終了時アンケート用紙

【ECEQ実施園 アンケート】

このアンケートは、公開保育（外部の方々に保育を見てもらうことも含む）や公開保育後の話し合いを終えての感想をお訊ねします。記述式で具体的にお書きください。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

1. あなた自身のことについてお答え下さい。

①年齢（ 歳）

②（ 女性 ・ 男性 ）

③これまでの勤務経験年数をお教え下さい。

幼稚園勤務（ 年）・保育所勤務（ 年）・幼保連携型認定こども園（ 年）

合計 年

④現在の職場での具体的な職名・役職（教諭、主任等） （ ）

⑤担任の場合は、担当学級の年齢をお書き下さい。 （ ） 歳児担当

2. 公開保育や公開保育後の話し合いを終えての感想をお聞きします。

以下の1～4の各項目について、あてはまるものを一つだけ選んで番号に○印をお付け下さい。また、各項目の内容について具体的にお書きください。

	1 全くあてはまらない	2 あてはまらない	3 どちらともいえない	4 あてはまる	5 非常にあてはまる
① 公開保育に向けての準備や話し合い等を行ってみて、改めて園の良さを感じることができた。	1	2	3	4	5
良さを感じた方は、どのようなことが園の良さと感じることができたかお書きください。					
② 公開保育に向けて、園の現状を話し合う等の取組を通じて園として新たな課題が見つかった。	1	2	3	4	5
課題が見つかった方は、どのような課題が見つかったかお書きください。					
③ 公開保育に向けての準備や話し合い等通して同僚との関係が良くなった。	1	2	3	4	5
よくなった方は、どのような具体的に変化があったかお書きください。					

④公開保育中の参加者からのアドバイスは参考になった。	1	2	3	4	5
参考になった方は、どの場面においてどのようなアドバイスがあったか具体的にお書きください。					
⑤参加者(外部)からの所感から自分が自覚していなかった良さに気付くことができた。	1	2	3	4	5
気付いた方は、どのような良さに気付くことができたかお書きください。					
⑥参加者(外部)からの所感から自分が自覚していなかった課題に気付くことができた。	1	2	3	4	5
気付いた方はどのような課題に気付くことができたかお書きください。					
⑦園の課題を解決する方法(方向性)が明らかになった。	1	2	3	4	5
⑧自分の課題を解決する方法(方向性)が明らかになった。	1	2	3	4	5
⑨公開保育を行うことは自園の教育・保育の質向上に有効である。	1	2	3	4	5
⑩ECEQコーディネーター(支援者)は自園の教育・保育の質向上に有効である。	1	2	3	4	5

3. その他ご感想（実感した効果、難しさ）をお聞かせ下さい。

--

ありがとうございました。

参考様式4 報告書

公開保育を活用した幼児教育の質向上システム

ECEQコーディネーター報告書

基礎情報内容	ECEQ 実施園情報
法人名	
理事長名	
園名	
園長名	
担当者名	役職名 氏名
住所	〒
電話番号	
FAX 番号	
メールアドレス	
園児数	人
学級数と人数	年長組 学級 名／年中組 学級 名／年少組 学級 名 満3歳組 学級 名／2歳児 名／1歳児 名／0歳児 名
教職員数	人

派遣コーディネーター名	
研修履歴	STEP1 平成 年 月 日 STEP2 平成 年 月 日 STEP3 平成 年 月 日 STEP4 平成 年 月 日 STEP5 平成 年 月 日

STEPを通して

- STEP1やSTEP2で抽出された自覚的な良さや課題

2. E C E Q公開保育実施時の課題等

3. E C E Q公開保育後のカンファレンスにおける外部から見た良さや課題

4. 事後の園内研修において整理された良さや課題並びに課題解決の方策

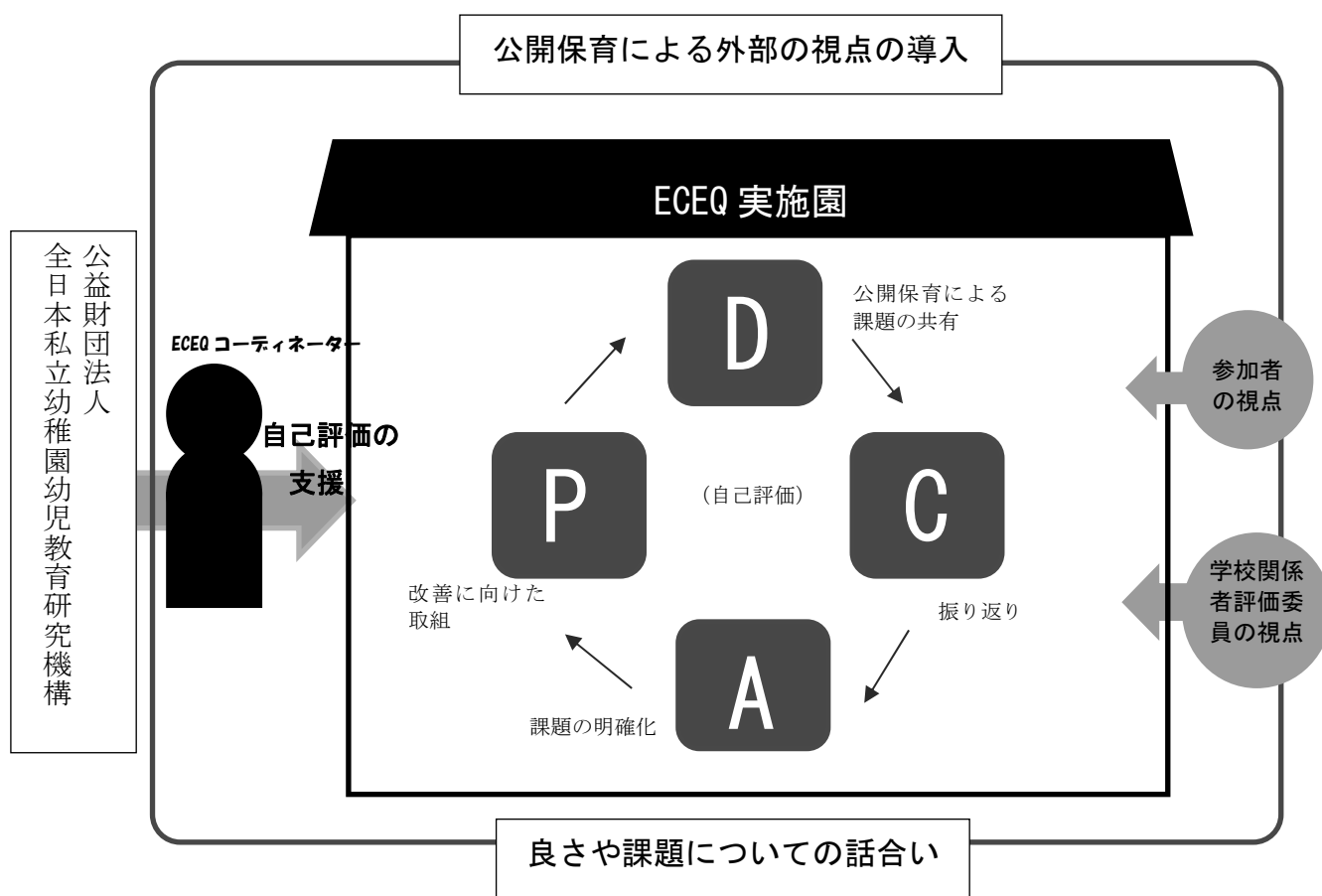
5. まとめ

平成 年 月 日

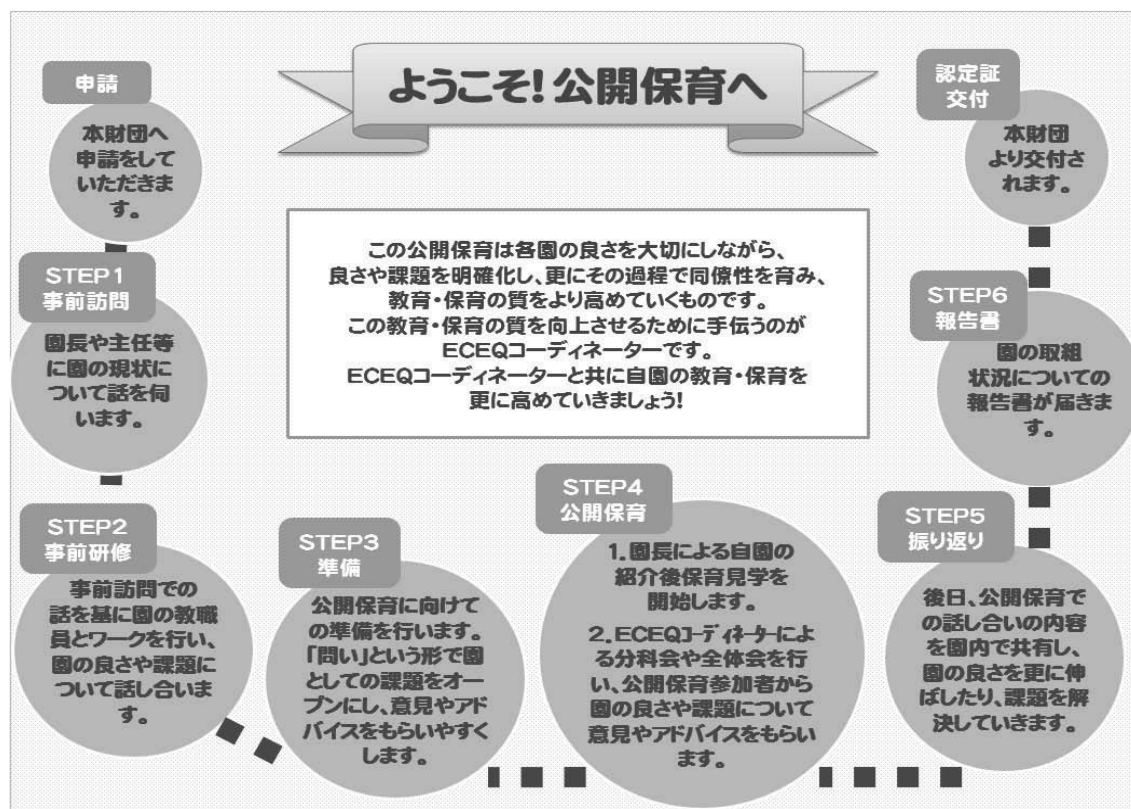
E C E Q実施園園長
担当E C E Qコーディネーター

印
印

説明資料1 ECEQ（公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）の仕組み



説明資料2 ようこそ！公開保育へ



■ 幼児教育の質向上を目指した学校評価の推進に関する研究検討委員会

田中 雅道	京 都・光明幼稚園
安家 周一	大 阪・あけぼの幼稚園
宮下友美恵	静 岡・静岡豊田幼稚園
加藤 篤彦	東 京・武蔵野東第二幼稚園
川原恒太郎	大 分・ひまわり幼稚園
藪 淳一	北海道・大通幼稚園
小野寺靖子	宮 城・しげる幼稚園
高倉 幸世	千 葉・コスモス幼稚園
佐藤 緑郎	埼 玉・大宮みどりが丘幼稚園
西片紀美子	長 野・松本光明幼稚園
村手 敦	愛 知・九品寺幼稚園
濱名 浩	兵 庫・立花愛の園幼稚園
水原 紫乃	広 島・焼山こぼと幼稚園
岡本 和貴	徳 島・わかくさ幼稚園
淵 和子	福 岡・霧ヶ丘幼稚園
吉井 健	鹿児島・認定こども園信愛こどもの園
岡本 潤子	青 森・千葉幼稚園
亀ヶ谷忠宏	神奈川・宮前幼稚園
安達 譲	大 阪・せんりひじり幼稚園
黒田 秀樹	福 岡・きらきら星幼稚園
秦 賢志	兵 庫・はまようちえん
永田 陽子	東 京・大和郷幼稚園
関 政子	東 京・やはた幼稚園
関岡 貴之	東 京・認定こども園多摩みゆき幼稚園

■ 協力者

岡 健 大妻女子大学教授

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が実施した平成29年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

